
シトシトと降り続く雨のブルー

ロキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シトシトと降り続く雨のブルー

【Nコード】

N0290V

【作者名】

ロキ

【あらすじ】

第三次世界大戦が始まり、連日、空襲に見舞われる東京。そういうわけで東京から親戚の住む遠い田舎に疎開することになったミキオ、中学三年生。その疎開先には彼と同じ年頃の二人の少女も住んでいた。ミウとアスカの姉妹だ。しかし遠い親戚とはいえ、これまで一度も会ったことのない三人。一緒に暮らすことになったからといって、簡単に仲良くなれるはずもなかった。しかもミキオは思ったことはすぐ口にする性格。相当毒舌家で我儘。そこに誤解や、ちょっとした不運も重なって、三人の争いは日々絶えなかった。し

かしある日を境にそんな関係が変わる。そしてそれと共にある謎がミキオの前に浮上してくるのだった。ミステリー風味の青春ラブコメ。と言ってもコメディ要素は希薄です。

第一章 ミキオの手紙 1

のどかな星空の下から、爆弾の振る都市へ。

拝啓、エビ夫、元気か？

お前がこれを読んでいるってことは、俺の手紙が無事にお前のもとに届いたってわけだな。まず返事が遅くなったことを詫びるよ。お前は俺の手紙を心待ちにしていただろうに。でもいろいろと思わぬことが起きてるんだ。

俺はこの疎開先に、遠い親戚が住んでいるってことだけしか聞いてなかった。

確かお婆さん夫婦が住んでいるって話しだった。東京じゃ空爆でうるさくて、勉強も手につかないだろうから、静かな田舎に避難しなさいって母に送られてきたわけなんだけど、でもその疎開先に来てびっくりだ。何とそこに、俺と同じ歳くらいの女子二人が住んでいたんだから。

一人は俺と同じ学年で中三、もう一人は1コ下の中2だってさ。

二人の姉妹なんだ。このお婆さん夫婦の子供だってさ。

とにかく驚いたよ。ここの親はどういう神経をしてるんだって思うだろう？

同じ年頃の異性をさ、一つ屋根の下に住まわせるなんて、自分の娘に何かあったらどうするんだよ。

まあ、確かに遠い親戚だから血はつながってはいるんだろうけど（えーと確か、母の母、すなわち俺のお祖母ちゃんの三番目の妹さんの子供、その人が二人の姉妹の母に当たるわけだ・・・でも遠過ぎるだろ？ 猫は猫でも、ウミネコと普通の猫ぐらい遠いよ）。しかしそれより何より、俺は今までこの二人に会ったこともないん

だ。だから親戚って言われても全然ピンと来ない。

しかもさあ、おばさん夫婦って話しだったけれど、実は父親は早くに亡くなっていて、母と娘の三人暮らしだった。いったいどんな手違いがあったのか知らないけれど、母の情報は無茶苦茶だよ。

それで俺は電話で、母にすぐ問い質した。

でも母も知らなかったらしい。まあ、あの母が、俺をこうやって異性に安易に近づける訳もないから、その結果は予想してたけど。何かあったら大変だって、母はすぐに帰って来いとか言い出して、でもまたすぐに電話があって、やっぱりここ以外に疎開先はないってさ。

お前も知っての通り俺の父は東京生まれ、代々官僚の家系だ。母も東京まれ東京育ちで、母の親戚もほとんど東京か横浜に住んでいる。結局、適当な疎開先はここしかないんだってさ。

しかしそれにしても大変だな。女性と一緒に暮らすというのは。

俺は一人っ子だから、こんな生活送ったことなかった。お前には確か姉がいたよな。だからわかるだろう？ 女って生き物がイチイチ細かいことにうるさいことに。

この家に到着早々、俺は細かなルールを色々言い渡されたんだぜ。食べた茶碗は台所まで持っていけ、風呂の掃除は当番制、起きたらすぐに布団をしまえ。

そんなの全部お手伝いさんの仕事じゃないかって言ってやったら、彼女らは啞然としてたな。あんた、今までどういう生活送ってきたのだって。

まあ、俺の実家にもお手伝いさんなんていなかったけど。ちょっと金持ちの振りをしてるんだ。

しかしさ、俺が世話になるってことで、この家にけっこの額のお金が出たはずなんだ。俺の食費という名目でさ、母ははっきり言わなかったけど、でも他人の家だからって何も遠慮はいらないの

よって言っていたぐらいだから、きつとそうだ。

それなのにこの俺が家事や掃除までやらないといけないなんて、話しが違うと思わないか？

しかも食卓の上のおかずが、どうにも質素なんだよ。

普段の母の料理のランクの半分以上だよ。俺にこんな質素な食事をさせないためにも、かなりのお金を送ってくれているはずなのに、いくら戦時中とはいえ、度を越している。

きつとおばさんは他のことに使ってるんじゃないかな。もしかしてそのお金で自分の借金なんかを返したりして。

一見、真面目そうで、そんなふうには見えないけど、人は裏で何をやってるかかわかったもんじゃない。

俺はさあ、本気で悩んでいるんだ。

この家の人たちとろくに喋らず、馴染まず、ただただ戦争が終わるのを待つのか。それとも何とか割り切ってこの家で上手くやってくことにするか。

と言っても、上手くやっていく自信なんて少しもないんだけど。

エビ夫、お前は俺の性格をよく知ってるだろ？ 誰にでも好かれるお前だったらともかく、偏屈でひねくれ者の俺には到底無理さ。受け付けない者は受け付けない。馴染めないものは馴染めない。

ああ、早く東京に帰りたいたいよ。

去年の今頃は毎日お前と遊んでいたのにな。まさかこんなことになるなんて想像もしなかった。

戦争さえなければ、俺がこんなクソ田舎に疎開することなかったんし、戦争さえなければ、こんな悩みで頭を悩ますこともなかった。

全ては戦争のせいなんだよな。あれが俺たち日本人の運命を根底から変えた。

とにかく心の底からお前の無事を祈りながら、返事を待っている。

いや、もしかしたら手紙がつくより先に、この田舎に耐えきれなくなつて俺が返つてきたりしてな。

じゃあな、まだまだ名残惜しいけれど、とりあえず今日はここで筆を置く。

○月×日 ミキオより。

第一章 ミキオの手紙 2

返事ありがとう。戦場でも郵便配達員はちゃんと仕事しているみたいだな。安心したよ。

お前はまだまだ東京は戦場じゃないって反論してきたけども、俺に言わせれば充分、戦場だよ。だっていつ爆弾が降ってくるかわからないんだから。

それに引き換え、ここじゃそんな心配は何もいらぬ。東京で空を見上げるときは、爆弾から逃げるためだったけれど、ここでもっばら星を見るためだ。

お前も早く疎開したほうがいいよ。夜はぐっすり熟睡できるし、テレビも安心して最後まで見ていられるし（と言っても田舎のチャンネル数は少ないけど）。

お前はもしかしたら田舎に何か偏見でもあるのか？ その辺に猿や牛やイノシシがウヨウヨいて、若い奴らも農民みたいな恰好をしていると思うているのか？

そんなこと全然ないよ。東京の街を歩いている若者たちと、ファッションや髪型なんか全然変わらない。まあ、ここには渋谷も池袋もないから、欲しいものはすぐに手に入らないけれど、でも戦争が起きた今、東京でも物不足は深刻だったじゃないか。

ここにいればとりあえず空襲の心配はしないで済む。それだけで疎開する必要はあり余るほどあると思う。

どこにも疎開する当てがないなら、お前もここに来てもいいんだぜ。お前と一緒に暮らしたらこんな田舎でも毎日楽しいだろうから。何も遠慮することはないさ。

俺はとにかくこの家で戦争が終わるのを待つことにした。この家で上手くやれるとは到底思えないんだけど、母にもきつく言われた

しね。しばらく我慢することにしたんだ。

おっと、お前を焦らせるのもあれだから、この話しはこれくらいにして、もっとその二人の姉妹のことを詳しく教えろっていうリクエストに応えようかな。でもまだまだ俺も、あいつらのことはよく知らないんだけど。

えーと、まず、妹のほうがアスカ、俺より一つ下の十四歳。

こいつはけっこう気が強い。

イチイチ何かと俺にこの家のルールを押しつけようとしてくるのは彼女のほうで、彼女と顔を会わせると思わず緊張してしまう。ちゃんと風呂を洗ったのかとか、今日のお茶碗を洗う当番はあんたでしょとか、何かにつけて俺に口うるさく当たってくる。

アスカとは会話する度にケンカみたいになるんだよな。逆にケンカみたいになったときだけ、会話が成立する感じだよ。普段はぎこちなくて、よそよそしいのに、そう言うときだけ、もうずっと昔からの知り合いみたいになるんだ。

さっきもさあ、俺が自分の部屋でまさにこの手紙を書こうとしてたら、アスカが勝手に襖を開けて部屋に入ってきたんだぜ。

彼女はノックしたとか、何度も声を掛けたとか言い張るんだけど、たとえそうでも返事があるまで決して開けちゃいけないものだろう？それが都会のルールだ、いや、日本中どこだってそうさ。

今回は手紙を書いてたからいいようなものの、俺だって色々やることはある。洒落にならないことをするときだってあるんだ・・。

だからちよつと厳し目にさ、人の部屋に入るときは必ずノックをしろと、俺は彼女を叱ったんだ。じゃあ、彼女も年下の癖に言い返してきて、それで喧々諤々の大論争さ。

なんかよくわからないんだけど、彼女は学校とか駅までの道を俺

に教えてやれっておばさんに言われたらしく、それで俺の部屋にやって来たみたいなんだけど、俺に文句を言われたものだから、臍を曲げてしまった。

あんたなんか一人で学校の場所見つければ、とか言って消えてったよ。

まあ、学校が始まるのはまだ少し先だから別にいいけれど、かなり冷たい奴だと思わないか？　ちよっとばかり腹が立ったにしろ、親に言いつけられた責任は果たせよなって感じだろ？　だってそれとこれとは話しが別じゃないか。

とにかくアスカはそういう奴なんだよ、一言で言えば未熟なガキさ。思い出しただけで腹が立ってくるよ。

そんなアスカの話しはそれくらいにしておいて、次は姉のほう。姉はミウっていう名前。俺と同じ歳、同じ学年、まだ始まっていないけど同じクラスになる予定。って言ってもクラスは一つしかないらしい、田舎だからね。

ミウは大人しくて、生真面目で、暗くて、終始オドオドしていて、無駄に元気な妹のアスカとは正反対のタイプだと思う。

俺がこの村に初めて着いたとき、駅まで迎えに来てくれたのはそのミウのほうだったんだけど、何とさあ、ミウは俺の名前を書いたボードを持って立ってたんだぜ、驚きだろ？　混雑した空港で、日本語のわからない留学生を迎えるみたいな迎え方をしやがって。

その初対面のときから、ミウはもう独特の雰囲気を漂わせていた。まず声がかく小さいんだ。話すときも常に俯き加減で、なかなか視線を合わせようとしない。だから最初、俺は彼女に嫌われているのかと思ったよ。まあ、でもどうやらそうじゃないようだ。彼女はそんな性格なんだよね。

とはいえ実は会って早々、俺はミウにちょっとした意地悪をして

しまったんだ。だからそんな誤解をしてしまったんだけど。

いや、意地悪と言っても別にそんな酷いことはしてないよ。さっき書いた通り、彼女は俺の名前を書いたボードを持って駅前に立ってたんだけど、俺はそんな彼女をあえて無視しただけさ。

この駅はほとんど利用者もいなくて、電車は一時間に一本とかそんな感じで、駅を出たのもそのときは俺一人だった。

俺が改札口から出てきた瞬間、ミウのほうも、恐らく年格好とかで、俺が目当ての人間だってことはすぐにわかったと思う。

俺もミウが俺の名前を書いたボードを持っていたから、彼女が俺を迎えに来てくれたんだってすぐにわかった。

そんな共通理解が、彼女と一瞬交差した視線の中で成り立ったのに、俺は彼女を無視したんだ。

何でそんなことを俺がしたかなんて、イチイチお前に説明する必要はないだろ。

お前ならわかってるはずだ。俺がそういうのを面白がるタイプだっていうことを。別に悪意はないんだけど、こういう生真面目な奴を見ると思わずからかいたくなるんだよね。

しかし面倒なことをしてしまったことは事実で、俺はけっこう自分の行いを後悔したよ。

彼女は首を捻りながら、俺のほうをチラチラ見てくるんだ。俺に声をかけないといけないと思いつつも、自分から話しかけるのが恥ずかしいのか、ずっと同じように躊躇してた。

たまにわざとらしくこっちにボードを見せてきたりして、俺に気づいてくれてアピールしてきてさ、何だかそれを見ていたら、すごい悪いことをしたような気になった。

でも俺も一回無視した手前、声を掛けにくくて、だからお互いどうしたらいいのかわからない感じで、かなり無駄な時間を費やしてしまったよ。

まあ、結局、仕方なく俺のほうから彼女に声を掛けて、俺が君の探しているミキオだと名乗ったけど、そのときはとんでもなくバツが悪かった。

彼女はなぜ俺がボードを見たのに、すぐに声を掛けてこなかったのか、不思議に思っているだろうな。まあ、そういうこともあって、ミウとはずっとギクシャクしたままなんだ。

いや、多分、そんなことがなくても彼女とはギクシャクしていただろうけど。

どうも大人しいのか、暗いのか知らないけど、普通に会話が成り立つ相手とは思えない。妹のアスカと違った意味で、かなり面倒そうな奴だよ。

二人の紹介はそれくらいかな。

とにかくこの二人の姉妹、顔は似ているけど性格は少しも似ていないってことさ。

服装の趣味なんかも妹のアスカはTシャツにGパンを履いていることが多いけど、姉のミウは地味なワンピースだし。

そして二人とも、ひと癖もふた癖もありそう。

でももしかしたらお前は姉のミウのほうが好みかもしれないね。

お前はとにかくおしとやかで、生真面目な女性がタイプだったよな。

いや、妹のアスカみたいな性格の子に惚れてたこともあったっけ

？ まあ、機会があれば二人の写真を送ってやるよ。

でも期待はしないでくれよ。この二人とそんなに仲良くなれそうにないから。俺から写真を撮らせてくれなんて、口が裂けても言えない。

そんなこと言ったら勘違いされそうだ。俺が彼女たちに気があるんじゃないかって。そんな誤解、死んでもされたくないね。

あーあ、しかしもう書くことも特になくなったんだけど、手紙を書き終えるのが惜しい気分だ。ペンを置いて、この便箋を封筒に入

れてしまうのがすごく寂しいよ。

なんて言うか、まるで長電話を切る感じ。もちろん早くポストに投函しないと、お前からの返事が来ないから、仕方なくこの辺でこの手紙を終えることにするけど。

それにさ、この手紙を書き終えたら、俺は何にもやる事が無くなる。お前の手紙が来るまで本当に暇になるんだ。

東京でお前と遊んでいたときは、一分一秒が砂時計からこぼれ落ちるような勢いで時間が過ぎていったのに、ここでは時間がまるで進んでいかない。退屈しのぎにやることなんて何もないんだ。ここでの俺の唯一の楽しみはお前宛ての手紙を書くことぐらいだ。

だけど俺も往生際が悪いよな。さっさとお前に別れを告げて、手紙をポストに入れに行かないと。

じゃあな、エビ夫。爆弾がお前の身体を避けるよう、ここから祈ってるぜ。

○月×日 ミキオより。

第一章 ミキオの手紙 3

前の手紙で、俺が最も興味深いことを書いていないってお前は怒っていたな。わざと避けてるんじゃないかって。

そういうわけじゃなかったんだ。ただ当たり前の生活のことを書くのは難しいものなんだ。お前に指摘されるまで気づかなかっただけさ。

もちろん二人とは別々の部屋だよ。当たり前じゃないか。だいたい俺は神経質だから、他人と同じ部屋で寝られるわけがない。

田舎の家だけあってけっこうでかいんだ。いわゆる旧家って感じでもないんだけど、でも住人が一人や二人増えたってどうと言うことのないくらいの広さで、いとも簡単に俺を飲み込んでいる。

俺はそんな家の二階にある六畳の和室をあてがわれている。

日当たりの悪い最悪の部屋で、もちろん鍵もなければ、テレビもない。クーラーもないし、もちろんパソコンもない。

まあ、パソコンは戦争のせいでネットが使えないから、あっても大して意味もないけれど。その事情はもちろん東京と同じだよ（メールが出来るなら、だれがこうやって手書きで手紙なんて書くかよ）。

俺のその部屋の窓から中庭が見える。東京で庭があるなんてどんな大富豪だよって感じだろうけど、ここではそんなの当たり前前みたいだ。家の周り全部が庭みたいなものさ。

その中庭に、俺の服も彼女たちの服と並んで、物干し竿に干されているんだけどさ。食卓と一緒に食事をとっているときよりも、この光景を見ているときのほうが、何か彼女たちと同じ屋根の下で一緒に暮らしているっていう実感を感じるんだよね。

俺のお気に入りシャツの横に、見覚えのあるミウのワンピース

とか、アスカのTシャツが同じように干されて風に揺られているのを見ていると、不思議な感覚を覚えるよ。

まあ、そんなことは置いて、本題に戻す。えーと、廊下を挟んだ向かいがアスカの部屋で、その隣にミウの部屋がある。

おぼさんは一階に寝てて、風呂もトイレも一階にしかない（一応、水洗だよ。もちろんお湯を沸かすときも木を燃やして、フーフー息を吹きかけたりしない、ガスだ。水道だってある。井戸水を飲んでるわけじゃないぜ）。

リビングルームも（居間と呼んだほうがしっくりくる和室だけど）一階にあって、俺がテレビを観られるのはその部屋しかないんだ。アスカの部屋にも、ミウの部屋にもテレビはあるらしいから、この部屋のチャンネル権は自然と俺のものになっている。

と言ってもここは田舎だ。ろくな番組がやってない。チャンネルは東京の半分以下。それは前にも書いたっけ。

でも夕食が終ると俺はさっさと自分の部屋に引き上げる。

一応俺だって気を遣っているんだ。明らかにこの家族の中で俺は邪魔者だからね。

だけどテレビも何もないから、それから寝るまでの時間が果てしなく長いんだ。

仕方ないから勉強したり、読書したりしている。けれども最高の暇潰しはやっぱりこれだよ。お前宛ての手紙を書くことさ。

まあ、お前に気持ち悪がられるかもしれないけど、手紙を書いているとき、ずっとお前の顔が浮かんでいる。

でもそのときが最高に楽しい時間なんだよ。お前のこと、東京のこと、そんなことを懐かしく思うことが。手紙を書いていると、あの懐かしい時期にトリップ出来るんだ。

たまにアイスクリームとかケーキを、アスカとかミウが俺の部屋

に持ってきてくれることがある。もちろんあいつらの自発的な優しさじゃなくて、おばさんの差し金だろうけど。

そのときちょうど手紙を書いているときがあって、俺はアスカに何ニヤニヤしてんのって気持ち悪がられたことがあった。

でも俺は変に誤魔化しはしないぜ。東京の親友のことを考えてたんだって、はつきり言っちゃったよ。

またキャッチボールしようぜ、エビ夫、あの河原で。

おっとまだ手紙は終わりじゃないぜ。何か終わりそうな雰囲気になっちゃったけど、まだまだお前の好奇心は満たせてないよな。

風呂上りの二人に、偶然すれ違ったことはあるよ。そのとき石鹸の香りと、ほてった体温の温もりが感じられて、さすがに俺もちょっとドキドキしてしまう。

でもそんなにはないんだぜ。お前の期待していたようなエピソードは。もしかしてお前は俺のことだから、アスカやミウの部屋に夜中忍び込んだりしているんじゃないかって思っているのかもしれないけど。

ありえない、そんなこと無理さ。そんなことばれたら、おばさんに追い出されてしまうよ。

ただし一度、家に誰もいないとき、彼女たちの部屋に入ったことはある。

夕方、アスカとミウが連れ立ってどこかに外出したことがあって、俺はあまりに退屈だったから、ちよっと家の中でも探検しようかなって気分で、とりあえずアスカの部屋に忍びこんだんだ。

他人の部屋に忍びこむとすぐ胸が高鳴るぞ。泥棒の気持ちじゃなかったよ。多分、泥棒は盗みが目的だけがじゃなくて、この興奮にも病みつきになっているんだろうと思う。

そのとき俺は大胆にもアスカのベッドに寝てみた（別にたいした意味はないよ。いつもアスカが俺に口うるさく布団を片付けろって

言ってくるのに、彼女が片付けてなかったから、ちょっと意地悪でもしてやろうかなってぐらいの動機さ）。

でもあるうことか、俺はそのベッドで眠ってしまったんだ。それはちよつとしたうたた寝って感じじゃなかった。完全にぐっすりと熟睡してたんだ。

玄関の開く音で目が覚めた。

すぐに誰かが階段を上がってくる足音がして、俺は急いでベッドから飛び降り部屋を出ようとしたんだけど、到底間に合いそうになくて、咄嗟にベッドの下に隠れた。

俺がベッドの下に隠れて一秒もしないうちに部屋にアスカが入ってきた。まあ、間一髪でセーフ。我ながら寝ぼけていたわりには素早い行動だったと思う。

だけど彼女は「あれっ？」とか言っている。

何となく部屋の様子がおかしいことに気づいたのか、彼女の紺色のソックスを履いた足がウロウロと部屋の中を行き来しているのが見えた。

俺はやバいって心底焦った。出来るだけ気配を消すように息を止めてみた。今にも彼女がベッドの下を覗くんじゃないかって、気がじゃなかった。

でも違ったようだ。

アスカは着替え始めたんだ。「あれっ」とか言っていたのは、ただ単に服でも探していたんだろうか。Gパンがちょうど俺の目の前にパサッと落ちて、そして靴下も脱ぎ出して・・・。

でももちろん俺はベッドの下から見ているだけだから、アスカの足首ぐらいしか見えなかった。靴下を脱いだとき、ちよつとだけ足の裏が見えたくらいだ（それはびっくりするくらいピンク色だったことに驚いたけど・・・）。

でも何とも言えない体験だったね。ばれたらやばいっていうドキ

ドキと、このシチュエーションのドキドキで、俺の胸は張り裂けそうになった。

着替えてすぐにアスカは部屋を出ていった。階段を下りていった音確かめて、俺はすぐにベッドの下から這い出た。

体中がホコリだらけになってた。あいつはベッドの下をろくに掃除してないようだ。そのホコリを落とさないように気をつけながら、そっと部屋を出た。

結局ばれず、何事もなく終わったけど、でも一步間違えたら大変なことになっていただろうな。これからずっと軽蔑の眼差しで見られて、間違いなく変態扱いだよ。本当にばれなくて良かった。

だけどこのドキドキは病みつきになりそうだ。次はもっときわどい行動に出てみようかな、なんてね。

おっと、どうやらおばさんがお風呂から上がったようだ。「お風呂どうぞ」と俺を呼ぶ声がする。

さっさと風呂に入ってくるよ。俺はいつも最後に風呂に入っている。一応、居候として遠慮しているんだ。

じゃあ、おやすみ、エビ夫、またすぐに返事をくれよ。

俺はお前から来る手紙を楽しみにしながら、いつも下のリビングに降りていくんだ。手紙はテーブルの上、新聞の隣にいつも置かれている。

それでそれがなければがっかりで、あれば天にも昇らん気持ちになるのさ。エビ夫、俺を何度も何度も天を登らせてくれよ。

○月×日 ミキオより。

第一章 ミキオの手紙 4

ここに来て二週間ぐらい経つのかな。長いような短いような二週間だったけれど、とにかくここまで無事に過ごせてきた。しかし遂に目に見える形で俺に災難が降りかかろうとしている。

困ったことになったよ、エビ夫。俺はいったいどうすればいいんだろうか？ けっこう厄介な出来事が一昨日、そしてまたさっき、立て続けに起きてしまったんだ。

もしかしたら俺はとんでもなく不運な時期を迎えているのかもしれない。占いとかであるらしいじゃないか。何をやっても上手くいかない時期っていうのが。きっとそんな時期なんだ。

まあ、愚痴ばかり言っていないで、とりあえず一つずつ順を追って書く。

どうやら俺は姉のミウのことが好きだみたいな誤解を、アスカにもミウにもされてしまったと思う。まずこれが最初の厄介事。

どうしてこうなったのか長くなるけれど説明する。

えーと、姉のミウが中庭で洗濯物を干してたんだよ。俺はさあ、二階の自分の部屋でのんびりしてたんだけど、あまりに退屈だったから部屋の窓からその様子をこっそり眺めていた。

ミウはやたらと丁寧に洗濯物を干していた。ちよつと几帳面過ぎるくらい、一枚一枚奇麗に皺を伸ばしながら洗濯バサミで挟んでいるんだけれど、洗濯だけは俺の当番に入っていない。

多分、あの姉妹が俺に下着などを洗われるのが恥ずかしいからだろうな。まあ、洗濯なんて面倒なことをしないで済むのは嬉しいから、何の文句もないんだけど。

おっと、そんなことはどうでもいい。それより話しの続きだ。

ミウは洗濯物を全部干し終わったようで、カラの洗濯籠を持って家の中に入ろうとしたんだけど、そのとき俺の視線に気づいたんだろう、ふと上を見上げてきた。

俺は彼女をジロジロ見ていたのがばれるのはまずいと思い慌てて屈んだ。でも間に合わなかったようだ。彼女が驚くような表情をしたのが見えた。

今更後悔しても遅いんだけど、ああいうときは隠れるんじゃないくて気軽に声を掛ければ良かったんだよな。

「洗濯、ご苦労さん」って感じに、爽やかにさあ。隠れてしまったから、ただ暇つぶしに彼女の洗濯する様子を見ていただけなのに、変な誤解をされて面倒なことになってしまったんだ。

しばらくどうしようかと考えていたのだけど、とにかく恐る恐る顔を上げて、もう一度窓の下を覗いた。

じゃあミウはいなかった。でもその代わりに、何とさ、妹のアスカのほうが仁王立ちでこっちを見上げていたんだよ。

俺はさっきよりも驚いて、また隠れた。

「ねえ、ちょっと、隠れてへんで、出てきなさいよ！」

ここの方言かなんか知らないけど、そうアスカが大声で言ってきたんだ。「お姉ちゃんのこと、何、ジロジロ見てんのよ！洗濯物干してるのがそんなに珍しいの？」

彼女はそんなことを言って俺を罵り出したんだ。

偶然、庭の前をアスカが通りかかったのか、それともミウがアスカに告げ口したのかわからないけれど、とにかくアスカにもばれて事態は更にややこしくなっていた。

「やらしい人やわ、これからしばらく一緒に暮らしていかなあかんのに、こんな目で、見んといて欲しいわ」

何かそんなことも言われたんだぜ。

俺はもう何もかも邪魔臭くなって、このまま無視していようと思っただけど、それよりも何か言い訳しておいたほうがましだって考え直した。

でも上手い言い訳のセリフなんて思い浮かばない。だからヤケクソになったんだろうな、そういうところが俺の悪い癖だってお前に言われそうだけど。

「見惚れてたんだよ、あまりのかわいさに」

俺は窓から顔を出してそう言い放ってやった。「イヤらしい眼でなんか見てないさ。美しいものに見惚れて何が悪いんだよ」ってね。

本当はもちろん退屈しのぎに見てただけなのに。ミウじゃなくて、そこに鶏か鳩がいても俺は見ていただろう。でもあえてアスカを挑発するようなことを言ってやったんだ。

アスカは俺のその言葉を聞いて、最初はきょとんとしていた。あきらかに俺の居直りに不意を突かれているようだった。まさに鳩が豆鉄砲をくらったかの表情。

「だ、だからそれが気持ち悪いのよ！」

アスカは何とか態勢を立て直すようにそう言ってきたけど、俺は彼女の動揺を見て取って更に言っちゃった。

「それに俺は別に、君のことを見てたわけじゃないだから、君に文句を言われる筋合いはないんじゃないかね」

「私はお姉ちゃんの代わりに言ってるだけよ！」

アスカはまだ怒り足りないようだったけど、すぐ傍にいたらしいミウに何か言われて渋々引き下がった。

まあ、だから一応その場はおさまったんだけど、でもその事件がああとき限りの諍いで終わるわけがない。

それからミウとアスカは俺のことをやたらと避けてくるんだよ。まるで俺を危険な獣でも見るような目つきでさ。

いや、こんな状況になる前から、二人は俺のことを避けていたと言えはそうなんだけど、でも前よりも確実にその態度はあからさまになった。

同じ家で暮らしていれば、居間と台所とかで、どっちかと二人きりになることがたまにある。

そんなとき、それまでは会話はしないまでも、俺から逃げたりすることはなかったんだけど、今ではミウもアスカも慌てて部屋を出ていく始末だ。

あるいは夕食のとき俺がさあ、ちょっとそのソースを取ってくれって言っても聞こえない振り。ムスツとした顔で二人とも俯いている。前までは取ってくれてたのにだぜ。おばさんは不思議そうに俺と二人の娘の顔を見比べている。

このままでは俺の食事だけ、おかずが少ないなんて嫌がらせも起きかねない（おばさんは仕事が忙しくて、二人が食事を作っているからね）。洗濯も今は彼女たちがやってくれているけど、自分の分は自分でやれってことになるかもしれない。

本当にうんざりする事態だろ？

しかし俺の身に起きた厄介事はそれだけで終わりじゃないんだから、俺は自分の不運に呆れてしまう。

さっき、またかなり気まずい事故が起きてしまった。続けて俺の不幸話を聞いてくれ。

まだこの事件の記憶は生々しい。

「ミキ君、お風呂どうぞ、風邪気味だから私は入らないから」

そうお婆さんがいつものように階下から言ってきたから、俺は着替えのパジャマとバスタオルを持って降りていったんだ。

でもどっか変な気はしていた。確かアスカが部屋を出ていったきり、まだにかに上がって来てなかったなって。

アスカはお風呂から上がったら、自分の部屋に戻っていることが多いんだけど、そのときはまだ部屋に戻った気配がなかった。

しかしそんな懸念も気に掛けず、俺は一階に下りて行って、そして何の気も無しに風呂場の扉を開けてしまった。

今から思うと、あきらかに風呂場の電気はついていたし、中から人の気配もしてたんだ。俺はかなりボーっとしていたのかもしれない。

それでアスカの裸を見てしまったんだ。

いや、裸を見たって言っても、彼女はちょっと屈んだ姿勢で、バスタオルで頭を拭いていたから、その何て言うか、主に後ろ姿と、胸の一部しか見てないと言うか・・・。

でも俺の気配に気づいたアスカがこっちを見てきて、一瞬、バチッと目が合って、俺もアスカもいったい何事が起きているんだって感じでアタフタして、すぐに扉を閉めたけれど、この事件をなかったことに出来るわけがない。

彼女に叫ばれなかったのは幸いだったよ。しかし間違いなくこれ

は、二人の間で最高に不幸な瞬間として、永遠に記憶に刻印されただろうな・・・。

もうため息しか出ないよ。

明日から、とんでもなく気まずいことになるのは間違いない。これまでも十分に気まずかったのに、更に気まずくなるんだ。

どうしたものかな、エビ夫。

いや、もしかしてお前は、女の裸を見れた俺を羨ましがっているかもしれないけれど、これはそういう問題じゃないんだ。

そういうのに関して、何の喜びもないよ。そんなのを凌駕するくらい、はるかに気まずい状況に陥ってしまったんだ。

お前ならとても的確な方法を提示してくれるって期待している。こういうときはとりあえず謝っとくべきなのか？ それともなかったことにするべきなのか・・・。

エビ夫はいつでもピンチに陥った俺を助けてくれたじゃないか。だからいい方法があれば教えて欲しい。

○月×日 ミキオより。

第一章 ミキオの手紙 5

アドバイスありがとう、エビ夫。

しかしせっかくお前から貴重なアドバイスを貰ったけど、もはや何一つ実行に移す気はない。素直にアスカに謝るつもりもないし、彼女に気の利いた言い訳をするつもりもない。

聞いてくれ、俺は今、本当にムカついているんだ。あの二人にがっかりなんだ。

実は今日、いや、もう昨日のことかな、隣の街まで三人で買い物に行ってきた。

あんなことがあったのに、いきなり仲良く買い物に行くなんてどういう風の吹き回しなんだと思われるかもしれないけれど、もちろん俺が彼女たちを誘ったわけでも、彼女たちに誘われたわけでもない。おばさんが言ったんだよ。「ちょっとお小遣いをあげるから、三人でどこかに遊びに行ってきたら？」って。

三人っていうのはもちろん俺とミウとアスカさ。もしかしたらおばさんは、俺たちの仲が少しもしくりいていないのを見て取ったのかもしれない。しばらく一緒に暮らすのに、このままじゃまずいって思っ、こういうことを企んだのかも。

まあ、そういうわけで町まで買い物に行くことになった。

最初は正直言って、俺も少しはウキウキしてたよ。

久しぶりに華やかなところに行けるし、本当に退屈だったから良い暇潰しになるって思ったし、それにまあ、お互いに色々と気まずいことがあったわけだし、これがきっかけになって少しは収束の方向に向かえばいいかなって期待した。

そもそも彼女たちだって、最初は楽しそうにしてたんだから。

でもそんな期待は見事に裏切られた。現実是最悪だった。

一時間に一本くらいしかやって来ない列車に揺られて一時間強。そうだなあ、渋谷の五十分の一くらいの規模しかない街に到着した。駅前にデパートが一つ二つ、陸橋の下にバスターミナル。何か自然に発達して出来上がったってふうじゃなくて、何もない荒野に建物や道路が上から降ってきたかのような、すごく人工的な感じがする町だった。

でもまあ、それはいい。村じゃ何も買えないんだ。ファッション雑誌もロック雑誌も、文庫本もろくに売っていない。映画館もない。映画がなければ俺は死ぬ（お前とよく映画に行ったよな）。だから最近の俺はもっぱら読書に夢中で、この町には本屋目当て出来たんだよ。

俺は本屋で適当に本を物色して、何冊か文庫本を買った。

そんなに大きな本屋ではなかったけど、欲しかった本はある程度手に入った。まあ、そこまでは順調にいったんだ。天気も良かったし、ミウもアスカも俺が本を選んでいる間、大人しく待っていてくれていたし。

もちろん相変わらずギクシャクしてて、会話が弾むなんてことはなかったけど、このあと起こることを思うと平和そのものだった。問題はそのあとさ。

そのあと、ミウとアスカが洋服を買うつて言うんで、俺もデパートについていくことにした。

二人も俺のために本屋まで来てくれたしさ。それに俺の都会的センスで、あいつらの買い物の手助けをしてやろうかななんて思った。しかし女の買い物に付き合うものじゃなかったよ。これがまず最初の後悔。

だけどアスカだって最初は素直に俺の意見を拝聴してたんだぜ。東京の女の子はこんなに着ないぜって言ったら感心してたし、お前みたいなのはこんなのが似合うんじゃないかって言ってるやったら嬉しそうに笑ってたし。

何ならこのまま上手くいけば、これまでのわだかまりも解けて、彼女ともそれなりに上手くやっていける予感すらした。

でも気がつけば言い争いみたいになってたんだよね。

まあ、確かに俺も悪かったかもしれない。自分の言動を反省してないわけじゃない。アスカにはアスカの好みっていうのもあるんだろう（しかしその趣味が悪かったんだよね）。それを俺はいちいち否定してしまったかもしれない（だってわざわざ俺に似合っているか感想を聞いてきたからさあ）。

結局、アスカは怒って、けっこうえぐい捨て台詞を吐いて、そのまま帰ってしまった。それを見てミウも慌てて追いかけていった。

まあ、そういうわけで気がつく、俺は始めてきた街で一人きりさ。

ちょっと怒ったぐらいで帰ることはないと思わないか？ あいつらはマジで器の小さい人間たちだよ。それで俺はとんでもない目に遭うことになった。生死の境を彷徨う体験をしたと言ってもいいくらい。

昼過ぎに家を出たんで、そのとき既に夕方の五時くらいだったと思う。まだ空は明るかったけれど、夜はすぐそこまで近づいていた。でも構うことなく、それから俺は街をうろついてしまった。

それが第二の後悔だ。

でも無性に腹が立っていたせいもある。すぐに家に帰る気になれなかったし、俺は心の中でアスカの悪口を二百も三百も考えながら、小さい町をうろろしていた。まあ、ゲームセンターで遊んだり、バッテリーセンターに行ったりしてた。

しばらくしたら辺りも暗くなってきたし、お腹もすいてきたので駅に向かった。

俺はすっかり東京感覚だったんだよな。電車が五分か六分置きに確実に来るもんだと思い込んでしまっていたんだ。

でも駅の時刻表を見て現実に連れ戻された。この田舎で電車は一時間以上も待たなければ来ないんだって。

待っている時間は本当に長かった。この前、庭で見掛けたマムシの胴体ぐらいに（田舎ではとにかく虫や爬虫類が豊富で巨大だ）。その待っている時間で、さっき買ったばかりの小説をいくつか読んでしまった。せっかく家でじっくり読もうと思っていたのに勿体ないことをしたよ。でも本当に退屈だったからね。

なあ、エビ夫、ここまで読んだだけでも、お前は俺に同情してくれるだろう？

だけど俺の悲惨はもちろんこの程度で終わりじゃない。生死の境を彷徨う体験をしたのはその後さ。

一時間以上待って列車が来て、それに乗って俺は何か地元の駅に辿り着くことが出来ただけど、でも俺はそこから家への帰り道をちゃんと覚えてなかったんだ。

だって駅まで来たのはここに来た最初の日と、この日だけだったから仕方ないだろう。

電話して迎えに来てもらえば良かったのかもしれない。でも俺にもプライドがあった。ああやってケンカした手前、駅まで迎えに来てくれなんて言えるわけがないじゃないか。それで俺はささやかな記憶を当てに、夜道を歩いて帰ることにした。

電車に乗る前と比べて、夜の闇は更に濃くなっていた。

東京では考えられないくらい田舎の夜は暗い（空襲のせいで東京も暗くなったとはいえ、でもそれ以上の暗さだよ）。

それに何より人通りが全くないんだ。誰ともすれ違わず、誰にも追いつかれず、夜道を歩いているのは俺一人だった。

駅から家まで多分、三十分もあれば帰られるはずだったのに、まあ、案の定、俺はすっかり道に迷い、二、三時間は彷徨い続けていたと思う。

最初はポツポツと電灯がある、両脇を田んぼか畑に挟まれた道を歩いていたのだけど、何度か坂を上ったり下ったりしているうちに、鬱蒼と生い茂った森が俺の頭上を覆うようになった。気がつけば来たこともない山道を歩いていたんだ。

結局、家に辿り着けて、こうやって無事お前に向かって手紙を書くことが出来ているわけだから、あまり大袈裟に言いたくないんだけど、でもエビ夫、俺はマジで死を覚悟したよ。

このまま永遠に彷徨い続けて、どこにも辿りつけることなく飢え死にするか、暗闇に惑い、誤って崖からすべって真っ逆さまか、クマに襲われ出血多量か・・・、あらゆる悲惨な死が脳裏をかすめた。完璧な孤独、足も重くて倒れそうで、腹が減って吐きそうで、心細くて堪らなかった。犬なのか狼なのかよくわからない獣の遠吠えが聞こえてくるしさ、俺は何度、お前の名前を呼んだことか・・・。それと同時にあの二人を心底恨んだ。俺をこんな目に遭わせた戦争にも悪態をついた。もう何もかも嫌になったりもした。

でも、まあ、運が良かったのか、それとも俺の生存本能がこの困難に打ち勝ったのか、とにかく家に辿りつけた。その途中にドラマティックな救いに遭遇もせずに、何かが道案内してくれたわけでもない。ただ偶然、見覚えのある看板を見つけて、それで自分のいる位置を把握出来て、何とか帰れたただけだ。

おぼさんは本当に俺を心配してくれていたみたいで（保護者として責任もあるだろうし）、くたくたに疲れて帰ってきた俺を見て、心の底から安心したように駆け寄ってくれた。

でもミウとアスカは全然だった。

たしかにもう真夜中で、二人は寝ていてもおかしくない時間だったけれど、扉の隙間から光が漏れていたから起きてはいるようだったのに。しかし二人とも部屋から一步も出てこなかったんだ。

別に俺はこんな目に合ったのを二人だけのせいにするつもりはない。俺だって悪かったかもしれない。でも少しくらいお詫びの言葉があってもいいじゃないか。

と言うわけでしばらく俺はあいつらを無視してやることに決めた。もし明日の朝、すぐに謝ってきてても許してやらない。もうそれは大決定なんだ。考え直せってお前に言われても、もう俺は実行しているだろう。それぐらいしないと、この怒りは到底収まりそうになりからね。

俺は本当に心も身体も疲れ果ててしまったよ。何とか残った力を振り絞って手紙を書いている。この怒りをお前に打ち明けずにはいられなかったんだ。

まあ、少しはスツとしたよ。これから昼過ぎまでゆっくり眠ることにする。窓の外から鳥の声が聞こえ始めた。夜が明けたみたいだ。でも俺の夜明けはまだまだ先のよう。

○月×日 ミキオより。

第二章 アスカの日記 1

○月×日

本当にがっかりした。

昔から期待し過ぎるとろくなことがない。逆に期待していないときの方が良い結果が起きる気がする。それが私のジンクスかも。じゃあ私は自分の期待を操作することで、運不運を左右出来るかもしれないと考えたりするけど、まあ、そんなわけもないだろう。

ミキオ君だっけ？（名前を覚える気にもならないけど）
私は最初の印象だけで、良い人か悪い人か判断しないようにしているんだけど・・・。

東京にはこんな性格の悪い奴がうようよしているのかな。もしそうなら、まだ我慢出来るかもしれない。でも多分、そんなことなく、あいつは東京でも最低ランクの人間だったに違いない。

きつと東京でも嫌われ者だったんでしよう。

あーあ、これから先が思いやられる。

だけでも彼も疎開者だ。他の家も疎開者を受け入れているところが多いようだ。私たちも我慢しないといけないんだ。

この町にも、このような形で戦争が侵入してきたのだと思う。彼は人間サイズにまで縮小された戦争なのかもしれない。だったら彼が最悪な性格をしていても仕方ないかもしれない。だって戦争というものはおぞましいものなのだから。

って、私は自分に言い聞かす（それに何といっても、彼とは一応血はつながっているらしいのだ。こういうときは協力し合わないといけないと思う・・・）。

けれども最悪！

戦争よ、早く終わって。

そしてミキオ君（だったっけ？）、さっさと東京に帰って！

○月×日

ねえ、あなたの変わった性格は何のせい？

戦争が変えたの？ それとも生まれつき？

そうやって面と向かって言えたら、すっきりするだろうな。

まず何が嫌って、喋り方が嫌だ。何だか偉そうで、傲慢で、彼に話しかけられただけで、命令されているような気分になる。

けっこうナルシストなところが嫌だ。キザったらしくて、前髪ばかり気にしていて、鏡ばかりを見てて、はっきり言って気持ち悪い。

でも何が一番嫌かっていうと、もしかして私が彼に好意を持っているって、彼に勘違いされているかもしれないところ。

お母さんに言われて、彼の部屋にケーキを持って行って上げたり、この家の決まりごととか、ルールを教えてあげたりしているのだけど（お姉ちゃんはあるあいう性格だから。仕方なく私の担当）、でも彼のそのときの対応が本当に腹立つのだ。

「ありがとう」って前髪をいじりながら言ってきて、うっすら微笑む。

絶対に私、彼に気に入られようとして、甲斐甲斐しく世話を焼こうとしているって思われている気がするんだ。

でも、とんでもない勘違い。

本当は嫌われないくらいなのに。

これからしばらくこんな人と一緒に生活しないといけないなんて。私はいったいどうすればいいんだろうか。

彼を受け入れるよう努力しないといけないのか。さっさと私は彼のことが嫌いだということを告げて、彼の滑稽な勘違いを正すべきなのか。

まあ、彼を受け入れるなんて到底無理だから、答えは一つしかないんだけど。

彼を全く歓迎してあげられない私って、嫌な人間なのだろうか？人の好き嫌いが激しい我儘な性格なのだろうか？

でもそうは言ってもこっちだって我慢の限界があるんだ。

私だって最初は上手くやろうと思って、彼を理解しようとした。でも彼の偉そうな態度とか、何でも自分の言う通りに物事が進まないといふて腐れる態度は、どう頑張っても受け入れる余地なんてないんだ。

私はまだ直接聞いたことないけれど、彼は自分の母親のことをママって言ってたらしい。

自己中心でナルシストで、しかもマザコン・・・。

これはかなり最悪の部類だ。

多分、私とは人間の種類が違うんだろう。どう努力しても理解し合えないと思う。もうただただ戦争が終わって、彼がさっさと東京に戻ってくれるのを願うしかない。

もし戦争さえなければ、一生出会うことのなかった種類の人間だったに違いない。

戦争はやっぱり怖いものだ。こんな無関係で、普段なら私が最も避けるはずのものを強制的に結び付けてくるんだから。

○月×日

しかしそれにしても母は、年頃の私たちと男子を同じ屋根の下によく住ませられる物だと思う。遠い親戚とはいえ、今まで会ったことないんだから他人も同然、それなのに。

お母さんは私たちが心配じゃないのだろうか。まあ、もちろん私たちの身体に指一本も触れさせるつもりはないけれど。

でも彼は私たちが入ったあとのお風呂に入っているし、洗濯物も同じ洗濯機で洗っているし、ちょっと考えると指が触れるどころの付き合いじゃない気もするんだけど・・・。

冷静に考えると耐え切れないことばかりだ。

でもそうはいっても私はお姉ちゃんよりもましかもしれない。私は家にいるときに我慢していればいいだけなんだから。

でもお姉ちゃんは彼と同じ学年だから、学校が始まれば毎日、クラスの中でも顔を会わせないといけないんだ。彼から解放される時間が圧倒的に少ない。

一応、念のため、お姉ちゃんが彼のことをどう思っているのか尋ねてみた。

滅多に人の悪口を言わないお姉ちゃんが一言、「あんまり好きじゃない」とはっきり言ってた。それは普通の人にならば、「かなり嫌い」ってことだと思う。

良かった、お姉ちゃんも私と同じ意見で。

それでそのときお姉ちゃんから聞いた話がある。彼がここに来た最初の日、お姉ちゃんは彼を駅まで迎えに行ってくれたんだけど、

そのときお姉ちゃんが、まだあと三十分くらい歩かなくちゃいけないと彼に告げたら、「えっ？ マジかよ、タクシーとかないのかよ？」って散々文句を言ったあと、「だから田舎って嫌なんだよ」と小さい声でブツブツ言ってきたらしい。

本当に嫌な性格。

何だかそのときの彼の表情が目には浮かぶようだ。そして彼の前ですごく困っているお姉ちゃんの姿も。

お姉ちゃんはかなり人見知りで、初対面の人と喋るのを苦手になっている。昔はそうでもなかったのに、最近ではそれが酷くなるばかり。

そんなお姉ちゃんが赤の他人と一緒に生活するなんて、きっと辛いことだと思う。

お母さんは荒療治のつもりなんだろうか。でもそんなことでお姉ちゃんの性格が治るとは思えない。お姉ちゃんをただ苦しめるだけだと私なんかは思うのだけど・・・。

まあ、とにかく出てくるのはため息ばかりだ。

また日記を結ぶ結論が同じになってしまっけれど、もうさつと彼に帰ってもらうしかない。それしか私たちが幸せになる方法はきつとなんだろうから。

第二章 アスカの日記 2

○月×日

彼の「俺は見た」話し大嫌い。

俺は見た、黒焦げの死体を。いや、まだそれは死体ではなくて、呻き声を上げていたから生きていたのだろう。

俺は見た、俺を殺そうとする敵の爆撃機のパイロットの顔を。まだ若くて、そいつにはニキビがあった。

俺は見た、昨日まで隣の机で勉強していた友達の死体を。腹が裂けて、内臓がドロドロ出ていて、下半身が千切れて亡くなっていた。だけど顔は無傷で、今にも俺に話しかけてきそうだった。

そんな話しを彼は無神経にも食事時にする。そしてその後、決まってここを馬鹿にするようなことを言うんだ。

「それに引き換え、この村は平和でいいよな」って。

そもそもここは村じゃないし、一応、市だし、それに何が偉いっていうのよ、空襲を体験したことのがどこが。

黒焦げの死体を見て、肉が焼ける匂いがどこまで付きまとい続けて、水で何度も鼻を洗っても消えなくて、だから俺はママ（ママと言ったことを私も聞いた）の香水を内緒で借りて、それを部屋中にかけたとか言っ、自分の繊細さをアピールしているんだけど、そんなことを言いながら、彼は夕食のおかずの鶏肉をむしゃむしゃと食べたりしているんだ。

いったいそのどこが繊細だっていうのか！ 私は呆れてものが

言えなくなる。

さっきだってそうだ。

この街の案内をしてあげなさいってお母さんに言われたから、仕方なく彼の部屋に行った。

そのとき私は何度となくノックをした。声だっけ掛けた。もし私が着替えたりしている途中、彼に部屋の中に入ってこられたら最悪だから、そのところは本当に気を遣っているのだ。

しかしいつまで経っても返事がなくて、やむをえず襖を開けたら、ようやく彼は私に気づいたんだけど、あろうことか「勝手に開けるなよ」と怒鳴ってくる始末。返事もないのに襖を開けるなんて、私を無作法だと詰ってきたのだ。

こんな繊細さの欠片もない厚かましい奴に、礼儀について怒られたくないって本当に思った。

しかも私のノックの音が聞こえなかったのは、彼が音楽をヘッドフォンで聞いていたからだ。悪いのは全部向こうなのに。本当に理不尽極まりないことである。

私は本当にムカついたから、もうこの町を案内してあげるのをやめた。勝手に迷子にでもなればって感じた。

？

○月×日

ここ最近、日記に彼のことばかり書いていて、それ自体は気に入らないことなのだけど、でも書くことでけっこうストレス発散になっているから、話題がそればかりになってしまうのも仕方ない。それだけ私はムカついているってことなんだから。

だから私は書く。彼の悪口を徹底的に。

今日も本当に本当にムカつくことがあった。

でも今日は彼にムカついたのはもちろんだけど、お姉ちゃんの態度もどうかと思った。お姉ちゃんは彼の口から出まかせにコロツと騙されて、照れたりしてたのだ。

お姉ちゃんが中庭で洗濯物を干していたら、彼が二階の窓からじーっと見てたらしい。それで私がそのことをお姉ちゃんの代わりに咎めたら、彼の言い訳が白々しいものだった。

お姉ちゃんのこと可愛いから見惚れてたんだ。その何が悪いんだって開き直ってきたんだ。

本当はただイヤらしい目で見てた癖に、よくもそんなことが言えたものだと思う。

しかしそんな言い訳を真に受けて、お姉ちゃんは満更でもないみたいな顔をしてたから、私は彼よりもお姉ちゃんのそんな態度に呆れてしまった。

まあ、お姉ちゃんは学校でも男子とあまり話したことないみたいだし、もともと純粹過ぎて騙されやすいところがあるから、これくらいのこと嬉しくなっちゃうのかもしれないけれど、私からすればお姉ちゃんのそんなところは危うくて見てられない。

間違いなく、お姉ちゃんは彼みたいな人間、苦手なはずだ。

自分の意見だけズバズバ言って、他人がどんな反応をするか顧みないでも平気でいられるタイプ。そんな性格の人と、あんなに大人しくて、ほとんど自己主張しないお姉ちゃんが合うわけがない。

それなのにこんな見え透いた嘘に騙されて、顔を赤らめているなんて。

それからお姉ちゃんの様子は明らかにおかしいと思う。さっきの食事のときだって緊張してご飯が通らなかったみたいだし、そのときもチラチラと彼のことを気にして見ていたたし。

何か馬鹿らしい。

あの程度の甘い言葉にフラフラしちゃうなんて。お姉ちゃんはまだりにこういうことに対する免疫が無さ過ぎる。

まあ、とは言っても、お姉ちゃんも馬鹿じゃないから、万が一のことはないと思うんだけど。彼なんて想いを寄せる値打ちもない人間だって気づいて、我に返ってくれると思うんだけど。

でもやっぱり、嫌な予感がすることは確かなんだ。

とにかくお姉ちゃんと彼の動きは警戒しておかないといけない。いくら自業自得だからって、お姉ちゃんが傷つくのを妹として黙って見ていられないから。

？

○月×日

さっさと学校が始まって欲しいって、こんなに思ったことは今までなかったんじゃないかな。この春休みがやたらと長く感じる。もちろん彼のせいだろう。

家にいると何か落ち着かないんだ。

家の中をウロウロしていると彼に会いそうで、彼に会うと何だか彼と会うために家をウロウロしていると思われそうで、そんなことを思われるのは本当に最悪だから、自分の部屋で時間を潰すしかなくて、でも部屋にいても特にやることがないから退屈で死にそうなんだ。

まあ、そういうわけだから日記を書いているんだけど、それがいしか今の私の暇潰しはない。

とはいえ、学校が始まった途端、忙しくなるのもわかっていて、それはそれで困ることだ。食事の準備に家の掃除。まだ中学生なのに主婦並みに働かないといけないんだから。

だけどそれも退屈よりはるかにましかもしれない。それに主婦並みに働くと言っても、お姉ちゃんがちゃんと手伝ってくれるし、一人でこんなことをやっているわけじゃないんだから、偉そうに言っていない。

お父さんが亡くなって、お母さんが働きに行かないと私たちは暮らしていけないんだから、これに関する文句はたとえ日記の中であっても書いてはいけないことだって思う。

天国から見ているお父さんを心配させてはいけないのだ。私たちは元気で幸せに暮らしているって安心させないと、お父さんもゆっくり出来ないだろう。

でももしかしたら、今のお姉ちゃんを見て、お父さんは心配しているかもしれない。

私は思うんだけど、お姉ちゃんが家の中で着ている洋服が、心なお洒落な感じになった気がするんだ。

多分、彼の目を意識してのことだと思う。朝も鏡の前で髪をしきりにといてたし、それに多分、香水かボディークリームでも使っているんだろう、近寄ると良い匂いがした。

学校でもそんなことをして行ったことないはずなのに。あのお姉ちゃんが色気づいてきたのだ・・・。

これは本当に由々しき事態かもしれない。天国のお父さんも危うくて見ていられないんじゃないかな。

このままだと下手したら、万が一のことが起きそうな気がしてきた。どうにかしてお姉ちゃんの目を覚まさない大変なことになりそうだ。

第二章 アスカの日記 3

○月×日

あんな性格の悪い男と私のお姉ちゃんが付き合うなんてこと、前の日記にも書いた通り反対である。絶対にお姉ちゃんが幸せになるわけがないし、それに一緒の家に住んでいるから仲良くなって付き合い出すなんていうのも、何だか動機も不純だと思うし。

だから断固阻止しないといけなさと決心しているし、それは口先だけじゃなく本気でやるつもりで、その決意にぶれはないんだけど、でもここ数日、注意深くお姉ちゃんの行動を観察するようになって、実は私は少し安心し始めているところもある。

だってシャイなお姉ちゃんらしいことに、お姉ちゃんは彼のことを意識し出すようになってから、むしろ彼を避けるようになってきたから。

しかもちょっとその避け方はやり過ぎじゃなんないかってくらい、お姉ちゃんには彼から逃げているんだ。

そんなお姉ちゃんを見てたら、お姉ちゃんの気持ちを知っている私だって、本当は彼のことを嫌っているんじゃないかって疑いたくなるくらいだから、多分、彼も自分はお姉ちゃんに嫌われていると勘違いしている気がする。

まあ、でもこの問題はけっこう深刻なことで、こんなんじやお姉ちゃんは本当にいい人に巡り会えても、そのときその恋が実らない可能性があるんだ。

だからその性格を直さない限り、お姉ちゃんは永遠に好きな人と付き合えないんじゃないかって思う・・・。

しかしお姉ちゃんにとっては可哀想なことだけど、今回に関してはお姉ちゃんのそんな性格が良い方向に働きそうだ。もちろんお姉ちゃんが彼を意識していることは確かだから、まだまだ油断はならないけれど。

でも私はかなり楽観的な気分になった。お姉ちゃんはこのままじや自分、恋なんてものと無縁だろうなって。

○月×日

しばらく平穏に時は過ぎていたかと思いきや、それはまやかしかだった・・・。

最悪、最悪、最悪。

そうとしか言いようがない。

この出来事を私の人生の記録に残しておきたくないから、日記にも書く気がしないのだけど、でも仕方ない。そういうわけにもいかないだろうから、簡単に書いておく。

あのバカが、私がお風呂から上がって身体を拭いていたら、いきなり扉を開けてきたんだ。

生まれて初めて男に裸を見られてしまった。もう死にたいくらいだ。それかあいつを殺したい。

わざとだったら絶対殺してやる。

いったいどういふつもりだったのか問い詰めないといけない。そ

の答え次第では本当に息の根を止めてやるから。

でも彼としばらく話しもしたくないし、顔も見たくないから、問い詰める気になれないということも事実である。

っていうか、もう一生、彼と関わりたくないんだけど。

もし向こうから謝って来ても嫌だ。だって何だか謝られること自体、あいつとあのときの出来事を改めて共有し合うみたいで。

あーあ、やっぱり書くんじゃない。なかったかもしれない。なかったことにするべきだったかもしれない。もちろん日記に書かなかったら、なかったことになるわけもないんだけども・・・。

とにかくお風呂場に鍵をつけとかなないと、これから安心出来ない。やっぱり彼はイヤらしい人間なんだ。お姉ちゃんは彼に騙されるに決まっている。お姉ちゃんをじつと見ていたのもそういう視線だったんだ。

どうやら私たちはとんでもないケダモノと一緒に暮らしているよう。本当に本当に、最悪だと言いたいようがない・・・。

戦争なんて大嫌いだ！

○月×日

今日の朝の食卓は気まずかった。春休み中だけど、お母さんが仕事に出掛けるのに合わせて、私もお姉ちゃんも彼も同じ時間に起きて、皆で一緒に朝食を食べるようにしているのだけど、今日は風邪気味だとか言ってもう少し寝ていようかと思ったぐらいだ。

でも彼と顔を突き合わせないと、この家では生きていけないから、

仕方なく起きたんだけど。

彼の態度はおかしかった。何事もなかったような振りを精一杯してみたいけど、間違いなく挙動不審だった。

彼も昨夜のことを意識してたんだろう、私のほうをチラチラと伺うように見てきたのだ。

しかし彼が謝ってこなかったことは、少し評価してあげるべきかもしれないな。

もしお姉ちゃんお母さんの前で、「昨日のこと、ごめん」だなんて意味深な口調で言われてたら、私は迷わず持っていたお箸で彼の目を突き刺したくなっていたに違いない。

だけど彼にも私の気持ちを推し量るだけの繊細さが少しはあったみたいだ。それに関しては少し安心した。

まあ、もしかしたら私がずっとムスツとした顔をしてたから、ただ単に声を掛けるのが怖かっただけかもしれないんだけど。そうだとしたら、しばらくこの態度を維持しておかないといけない。油断したら謝ってくるな。

だけどよくよく考えてみると、謝ってこないこと自体、それはそれで大変に失礼なことだと思う。

あんなことをしておいて、あわよくば有耶無耶にしようって考えているなら、かなりの礼儀知らずだ。だったら絶対に彼を懲らしめないといけない気もする。

それにだいたい、あんなことをされて彼を咎めないでおいたら、絶対に彼に舐められるに決まっているんだ。また調子に乗ってお風呂場の扉を開けてくるかもしれないんだから。やっぱり彼をギャフンと言わせるような罰を与えないと。

しかしそれにしても、我が家でどうしてこんなに気疲れしないと

いけないんだろうか。

彼が家にやって来て、私の生活は、まるで洗濯機の中でグルグルとかき回されているかのように、グチャグチャに混乱している。そして私自身、洗い終わったばかりの洗濯機の仲の洗濯物のように、グチャグチャに絡まっている。

私はもうクタクタだ。

私の安息の場はどこに行ってしまったんだ？

第二章 アスカの日記 4

○月×日

お母さんはいったい何を考えているんだろうって思った。学校が始まるまであと三日、明日は春休みの最後の日曜日なんだけど、何と三人でどこかに出掛けてきなさいと言ってきたのだ。

まさかお姉ちゃんが彼のことを気に入ったのを知って、その仲を後押しするために計画したんだろうか、それとも私と彼の仲が少しも上手くいってないのを心配して、それを機にもっと彼と打ち解けなさいって感じなんだろうか。まあ、いずれにしても明日、三人で買い物に行ってきなさいとのことなのだ。

何だか面倒臭いっていうのが本音だ。それに私にとっては、あんなことがあったすぐ後だし……。

しかし実はもう行くことにした。お母さんはけっこうなお小遣いをくれるって言うし、お姉ちゃんと彼を二人きりにさせるのも心配だから私も仕方なく出掛けることにしたのだ。

それにちょうど欲しい服もあったし。

お姉ちゃんみたいなの、おしとやかな、女の子らしいワンピースが一つくらいあってもいいかなって思ってたんだ。こういう機会じゃないと買えないだろうから、彼と一緒にいるのはわずらわしいにしても、そのチャンスをみすみす逃す手もない。

三人で出掛けることになって、お姉ちゃんは顔に出さないようにしていたけど、嬉しそうだったと思う。

もしかしたら私を邪魔者に感じているかもしれないけれど。出来たら二人きりで行きたいって思っているのかもしれないけれど。でもあのお姉ちゃんに彼と二人きりで出掛ける度胸なんてないはずだから、まあ、そのところは大丈夫だと思う。

とにかく明日は慌ただしい一日になりそうだ。どうやら天気も晴れのようだし、お出かけ日和にあるんじゃないかな。

しかし絶対、彼に気を許してはいけない。

その買い物ときも、ずっと厳しい態度で接しておかないと、彼が勘違いする恐れがある。私はもうあの出来事を許していると思われるかもしれないんだ。彼が話しかけてきても、出来るだけ返事しないで無視しておかないと。

まあ、そんなの簡単だけど、あの出来事をちよつと思ひ出しただけで、私に中に怒りが湧き上がってくるんだから。

○月×日

もう十時を過ぎている。彼はまだ帰ってこない。お母さんがピリピリして、しきりに時計を気にしたり、玄関先まで出て言っ心配そうにウロウロしたりしていた。

でもお母さんは少し心配のし過ぎじゃないかな。

確かにまだ帰ってこないのはおかしいけれど、子供じゃないんだし大丈夫に決まっていると思う。

一応、彼だって男なんだし、この辺で熊や狼が出るって話しも聞かないし、駅から家は基本的に一本道で迷うはずもないし、帰ってこないのはただ単にまだ帰っててくる気がないからじゃないの。

絶対、心配するだけ損だ。多分、東京にいた頃から彼はこうやって夜遊びしていたに違いないんだ。

まあ、百歩譲って彼がどこかで道に迷って家に帰るのが遅くなっているのだとしても、別に私たちが先に帰ってきたのが悪いんじゃない、私たちを怒らせた彼が悪いんだと思う。

ああ、また思い出しただけで腹が立ってきた。どうして彼にこんなこと言われないといけなかったんだろうか！

思い出したくもないし、簡単に忘れられるとも思えないからわざわざ書く気も起きないのだけど、いつか読み返す十年後か二十年後の自分のために書いておく。

そもそも彼に怒りを覚えたのは街についてすぐだった。

「ここがこの辺で一番大きな街なのかよ」って、駅を下りて開口に一番言ってきたのだ。

そのときの口調の憎たらしいこと！

その後も、本屋の品揃えが悪いのだ、ここには映画館もないのかよだの、暇があればイチイチここを馬鹿にするようなことを口にしてきた。それでだいぶ私もカリカリきてた。

でもまあ、東京に比べたらそうなんでしょう、それはおそらく事実には違いないから、私も何も言い返さないで聞き流してあげただけ、でも本当に腹がったのはその後だ。

私たちは本屋に行ったあと、洋服を買いに行った。彼は別についてこなくても良かったのに、どこか他の場所で時間を潰してれば良かったのに、なぜか彼もトコトコと私たちの後についてきた。

しかもついてくるだけじゃなくて、俺のセンスで服を選んでやるとか言って、大はしゃぎで。

それ聞いて嫌な予感を感じただけ、案の定だった。

最初、お姉ちゃんが洋服を買った。お姉ちゃんにしては珍しい、ちょっと短めのチュエックのスカート、それとそのスカートに合わせた上のジャケット。

どう考えてもお姉ちゃんには似合わない感じの、ダンスミュージックか何かを聞いて、踊るのが趣味って感じの女が着るような洋服でも彼に、こんなのが東京で流行っているんだって勧められて、喜んで買ったみたいだ。

自分の趣味やこだわりに関して、実はけっこう頑固なお姉ちゃんが彼の意のままになっていたのはかなり意外だった。

もちろん彼に気に入られたいから、そんな愚かな行動に出たんだろうけど、人を好きになるっていうのはこういうことじゃないと私は思う。私にはお姉ちゃんが馬鹿みたいにしかな見えなかった。

でもまあ、それはいい。

後悔するのはお姉ちゃんだし、今はそういうのが幸せなんだろうから、勝手にしてればって思う。でも問題はその後。それからまた違うお店で、今度は私の目当ての洋服を買いに行ったんだけど、そこで事件が起きたわけだ。

簡単に言えば、お姉ちゃんが自分の言う通りに洋服を買ったものだから、それで彼は調子に乗って、私にまでアドバイスをして来て、でも私がお姉ちゃんと違って彼の意見に何の重みも感じていないのを知って、彼は腹を立て、それで私が言い返したらケンカみたいになったんだ。

確かに私もいくら腹が立ったからって、思わず帰るなんて、ちょっと子供みたいな行動を取ってしまったのかもしれない。でもやっぱり彼はあまりに失礼だった。デリカシーの欠片もないと思った。会ってまだ間もないのに、私の何がわかるって言うんだ。それなのにお前にはこんな服は似合わないとか、どうせ買っても金の無駄

だとか言って、ことごとく私の選ぶ服を否定してくるんだ。

私だってたまに変わった物を買いたかっただけで、別にああいう女の子らしい洋服が自分に一番似合うなんて思っていない。

いつもとちよつと違う服を着てみたいっていうのは誰でもあると思うし、今日がたまたま私のそういう日だっただけなのに、人の気も知らないで好きなことを言ってくるなんて。

私じゃなくても誰だって腹を立てるはずだ。そこまで言われて怒らない人がいるとしたら、悟りを開いたお坊さんぐらいでしょ。

私は悟りを開くどころか、お坊さんですらないから怒り心頭で、思わずその店を後にして、気がつけばお姉ちゃんも私の後ろをついてきてたから、結局、彼だけそこに置き去りにしていた形。

彼は今も道に迷って、どこか彷徨っているのかもしれない。でもはつきり言って、それならそれでザマ見ろって感じた。

っていうか、これくらいじゃまだ私の気は済まないって言うのが、正直な気持ちなんだから。

何なら三日四日帰ってこなくていい。いっそ、このまま東京にでも歩いて帰ればいいんだ。そして空襲で死んでしまえ。そのためなら私は敵の味方をして、彼の居場所を手信号で教えてあげたい・・・。

まあ、それは冗談だけど、とにかく私は彼の迷子に責任は感じないし、お母さんにいくら怒られても、彼に一言も謝る気なんてないから。

それだけはここで誓っておく。

？

○月×日

結局、彼は夜遅く帰ってきたようだ。お母さんの話しだと、本当に迷子になっていたらしい。それで次の日の朝、私たちは改めて怒られてしまった。

ちゃんと謝っておきなさいって、お母さんは目を鬼にして言うのだ。でも私が絶対に嫌だって言ったらお母さんとケンカになってしまった。

彼がやって来てから、家の中の空気は確実に悪くなったと思う。これまでお母さんは私の言い訳も聞かないで、一方的に怒る人じゃなかったのに、この頃はちょっとしたことで私に怒鳴ったりするようになったんだ。

しかもその後、珍しくお姉ちゃんが私の部屋にやってきた。そして言われた。

「勝手に帰ったことは私たちが悪いんだから、一緒に謝ろう」って。

本当にお姉ちゃんはどうかしているんじゃないの？ 彼のちょっとしたお世辞で舞い上がって、こんな良い子になるなんて。

それで思わず私はお姉ちゃんに言ってしまった。

「お姉ちゃんだけ謝れば？ だって彼のこと好きなんですよ？ だったら一人で気に入られるために頑張ればいいじゃない」

もちろんちょっと酷いことを言ってしまったって反省している。カッとなって思ったことをすぐに口にしてしまうのは、本当に私の悪い癖だ。

でもいつものお姉ちゃんなら、私が少しでも強い態度に出たら簡単に引き下がる。それですぐに私も素直に謝ることが出来てたのだ

けど、このときのお姉ちゃんは違った。

お姉ちゃんは引き下がるどころか、私の発言を聞いてとても冷やかな笑みを浮かべながらこう言ってきたのだ。

「謝ったからって、私みたいなのが彼に気に入られるわけないじゃない」って。「もうすぐ学校も始まるし、私はクラスで嫌われているんだから、彼も同じように嫌うに決まっているわ。だから別に好かれないから謝るんじゃない。私たちが悪かったから謝ろって言うだけよ」

そのときお姉ちゃんの言葉を聞いて、私は何とも言えないショックを感じた。

学校で嫌われてるとか、彼も同じように自分を嫌うとか・・・、こういう事情があれど、お姉ちゃんがこうやって自分自身を卑下するようなことを言うなんて思いもしなかったから。

お姉ちゃんは大人しいし、自分に自信がないのは知っている。でも決して卑屈なことを言うタイプじゃなかったんだ。

何だか知らない間にお姉ちゃんは変わってしまったって思った。彼がやって来てから、もう何もかも悪い方向に流れていっている気がする。

いや、これに関して彼は関係ないかもしれないけれど。ただ単に私が酷いことを言い過ぎて、お姉ちゃんを傷つけ、お姉ちゃんの思わぬ一面をあらわにしてしまったんだろうけど。

でもそれでも私は彼に対して腹が立つ・・・。

しかし結局、私は彼のところに謝りに行くことにした。

もう何もかもどうでもよくなっていたのだ。だからこれ以上文句を言うのをやめ、お姉ちゃんに諭された形で黙ってついて行くことにした。

でもそこで、またうんざりさせられた。

彼とは到底和解出来るとは思えなかった。彼の態度は本当に悪かったのだ。こっちが下手に出ているのをいいことに偉そうな態度。だからもちろん私は謝らずに彼の前から立ち去ってやった。

とにかくもう家の中は無茶苦茶だ。毎日が何だか落ち着かないし、自分の家でも寛げない。

明日からやっと学校が始まる。まさかこれがこの混乱状態から一時凌ぎになるなんて、春休みが始まる前は思いもなかった。

友達に会いたい。会って彼の悪口を言いまくろう。だったらちよっとはすつきりするかもしれない。

第三章 ミキオの手紙 1

ようやく学校が始まったよ、エビ夫。今日は最初の登校日だった。ヘルメットをかぶって、自転車で行くつももの山を越えて、ようやくたどり着く。朝からちよつとした運動だよ。それがこれから毎日続くのかと思うとうんざりだ。

東京のほうも始まっただろ？ 今度は誰と同じクラスになったのか教えてくれよ。まあ、東京もあまり生徒が残ってないみたいだけど、でもお前が俺よりも仲のいい友人を見つけないことを心から祈っている。もちろん俺だってお前以上の友人を見つくる気はないから。

まあ、お前のほうはそんな心配する必要はないみたいだぜ。このクラスにはろくな奴がいそうにない。お前みたいに東京中の単館映画館を片っ端から見回りながら、古今東西のSFを読み漁ってる洒落た中学生がこんなクソ田舎にいるわけがないじゃないか。

さて、お前は制止しようとしていたけれど、ミウとアスカに対する無視はとくに決行しているよ。だから遅いつて言っただろ。お前が手紙を読んでからでは、もう全ては終わった後だって。

確かにお前の危惧したとおり、更に気まづくなっている。食卓でも、廊下で顔を会わせてしまったときも、学校でもどこでも。

だから正直に言えば、後悔している・・・。

次の日にミウとアスカがさ、俺の部屋にやってきて、俺に謝ろうとする素振りを見せてきたんだよ。あるとき素直に許してやれば良かったかもしれないな。

でもあんたも悪いとアスカは言い出すんだぜ。こっちも謝るから、あなたも謝れ、彼女はそういう態度だった。

だから激昂だよ。「お前は馬鹿か？ 何で俺が謝らなければいけないんだよ」ってね。

「俺はお前らのせいで、クソ田舎の暗い夜道に迷って、どれだけ恐い思いをしたと思ってんだよ！ マジで死ぬかと思ったんだぞ！」

そういう感じで俺は二人を追い返した。

それでスツとしたよ。ようやく俺がどれだけあいつらにムカついているか伝えることが出来て。胸のつかえが取れたっていうか、そのときは本当に清々した。

でも今はちよつと後悔している。

このままではこの家で生活するのが、息苦しくて堪らないことは事実なんだよな。

俺はどうすればいいんだろうか？ 何か良い知恵があれば教えて欲しい。但し絶対にあいつらに謝らずに済む方法で。そんなの虫が良過ぎるかな。

しかしそれにしてもあいつらの態度は何て言うかな、センシビティに欠けるっていうか、田舎者特有の鈍感さっていうのはこういうものなのか、とにかく俺があいつらのちよつとした仕草とか言動でも、けっこう傷ついているということがわかってないんだよな。

例えばさ、俺が居間に入った途端、パタツと会話を止めたりすることが前からあった。まるでさっきまで俺の悪口を言っていたかのように、いや、そうじゃなくても、俺に聞かれるとまずいって感じで、話をピタリと止めるんだ。

そういうのはマジで傷つく。家族じゃない他人には聞かせれない、上等な会話でもしてるのかよって悪態をつきたくなる。

確かにお婆さんは俺に気を遣ってくれている。でもそれがちよつと過剰で、苦しいときもあるし……。多分、他人同士で同じ家に

住むなんて、そもそも不可能なことなんだよ。

戦争の間中、俺はこの状態に耐えないといけないのか。そう思うと地獄だ。戦争はこんな地獄をもたらすものなんだな。改めて戦争の恐ろしさを実感したよ。

お前は空襲と戦って、俺は人間関係で戦っている。前まではお前に疎開を勧めていたけど、もう気軽にそんなことは言えなくなった気分さ。

もしかしたら爆弾から逃げているほうが気軽だったかもしれない。いや、そんなことないかな・・・、まあ、そもそも比べるものじゃないか。

じゃあな、とにかく戦争が早く終わることを祈る。もちろん日本の勝利でだけど。

○月×日 ミキオより。

第三章 ミキオの手紙 2

この手紙がお前の手元に着くのが何曜日かわからないけれど、俺が書いているのは日曜日。

せっかくの休日、でも起きたらもう昼で（誰も起こしてくれなかったんだ）、しかも家には誰もいなかった。

何だか置いてけぼりをくらわされた気がするよ。血のつながった家族三人で、どこかに仲良く出かけたみたいなんだ。

買い物か？

遊園地？

さあな、とにかく外はとてもいい天気だ。俺はついにここまで除け者にされたんだ。仮に誘われたとしても、ちゃんと気をきかして断ったのに。それも面倒だったみたいだ。台所に俺の餌として、おにぎり一つが置かれていただけさ。

夏目漱石の小説に、こんなシーンあったよな。

漱石の実体験らしいんだけど、主人公が幼い頃、目を覚ましても誰もいなくて、とんでもない孤独を感じたってシーン。漱石は養子だったんだよな、まさに今の俺と同じような境遇。

何もやることがないから、いつもは夜に書くようにしているお前への手紙を真っ昼間から書いている。昼寝でもして時間を潰したいところだけど、もう眠り過ぎて少しも眠くない。

家中が図書館みたいにシーンと静まり返っている。どこからも音がしない。こんな静かだと耳鳴りみたいな感じで、爆撃機が東京の空を滑走する音が耳の中にこだまして何だか怖くなる。死ぬなよ、エビ夫、俺は退屈と孤独で死にそうだけど。

東京に帰りたい。

この頃、ますますお前のことばかり考えているんだ。どうしてお

前は俺のことをこんなに理解してくれるんだろうな。きっと俺たちは前世で夫婦だったんだよ。

なんてな。

そんなの冗談だけど。それじゃどっちが夫でどっちが妻かわからないものな。

実は今、ミウの部屋にいるんだ。留守をいいことに忍び込んで、ミウの勉強机を借りてお前への手紙を書いている。

ミウの部屋は妹アスカの部屋に比べて、すごく質素だ。

質素っていうか、何だか空っぽな感じがする。アスカの部屋はマンガとか、雑誌とか、参考書とか、ぬいぐるみとか色々あって、いかに中学生の女子の部屋って感じだったんだけど、ミウの部屋にはそういうのが一切ないんだ。

温かさが無い。人間味がない。ミウがどういう人間かっていう手掛かりが一切ない。シャーロック・ホームズでも悩むんじゃないか。この部屋の住人がどんなパーソナリティの持ち主か推理出来ないだろうね。

何か本来あるべきはずのものが欠けているって感じなんだ。その本来あるべきものっていうのが、何かは具体的にわからないんだけど。でもまるで前歯が無い人に抱く違和感みたいな感触を感じるって言えばいいのだろうか。ミウにはもしかして、好きな物が一切ないのかもしれない。何だかそんな感じがする。

でもそれがマジなら異常だよな。好きな物が無いなんて普通じゃないよな。

学校が始まって、前にも言った通りクラスは一つしかないから、俺とミウは同じクラスなんだけど、それで気づいたことがある。

ミウには友達が一人もいないようなんだ。

俺たちのクラスにもそんな女子がいたよな。暗くて、勉強も運動

も出来なくて、どことなく不潔で、近づいたらそいつの不幸がこっちにも伝染してきそうな奴って。

ミウはこのクラスで、まさにそういう扱いを受けているんだよ。

最初は本当に驚いたよ。ミウはけっこう小奇麗だし、不潔な感じは全然ないし、確かに大人し過ぎて、勉強は得意じゃないようだけど、でも決して嫌われるタイプじゃないと思っていた。

ミウの孤立ぶりはあまりに不当なんだよ。田舎の人間の好みはよくわからない。

だけどやっぱり何か原因があるんだろうな。誰かに聞いてみようと思っている。でも俺も転校したばかりだから、まだ話し相手もないんだけど。俺もミウのことを憐れんでいられるような身分じゃない。

さて、そこまでミウの部屋で書いてたんだけど、三人が帰ってきたので慌てて中断して、部屋を移動した。

改めて続きを書くよ（中断して何時間も経つ、もう夜さ）。

どうやら三人の会話の様子では、墓参りに行っていたらしい。二人の父親は幼いときに亡くなったらしいんだ。そのお墓参りだよ。別に遊びに行ってたわけじゃなかったみたいだ。それで一人留守番させられた俺の怒りも少しは和らいだ。

しかし彼女たちが帰って来て、俺は慌ててミウの部屋から飛び出たんで、彼女の部屋に俺のいた痕跡が何か残っていないか、今でも気になって仕方ない。

もしかして何か忘れ物をしていないか、何か物を動かしてしまっていないか。アスカの部屋に忍び込んだときは落ち着いて脱出出来たんだけど、今回はどうも嫌な胸騒ぎが続く。

まあ、ばれたからってどうということもないけども。もうこれ以上気まづくなることもないだろうしな。

さてさて今日は一日中、お前に手紙を書いていた気がする。腕も疲れた。もう眠るよ。そう言えばエビ夫、お勧めの本のリストありがとう。また町まで出て買うよ。まあ、今度は早めに帰って、迷子にならないように気をつけて。

じゃあな、おやすみ。

○月×日 ミキオより。

第三章 ミキオの手紙 3

エビ夫、新しいクラスで上手くやってるか？ 俺がいないのにお前が楽しそうだと腹が立つけど、でもお前に一人も友達が出来ないとしたら、それはそれで心配だ。

こっちはまあまあさ。

しかし最近、ますますクラスの中でミウの孤立振りが目に付く。

ミウはマジで友達が一人もいないみたいなんだ。休み時間も一人でいるし、誰かと話しているのも見たことがないし、誰かに話しかけられているのも目にしたことがない。

転校早々の俺ですら、近くの席の奴とポツポツ喋るのに、彼女はまるで誰にも見えない透明人間のように、誰にも相手にされずに過ごしている。

いや、もしかしたらミウはただ単に友達がいなくてじゃなくて、クラスの連中から嫌われているのかもしれないな。

例えば授業中、ミウが教師に当てられたりすると、何となくクラス中に笑いが沸き起こって来る。

ミウは答えがわからないのか、声を出すのが邪魔臭いのかかわからないけれど、ずっと俯いているだけで全く答えない。まあ、そんなミウの態度もどうかと思うけど、でも彼女をあからさまに馬鹿にするように笑ったり、囁し立てたりする奴がいたりするんだ。

何だか切ない光景だよ。まだ給食は始まってないけれど、恐らく昼飯だって一人で食べるんだろうな。

それと俺とミウとの間で実は先日、こんなことがあった。

前の日曜日、家族みんなが留守のとき、俺のミウの部屋に忍び込んだってことは前に描いたと思う。それがやっぱり彼女にばれてたんだ。

俺の嫌な予感的中してたよ。俺はミウの部屋で朝食のおにぎりを食べながら、手紙を書いていたんだけど、そのお皿を部屋に忘れてたようだった。

ペンと便箋は持って出たんだけど、お皿は自分の持ち物じゃないから気づかなかったんだろう。

それでさ、何とミウに休み時間、校庭の隅に呼び出され、今後二度と部屋に踏み入れないでくれと、泣きそうな声で言われたんだ。ミウと口を聞いたのはすごく久しぶりだった。俺は彼女に咎められているんだけど、そんなことよりもそのことに淡い感動を覚えてしまったな。

でもこのとき、ミウは俺にそう言いながら本当に悔しそうに唇を噛み締めてたんだ。勝手に部屋に入られたことに物凄く傷ついていたように見えた。それで一大決心して俺を呼び出したって感じ。

そんなミウの姿は本当に憐れだった。何かこっちまで泣きになってきたよ。

しかし俺は部屋に忍び込んだのがばれてしまって、何もかも俺が悪いの、本来なら言い返す言葉なんか一言もあるわけはないはずなのに、何だか一方的に怒られているのは癪だったんで、ちよつと余計なことを言ってしまった。

どうしてわざわざ呼び出すんだよ。こんな校庭の隅なんか呼び出さないで、普通に教室の真ん中で言えよなって。そんなだから友達が出来ないんじゃないの？

まあ、いわゆる逆切れて奴だね。別にお前に指摘されるまでもない。俺は最低だよ。

じゃあミウが俺に言ってきた。

私と話しているのを見ると、クラスの子に君も嫌われるよって。俺は絶句した。何て切ないことを自分から口にするんだって。

これはちよつと根が深そうだな。ミウはどうしようもないくらい卑屈な性格だ。これじゃ友達なんて一生出来ないだろう。

まあ、戦争が終われば、こんな村ともさっさとお別れするんだから、彼女がどんな性格でも知ったこっちゃないんだけど。でもこれは全く無関係な俺でもブルーになる事態だろ？

そのとき俺は絶句したまま、何も言えずに別れた。何ならまだ絶句しているかもしれない。

なあ、エビ夫、お前ならこういうときどうする？

お前は優しくて強いから、他のクラスメートから嫌われることになろうが関係なく、ミウのたった一人の話し相手になってやったりするのかな。

お前は困っている人間を見たら放つとかないもんな。それで多分、俺はお前と友達になれたんだと思うけど・・・。

思えばお前と出会うまで俺の人生は本当にクソみたいだった。ミウ同様、俺も教室の中じゃ透明人間も同然だった。

でもお前と出会ってそんな状況は一変したんだ。まさに俺にとってそれは奇跡の出会いだったよ。

おっと、何だかセンチメンタルモードになってしまった。手紙を書きながら、寂しさのあまり泣いてしまいきそうさ。マジで泣く前にペンを置こう。

とにかくミウはそういう状況のようなんだよ。お前ならどうするか聞いてみたい。

じゃあな、すぐに返事を待っている。

○月×日 ミキオより。

第三章 ミキオの手紙 4

俺と友達になったのは別に同情したからじゃないっていうお前の言葉、嬉しかった。相変わらずお前は俺の喜ぶツボをよく知っているな。マジで泣きそうになったよ。っていうか本当に手紙を読みながら泣いたけど。

特に「俺は誰に対しても優しいんじゃないって、お前に対して優しいだけさ。すなわち俺を優しいって思っている人間はお前だけなんだ」ってところ。

俺はお前との永遠の友情を神に誓ったからな。もうそれを取り消すなんて誰にも出来ないぜ。

まあ、その話しはその辺にしておいて、ミウのことだな。

正直言ってお前の厳しい意見に正直驚かされたよ。こうやって無暗に人を憐れむのは失礼だって。

だけど確かに彼女に同情して、ミウの話し相手になったからって、この問題が解決されないって俺も思う。彼女が変わらないとこれからだって周りとうまくなんてやっていけない。その通りだろうな。

元々俺は前にも書いた通り、ミウがどうなろうが知ったことではないから、別にお前が冷たい人間だなんて思うわけないさ。ただ俺はお前の意見を聞きたかっただけさ。そんな心配するなよ。

しかし俺が最近、ミウの話題ばかりだから、もしかして彼女に惚れたんじゃないかってお前の憶測は間違えもいところだけど。

そんなことない。ただ彼女は同じクラスだから嫌でも視界に入ってくるし、それにあいつはあまりに憐れ過ぎて、どうも気になってしまっただけなんだ。

ただそれだけさ。

あるいは最近俺がアスカについて全く書かないって、それもお前

は怪しんでたな。逆に俺があいつのことを意識し出したんじゃないかって。

それもないね。考え過ぎだ。どうもアスカの性格は苦手なんだよ。マジであいつとは相性が悪いかもしれない。

ああいう不幸な事件もあったし（彼女が着替えているのに、風呂場の扉を開けた事件さ）、前に町まで買い物に行った時のケンカもあるし、あいつと関わると、とにかく面倒なことが起きる。

だからアスカとはばっちり距離を取っている。ずっと無視したままだよ。結局、俺とあの二人の姉妹との溝は深まる一方ってことさ。

さて、そんな暗い話題はこれくらいにして、ちょっとした朗報だ。ここに来てようやく、俺にも友達と呼んでもいいような存在が出来たかもしれない。

名前は何だっけな。まだ覚えていないけど、馴れ馴れしい奴なんだ。田舎者のわりにはペラペラよく喋るし、東京から来た俺に興味深々の様子だし。

でもなかなか面白そうな奴だよ。もちろんお前の代わりになんてなるもわけないけれど、ここに来て一人も友達が出来ないなんて惨めだから、ようやく友達と呼べる存在が出来て安心している。

俺に新しい友達が出来て、お前を嫉妬させてしまったかな。だからってこれで返事が遅れるなんてやめてくれよ。

何て言うのは冗談さ。

お前がそんなことにイチイチ不安を抱く、器の小さい人間じゃないことは周知のことだ。ただの友達と親友は全く違うものだってくらい、お前に説明するまでもないだろう。

じゃあな、でも返事はすぐにくれよ。

俺はお前の返事が遅れたら、何も手につかなくなってしまう、小さな人間なんだから。

○月×日 ミキオより。

第三章 ミキオの手紙 5

最近、東京への空爆が減少傾向にあるっていうニュースを見て安心している。我が日本海軍も頑張ってくれているようだな。もしかしたらこのまま敵を追い返して、華麗なる逆転勝利なんて展開もあるかも。

まだまだ希望は捨てるもんじゃないって、テレビでコメンテーターが言ってたけど、本当にそうかもね。日本だってこんな相手に負けてられないし。この戦いには絶対勝つって俺は信じている。

まあ、そんなことよりお前にも新しい友達が出来たのか。今まで内緒にしてたなんて水臭いな。俺がそれを知ったからって、取り乱したりすると思ってたのかよ。

俺も新しい友達とそれなりに上手くやっている。この前もそいつと学校の帰りに寄り道した。そいつが子供の頃からよく遊んでいた川原に連れていってもらったんだ。その川に向かってよく石を投げたり、魚を手掴みで捕まえたり、真夏は裸で泳いでたんだって。

田舎の良いところだね。川の水はキレイし、空気も爽やかだ。でも毎日こんな遊びだけじゃ退屈だろうけど。

それでその川原に座って、彼から色々話を聞いた。この学校で誰が一番勉強出来て、誰がケンカが強く、誰が女子に人気があるかって。

そいつによれば俺は、俺は生意気だって密かにマークされてるんだってさ。あんまり好き勝手に振る舞っていると危ないぞって警告されたよ。もちろん俺に怖いものなんてないって言い返してやったけどな。

あと、このとき彼からこの村についてのレクチャーも受けた。も

しかしたらこの話が一番興味深かったかな。

昔は近くに造船所があって、この村の人もそこで大勢働いていたらしい。でも不景気でその造船所も潰れ、村に失業者が溢れてたんだって。

それからこの村も寂れ始めたらしい。

その造船所の持ち主であり、昔からこの村の大地主だった一族が住んでいた屋敷が、ちょうど学校と俺が今住んでいる家との間にあって、俺も学校に登校する途中、いつもその前を通っているのだけど、そこはもう爆弾が直撃したんじゃないかってくらい荒れ果てている。

ずっとその屋敷の存在に疑問に感じてたんだよな。屋敷をぐるりと囲んでいる土塀はところどころ崩れかけてるし、その崩れかかった隙間から見える庭も、雑草がこれでもかかってくらい生い茂っているし、本当に巨大な屋敷なんだけど、まるでお化け屋敷みたいな雰囲気なんだよ。それはもう嫌でも目に付いていた。

まあ、そいつのレクチャーのお陰でその謎は解けたよ。昔はそれなりに活気があった村のその名残りだってね。

その屋敷が象徴するように、この村は一時期、本当に暗く沈んでいたみたいだ。

しかし戦争が始まって逆に、村はまた活況を取り戻しているらしい。今までブラブラしていた若い失業者は兵士になって出征し、中年の男性は耕作放棄地だった農地を再び開墾し始め、不景気の頃よりよっぽど村の雰囲気は良くなったんだって。

東京とは大違いだって思わないか。東京は戦争が始まってから何もかもボロボロだけど、ここは逆に良い方向に転じている。何だか皮肉なものだね。まあ、俺から見たら、今でも充分にこの村は暗く沈んでいるように見えるんだけどね。

おっと、ちょっと退屈な話題だったかな。話しを変えるよ。

もちろんそいつは俺がミウの親戚で、今、彼女の家に疎開していることも知っていた。

それでミウの話題になったんだけど、そいつの話しじゃ、昔のミウはこんなじゃなかったんだってさ。確かに大人しかったし、暗いタイプだったけれど、でも普通に友達はいたし、こんなに惨めな扱いを受けてはいなかったらしい。

またミウのことを書いて、お前を勘違いさせてしまいそうだけど、でも事実だから書く。だってますますミウの不遇と言うか悲惨と言うか、そういうのが目に付くようになって、俺は本当に見てられないんだ。

まあ、もちろん、別に人付き合いから背を向けて、孤高に暮らすって生き方だってありだと思っし、誰とも仲良くやっていくのが何よりだなんて俺は思わない。俺はどっちかっていうとそういうタイプだしね。

でもミウが確信を持って、そういう生き方をしているのなら、口を挟むことじゃないと思うけど、そうじゃないのは誰が見ても明らかだ。

その友達の話しだと中学一年の途中から、ミウは突然暗く沈み始めたってことだ。

何かきっかけでもあったのかなって尋ねてみたんだけど、さあね、ってそいつは首を振るだけだ。

あんまりミウに興味なさそうなんだよ。それよりもそいつは妹のアスカのほうに興味があるようで、彼女と一緒に住んでいる俺をしきりに羨ましがってくるんだ。

もしかしたらそいつは俺と友達になりたいわけじゃなくて、アスカ目当てに俺に近づいて来たんじゃないかって疑いたくなるくらい

（もしそうだとしたら俺はしばらく人間不信になりそうだ・・・）。

俺はさりげなくミウの話しを振るんだけど、そいつはすぐにアスカの話題に戻してくる。挙句の果てに、アスカに好きな人がいるか、あるいは付き合っているような男がいるかどうか知らないかって必死に質問してきた。さっきまで俺が質問責めしてたけど、いつのまにか立場が逆転したって形で。

もちろん俺がそんなことを知るわけがない。それどころかあんな口うるさいアスカのどこがいいんだって感じだ。でもそいつにとつてアスカはこの世界一番の美少女に見えるみたいで、俺に向かってキラキラ目を輝かせながら、アスカの魅力を語ってきた。

それでいつの間にか、厄介な依頼を頼まれて、俺も知らないうちにそれに応じてしまっていた。こいつは田舎者の癖に本当に口は達者で、自分のペースに持っていくのが得意なようだ。

その厄介な依頼っていうのは、アスカの趣味とか、好きなタイプとかをリサーチしてくれて依頼で、俺にとって興味の欠片もないような仕事。

本当に面倒なことだ。安請負してしまつて、激しく後悔している。しかもはつきり言つて、この俺の新しい友人は、どう考えても女子に持てるタイプじゃない。

お前と違って背は低く、ガリガリで、チヨロチヨロした猿みたいな容姿でさ、女子の恋心をかき乱す魅力なんて一粒も見つからないんだ。だから俺が誠実にリサーチしてやっても、どう考えてもそれは無駄足になりそう。アスカが振り向くとは思えない。

でもまあ、仕方がない。この異郷の地でそれなりにやっていくとなれば、これくらいの親切心は見せてやらないとな。その代わり俺もいつかそいつを上手く利用することにすればいい。

しかしふと思ったんだけど、俺とお前の間には、そういう貸し借

りいたものは一切なかったよな。

お前が俺を利用しようとするなんてありえなかったし、俺もそういう気には絶対ならなかった。

俺とお前の友情は本当に奇跡だと思う。でも俺があんなに誠実になれたのも全て、お前の人柄のお陰だったのは間違いない。

お前の新しい友人についても詳しく教えてくれよ。

空襲が減少しているとはいえ、まだまだ気を抜くなよ。お前の安全を祈っている。じゃあな。

○月×日 ミキオより。

第三章 ミキオの手紙 6

お前の新しい友人はなかなか魅力的な人物のようだな。それを読んでたら何だか早く東京に帰りたくなったよ。近頃は空襲もどうやら小雨模様になってきたようだから、もうそろそろここを引き払ってもいいんじゃないかって母に聞いてみたんだけど、終戦してからじゃないと駄目だって言われた。

でもまあ、もう少しの辛抱だよな。この戦争もきつと、もうすぐ終わるであろう。しかも我々の勝利で。

さてさて、こっちの生活なんだけど、何だか妙な空気が立ち込め始めた。

妙な空気って表現はおかしいな。俺はちよつとさ、とんでもない事実に突き当たってしまったんだよ。

前にも書いた通り、俺は新しい友人の依頼でアスカの好みのタイプはどんな男性か、もしくは今現在、付き合っている相手がいるかどうかとか、そういう面倒なりサーチをしないといけなかったんだけど、先日、その依頼に応えるためにアスカの部屋にこっそり忍びこんだんだ。

また部屋に忍び込んだのか。

お前の呆れている声が聞こえる気がするよ・・・。

もちろん、そういうのを知るにはアスカに直接聞くのが手っ取り早いし、そもそも他人の部屋に忍び込むなんて言語道断だって、お前の叱責を待つまでもなく、よくよく理解しているよ（何せ前にミウにばれた前科もあり、それがどれだけ相手を怒らせ、そして傷つけるか痛いほど知っている）。

でも俺とアスカは気軽に会話を交わせる仲ではないからね。仕方なくさ、いわゆる苦肉の策って奴だ。

ミウが夕食の買い物に出て、おばさんは仕事でいなくて、アスカが部活（バスケットらしい）で帰って来ていない時間があって、まあ、部屋に忍び込むのはたやすいことなんだ。

しかもその日、アスカは部屋の扉をあけっぱなしにしてたし（鍵は元からないけど）、俺もちょっと早めに家に着いて暇だったし、それに何より俺は人の部屋に忍び込むのが好きな性分かもしれない。それについては言い訳しないよ。

しかしアスカの部屋をさっと見回して、男から貰ったプレゼントらしきものとか、男と一緒に写っている写真があるかどうか確認する程度で、早々に部屋を出ようと思ったんだよ。別に引き出しやらタンスやらを開けて、中を漁ろうとまでは思わなかった。

でも運が良かったのか、はたまた悪かったのかアスカの机の上に日記が置かれているのを発見してしまった。

迷ったよ。もちろんね。

他人の日記なんて絶対読んじやいけない。もしこの手紙や、お前からの手紙が誰かに盗み読みされてたら、俺は絶対にそいつを許さないだろう。だからそれがどれだけ邪悪な所業か俺だって理解している。

それに何より日記なんて読んだら、知らなくていいことまで知ってしまふ。実際さ、アスカの日記は俺への悪口で溢れていて、それにはかなり面喰ってしまったよ・・・。

あいつは俺の性格が悪いとか、マザコンだとか、ナルシストだとか、そんなことばかり書いてやがったんだぜ。

思わず怒りのあまり、俺はその日記をビリビリに破りそうになったよ。何なならすぐにお前をアスカの前に連れて行って、俺がそんな人間じゃ断じてないことを証明してもらおうかと思ったぐらいだ。

・・・そう、まあ、俺は結局、迷いに迷った挙句、アスカの日記に手をつけてしまったんだ。

元々アスカに好かれているなんて期待してなかったけど、自分の悪口があることないこと、ここまで書かれていたら、タフな俺も相当へこんだよ。

でもそれが実は一番の驚きじゃなかった。

確かにここまで悪口が書かれてたらさすがにショックだったけど、日記を読んでの最高の衝撃はそれじゃなくてさ、その次に書かれていることだった。

まあ、あくまでアスカがそう推測とかしているだけだから、どこまで真に受けていいのか知らないんだけど、そこにさ、ミウが俺のことを好きとか何とか書かれてあったんだ。

思わず目を疑ったよ。これまでミウにそんな素振りは全くなかったし、むしろアスカ同様、彼女も俺を嫌いなのかとばかり思っていたのに。

でも以前に俺が軽はずみに言った一言がどうやらミウの心に響いていたようなんだ。

「ミウが可愛いから見惚れていた」って言葉。前に手紙に書いたからお前も覚えていると思うけど、中庭で洗濯物を干しているミウとたまたま目が合って、それで気まずくて適当に出まかせを言ったことがあった。

だけど俺のそんな見え見えの出まかせを耳にして、ミウは気を悪くしただけだと思っていたのに。だってそれ以来、ミウとの距離は明らかに開いたし、ミウの態度もそんなだったから。

しかし実際はそうじゃなかったみたいなんだ・・・。

自分で言うのは変かもしれないけど、俺は他人が自分をどう思っているかってことに対してけっこう過敏なつもりで、全く鈍感なタ

イブじゃないと思う。何ならちよつと自意識過剰なほうで、そういうことに関してかなり目敏いって自信がある。

それなのに俺を騙すなんて、田舎の女子っていうのは逆にわかりにくいものなのかもしれないな。あるいはミウが複雑過ぎるだけなのか。

なあ、エビ夫、俺がちよつと自惚れて、自慢げにこんなことを書いているなんて思わないでくれよ。俺はマジで戸惑っているんだよ。全然俺のこの文章じゃ表現出来てないかもしれないけれど、混乱して、驚いて、これからあいつにどう対処したらいいんだよって感じなんだ。

いや、だけどまだ事態は完全に判明してない。アスカの早とちりかもしれないし、もしかしたら慌てて日記を読んだものだから、どこかで読み誤っている可能性もないわけじゃない。

もう少し様子を伺わないと正確な事実とは判明しないと思う。それにもし、ミウがたとえ俺のことを好きだとしても、だからって俺の態度が変わるわけがない。俺がそれぐらいで、いきなりミウのことが好きになるなんてありえない。小学生じゃないんだからさ。

とにかく俺が決心しているのは、もう二度と人の部屋に入らないことと、他人の日記を開かないこと、これだけは決定だ。

そういうわけで、俺は混乱している。

もう少し頭を整理してみるよ。だから今日はこの辺でペンを置かせてもらう。じゃあな、エビ夫。

○月×日 ミキオより。

第三章 ミキオの手紙 7

アスカの日記なんて読んだことを本当に後悔している。何だかそれで、世界が一変した感じなんだよ。

アスカとは最初から折り合いが悪かったとはいえ、俺に対してここまで悪意を持っているとは思わなかったし、逆に姉のミウのほうは俺の不用意な一言で面倒な勘違いを起こさせてしまって、俺の存在を変に意識させてしまったよう。

確かにミウをさりげなく観察していると、そう思えてくるんだよね。どこことなくその素振りや行動に、俺に対する好意が感じられなくもないって。どうやらアスカの勝手な思い込みでもなさそうだって。

でもそれが俺を居心地悪くしている。これまでも居心地は充分に悪かったけど、また、いつそう悪くなった思いだ。

何だかよくわからないんだけど、ミウに対して罪悪感みたいなを感じてしまうんだよ。

自分でもよくわからないんだけど・・・。

もしかしたらお前だったら俺の心理を理解してくれるかな。まあ、自分でも良くわからないのに、わかってくれなんて勝手な話しただけ。

しかしもし、俺の心理を、お前の華麗な知性で解析出来るのなら試みてくれ。お前は本当に頭が良いし、そのうえ俺のことを誰よりも理解してくれているからね。期待しているっていうとあれだけど、一応待っている。

それにしても日記なんて読むんじゃないかった。さっきから同じことばかり繰り返しているけど、本当に反省しているんだ。

ミウの気持ちにも本当に戸惑っているんだけど、やっぱりアスカの、俺に対する嫌悪感を知ってしまったのもかなり鬱陶しい。

同居している奴にこんなに嫌われていたら、けっこう傷つくもんだよ。顔だって見たくない。心の中でいつも俺を罵っているのかと思うとムカついて仕方がない。

しかもあいつは俺の本質を誤解している。ナルシストだの、マザコンだの、いったいどういう観察力をしているのだろうか。全然俺をわかっていないよな。

一回、あいつを正座させて、俺がそんな人間じゃないことをコンコンと説きたいぐらいだ。まあ、でもそんなことをしてしまうと、日記を読んだことが当然ばれるから到底不可能で、それがじれったいっていうかなんて言うか……。

それにしてもエビ夫、これまで俺はこんなに嫌われたことがあったかな。ただ自分で気づかなかっただけで、実は東京のクラスメイトからも陰口をたたかれていたんだろうか。

そんなことなかったぜって言って欲しいけど、もしそんなことがあったかもしれないってお前が言うのなら、俺は少しばかり自分の振る舞いを反省しないといけない気がするんだよな。

こういうことを考えるなんて俺らしくないことだろうね。確かにアスカにどれだけ嫌われようが知ったことではないし、そもそもそれで反省させられること自体、かなり癪に障ることだ。

でもどうも最近、俺は本当に弱気になっている。

東京から遠く離れ、お前からも遠く離れて、俺は孤独で堪らないよ。

また東京への空襲が激しくなったそうじゃないか。そんなニュースを聞いて心配している。

お前からの返事がちよつとでも遅れたら、俺は食事の喉を通らないくらいになってしまふんだ。だからそっちの生活も大変だろうけ

ど、出来るだけ早く返事をくれ。
待っているぜ。本当にお前の存在だけが、俺のたった一つの光な
んだから。

○月×日 ミキオより。

第三章 ミキオの手紙 8

すまない、ちょっと久しぶりの手紙だよな。いつも早く返事をくれてお前を急かしている俺が遅れてしまうなんてどうかと思うよ。でも実は色々あったんだ。

まあ、そんなに深刻なことじゃないからリラックスして読んでくれ。いや、けっこう大きな出来事かもな。とにかくその色々あったことを順を追って説明していく。色々と言っても、最近の俺のもっぱらの懸案事項、ミウのことなんだけど。

ミウが授業中、教師に当てられて何も答えず、ただ俯いているだけだったことは前に書いたと思う。そしてそんなミウを、クラスの奴らが馬鹿にして囃し立てることが公然の行事みたいになっていることも。

俺はそれをいつも聞き流してたんだけど、でもそのときはどうも虫の居所が悪かったんだろうか、何だか許せなかったんだよな。

「何でこんな問題もわからないんだよ」

「馬鹿か、こいつ」

そんな声があちこちから聞こえてくる。いや、正確に言えばこの地方じゃ「馬鹿」じゃなくて、「アホ」なんだけどね。まあ、そういう細かいことは置いといて。

そういう悪口を女子も言ってるんだだけぜ。俺に言わせれば、こいつらなんか俺の偏差値の半分以下って言っても過言じゃないくらいで、戦争がなければ永遠に机を隣にすることはないんだから、何言ってるんだよって感じだよ。馬鹿が馬鹿に向かって馬鹿って言っている、何とも滑稽な光景なんだ。

それで俺は本当にイラついて、前に座っている奴の椅子の背の部分を、思いつき蹴ってやったんだ。

こいつは率先してミウをいつも馬鹿にしている奴で、いわゆるク
ラスの中心グループの一人だ。イガグリ頭で、ちょっと背が高い。
野球部だそうだ。

こいつに関しては、前からムカつくことがあったんだ。いつもバ
ットの突き出た汚いカバンを、机の横に偉そうに置いていて、俺の
脚の置き場を侵害したりしてな。

それでまあ、思った以上に力が入って、けっこう強烈な蹴りがそ
いつの背中に決まった。

言うまでもなく大変なことになったよ。しばらくそのイガグリ頭
はポカンとしていたけど、事態を理解したのか、「何さらしよんね
ん、東京！」って怒鳴りながら、俺に掴みかかってきた（そう、俺
は陰で「東京」って呼ばれている。それにしても非独創的な仇名だ
ろ）。

一触即発、今にも殴り合いが始まるぞってところで、教師に止め
られて、勝負は放課後ってことになった。

それで放課後、決戦の場として連れて行かれたのが崖の上だった。

ここは海に近い。学校の裏手に、海に隣した崖があるんだ。校庭
にある金網を乗り越えて、雑木林の生い茂る山道をちよつと進む。
するとパツと視界が広げて、眼下に海が見える。

その海を見下ろせる崖は、ビルにすると地上五階建てくらいの高
さはあったかな、その下には白波打ち寄せる海が広がっていて、チ
ラホラと岩が海面から剥き出しに突き出ている。

俺は拍子抜けしたよ。

久しぶりに暴れてやろうと思ったのに、何人かかってこようと、
この俺には敵わないってことをミッチリ教えてやろうと思ったのに

さ。

でもイガグリ頭は言うんだ。

「この崖から飛び降りられたら許したる。お前を男として認めるわ。しかしそれが出来へんのやったら、もう二度と俺たちに反抗的な態度を見せん。また次に俺たちを少しでも不快な目にあわせたら、容赦なくリンチやぞ」

イガグリ頭の後ろにはそいつの仲間と、そしてこの学校の番長みたいな奴、こんなクソ田舎にしか残っていない、絵に描いたような番長が立って俺を威嚇して来る。

更にそんな俺たちを取り囲むように、とんでもない人数のギャラリも集まってきた。

クラスの奴らはもちろん、他の学年、それどころか違う学校の不良も集まってきているんじゃないかってくらい的人数が、俺を見ているんだ。

大変な騒ぎだったよ。この村に来て以来、こんなに大勢の人間を同時に見たのは初めてだったかもな。

驚くべきことに、俺を見ているギャラリーの中にアスカまでいた。ギャラリーの一番後ろのほうに、こっそりと一人きりで。どっかから情報を聞きつけてきたのか知らないけど、こっちを見ていた。

当然、ミウはいなかったよ。そもそもこんな騒ぎになった張本人は彼女なんだけど。まあ、張本人だからこそ、いられるわけないか。とはいえそれだけ大勢のギャラリーが全員、俺がこの崖から飛び降りるかどうか息を凝らして見てくるんだ。

どうやらマジで飛び込まないと洒落にならない状況のようだった。だけどどっかの原住民の成人式かって感じだろ。こんなやり方で勇気を試すなんて馬鹿らしい。近代化されてもう百年以上も経つこの国に、こんな野蛮な風習が残っていたなんて笑ってしまうよ。

それでも俺は一応、崖の端まで近寄って下を覗いてみた。

最初、俺は迷ったよ。どう見ても自殺の名所にしか見えないんだけど、ここから飛び下りた程度でこいつらに認められるんなら、そんなんの簡単なことだって。別に足の一本か二本折れようがどうってことないから。

でもさ、まだ買ったばかりの制服がビショビショになるのは嫌だったし、何だかこいつらのルールに従うのも面白くない。

それにもしここから飛び降りて、足が折れるくらいの怪我で済めばいいけど、万が一、右手が折れたらお前宛ての手紙も書けなくなるじゃないか。そういうことを色々計算すると、どう考えても割に合わないんだよ。

まあ、だから俺は冷静な計算の結果、飛び降りないことにしたんだけど、しかしあいつらは言ってくるんだ。

「おいおい、どうしたんだよ、何ビビってんだよ？」

「これくらいの高さ、子供でも飛べるぞ」

更にあのイガグリ頭などは憎たらしい口調でこんなことを言っ
て俺を罵ってきた。

「おい、東京、お前、あいつの親戚らしいな」

あいつというのはもちろんミウだろう。

「あんな奴を庇うなんて、お前はあの女に惚れとんのか。もしかして親戚のくせにヤッてんちゃうやろな」とか言っ
て、卑猥に腰を動か
しやがるんだ。

ギャラリー全員、それを見て大爆笑してた。野蛮な奴らはこんな下品で単純な冗談がおかしいようだ。

だけど俺としては、そんな下品な罵詈雑言を聞いていたら、逆上するよりもむしろ冷めてきた。何だか全てが馬鹿らしくなったんだよ。

「お前ら、もう中三だろ？ さっさと大人になれよな」

だから俺は一言、そう言って、ギャラリーたちを押しわけ、ここから堂々と立ち去ってやった。

あいつらは俺のその行動を笑ってたな。臆病者とか負け犬とか言っ
て、俺に何か投げつけてくる奴もいた。

だけどお前は俺のこの行動を褒めてくれるだろ？

こんな馬鹿らしい遊びに付き合っ
て、命を危険に晒すのは大間違
いだって言ってくれるだろ？

まあ、でも正直言って、今ではちょっと後悔しているんだけど。
あれぐらいの崖なら、何が何でも飛び降りておくべきだったかもしれ
ないって。だってその次の日から、クラスの中での俺の地位が、
目に見えて低下していったから。

今まで俺は、クラスの中でそれなりに一目置かれていたと思う。
東京から来たっていうのもあるし、抜群に勉強も運動も出来たから
ね。

だけどその日以来、明らかに軽んじられるようになってしまった
んだよ。あの新しい友達まで俺から距離を取り始めたんだぜ。田舎
の奴らの態度はわかりやすいって言うか、直接的って言うか……。

もちろん、クラスメートの態度がエスカレートして、俺に何かち
よっかいでも出そうものなら、俺は一人残らずボコボコにしてやる。
マジでそのつもりだよ。

しかし面倒臭いことになったことは事実なんだよ。

俺は今、はっきり言って後悔している。思わずヒーローを気取っ
て、ミウを庇うんじゃないかってね。この教室での俺の人生はも
う終わってしまったかもな。

ただし、家庭の中での俺の扱いは好転したんだけど。

それも目に見えるようにガラリと変わった。家の中の空気が、ミウとアスカの俺の対する態度が。

特に激変したのはアスカのほうだよ。

アスカなんか俺がああ崖から飛び降りなかったかのを、他の連中と一緒に笑っているんじゃないかって思ってたんだけど、そうでもなかった。

多分、俺が姉のミウの味方をしたから、ああいう騒ぎになったっていうのを誰かから聞いたのかもしれない。それであいつはそれを恩に感じたのかも。

だってあのアスカが俺に言ってきたんだぜ。「もしかしたらあなたのことを誤解してたのかもしれない」って。

いきなりこうやって手の平を返されると、どうしていいか戸惑うよ。こっちは日記を盗み読みして、アスカが俺をどれだけ嫌っていたか知っていたからね。それなのにこれまでと明らかに俺を見る目が変わったんだよ。何て言うのかな、その目の中に温かい灯りが点つたみたいっていうか。

だからまあ、エビ夫、これで良かったのかもしれない。

家の中のギスギスした空気が、風に吹かれたように一掃されたし、あいつらの俺への評価の変更に関係しているのかしらないけれど、晩ご飯のおかずがいつもよりちょっと多くなったし。

それにさ、ミウに対するクラスの連中たちのイジメも、いつキレるかわからない俺の存在を気兼ねしてか、ちょっと収束の気配を見せている。

もしかしたら俺はちょっと良いことをしたのかもしれない。

○月×日 ミキオより。

第四章 アスカの日記 1

○月×日

お姉ちゃんは何を考えているのだろうか。部屋に一人籠もったきり出てこないで。

今日の夕食はお姉ちゃんの当番だったのに私任せだったし、お母さんが帰ってきてても顔を見せないし、結局、その日はずっと私たちの前に姿を現さなかった。

でもまあ、お姉ちゃんの気持ちもわからない。いや、むしろ痛いほど理解出来るかもしれない。お姉ちゃんはこの出来事をどういうふうに整理すればいいのかわからないんだ。今、一生懸命に事態を掴もうとしているんだと思う。

お姉ちゃんがこうやって部屋に籠ったきり、しばらく出てこなかったことが以前にもあった。一年か二年ほど前だ。

そのときお姉ちゃんは頭が痛いって言って、二、三日学校を休んだっけ。そしてその日を境にお姉ちゃんの性格は変わった。

後から聞くと友達とケンカしたとか言ってたけど、そのとき本当は何があったのかよくわからない。間違いなく、けっこう嫌なことがあったのは確かであろう。お姉ちゃんの性格をこんなに暗く沈ませたのだから。その影響はいまだ残っているくらい。

しかし今回はそういうことじゃない。

もしかしたらこれをきっかけに、お姉ちゃんはまた昔の明るい性格を取り戻すかもしれない出来事。

とにかく彼のことについては見直したとしか言いようがない。
あんな性格で、まだよくわからない奴ではあるけど、今回のこと

は素直に褒めないわけにはいかないだろう。なにせ私のお姉ちゃんの味方をしてくれたんだから。

とはいえ、私も何が起きたのか完全に理解出来てないし、色々聞こえてくる噂も矛盾だらけで、どれを信用していいのかわからないんだけど。

でもその様々に交錯する噂の中でも共通するのは、彼がお姉ちゃんをクラスの連中から庇ってくれたということだ。それでああいう大騒ぎが巻き起こったってということ。

まずクラスの男子たちが話しをしていたんだ。放課後、生意気な転校生をあの崖に連れて行って洗礼を浴びせるって。

小さい中学校だから、ちょっとした事件でも簡単に全校中に広まる。それにみんな普段の刺激のない生活に退屈しているからだろうか、必要以上に大騒ぎしてしまう。

しかしこういうことは以前からよくあることで、野蛮な男子たちのケンカ騒ぎはもう飽き飽きだから、いつもの私なら確実に放っておいただろう。わざわざあの場所にまで駆けつけて見学に行ったりはしない。

でも「生意気な東京からの転校生」って言葉を聞いて嫌な予感があった。それでわざわざ部活を休んで、例の崖に向かったら、案の定、彼が騒動の渦の中心にいたわけだ。

最初、それを見たときはなんて人騒がせな奴だっと思った。いったいどんなことを仕出かして、こんなことになったのかって思わず頭を抱えた。しかも彼はビクビクして一向にあの崖から飛び降りようとしないうし。

これは昔から子供たちの間で行われている遊びで、私はさすがに飛び降りたことはないけど、男子が鼻をつまんで、あの崖から海に

向かってピョンピョン飛び込んでいくのを何度も見ている。

だからまあ、別に危険なことじゃない。むしろ子供たちの間でそれを飛べない子は、臆病者の烙印を押されて仲間外れにされてしまうようなレベル。

それなのに彼は飛ばうという素振りすら見せず、挙句の果てには、「お前ら、さっさと大人になれよ」とかいう、場違いな捨て台詞を吐いてスタスタと逃げてったんだから、そのときは本当に開いた口がふさがらなかった。

でも彼が逃げた後、彼を恐い顔して取り囲んでいた男子たちが口々に言っていた言葉を聞いて、まあ、私は今のこの、しんみりした心境に至っているわけだけど。

その男子たちはどうしてだか、お姉ちゃんの話しをし始めたんだ。そして彼がお姉ちゃんを庇ったって言葉も口にした。

そのうちお姉ちゃんと彼がデキてるとか、一緒に住んでいるから毎晩どうのこうのとか、もう聞いていられないくらい下品な話しになったから、私はその場を立ち去ったけど、でもそれでいたい事情はわかった。

まあ、明日バスケット部の先輩たちにそれとなく聞けば、今よりもっと真相に近づけるだろう。いや、別に私からわざわざ尋ねなくても、こういう類の話しはみんな好きだから進んで何か言ってくるに違いない。みんな、私のお姉ちゃんと、私の家に疎開している彼との関係を詮索してくるのは請け合いだもん。

いつだったか忘れたけど、お姉ちゃんが授業中、いきなり幽霊がいるって騒ぎ出して、悲鳴を上げて気を失ったって話しも先輩から聞かされた。

心配しているというよりも、変なお姉ちゃんを持って大変ねって小馬鹿にする感じで。

だから今回だって色々と聞かせてくれるに決まっている。そしてまあ、先輩たちの話し次第で、私は彼をかなり見直さなければならなくなりそうだ。

今までの彼に対する態度を改めないといけなくなるのだ。

第四章 アスカの日記 2

○月×日

今朝、お姉ちゃんは何事もなかったかのように起きてきて、そして学校に行った。

いや、何事もなかったようにというのは違うな。何か言いたそうな顔で、彼を見ていた気がする。

でも言葉が見つからなかったのか、声を掛ける勇気がなかったのか、元氣なく俯いていつものお姉ちゃんに戻った。まあ、私が昨日のことを知っているから、そういうふうに見えただけかもしれないけれど。

でもとにかく元氣に起きて来て良かった。お母さんはそんなお姉ちゃんを見て安心したみたいだし。

昨日は結局、お姉ちゃんは部屋から一步も出てこなかったようだ。お母さんは何があったのか知らないから、当たり前だけどすごく心配していた。お母さんはお姉ちゃんのちょっとした仕草や表情に、常に心を痛めている。

お姉ちゃんは本当にお母さんに心配をかけていると思う。ただでさえ、お父さんが亡くなってから、お母さんは仕事もしなくちゃならなくて大変なのに。

確かにお姉ちゃんは私みたいにお母さんに我儘も言わないし、家事だって文句を言わず熱心にやってくれているので、あまり非難出来ないけど。でもちよつと無理にでも元氣を装って、お母さんを安心させて欲しいものだ。

お姉ちゃんにはそういう気遣いの心がびっくりするくらい欠けているのだ。お母さんに甘え過ぎているっていうか、自分の不幸に居直っていて、それを隠そうともしないというか。

お姉ちゃんにとって学校は苦痛を感じる場所以外の何でもなく、辛くて辛くて堪らないのかもしれないけど、でもこのままじゃ駄目だっと思って、自分を変えようという努力をまるでしてないと思う。それだと少しも現状を変えることなんて出来ないに違いない。

・・・まあ、思わずお姉ちゃんへの不満を書き連ねちゃったけど、でも私はそう思うんだから仕方がない。さすがに面と向かってそんなこと言えないから、その代わり日記には好きなことを書かせてもらうわ。

とはいえ、もしかしたら昨日の出来事をきっかけに、そんなお姉ちゃんも変わるかもしれないっていう希望がないわけでもない。

それで昨日の事件の詳しい事情だけど、案の定、バスケット部の先輩が親切に色々教えてくれた。

それはまあ、だいたい私が推測した通りで、意外だと思うような情報は一つもなかった。でも一応、推測が間違っていなかったことがわかっただけでも、先輩に感謝したい。

しかし先輩たちは二人が付き合っているとか、あるいは彼がお姉ちゃんのことを好きだから庇ったみたいだって噂していた。それが意外だと言えば意外だったかもしれない。

どうして好きだっていう感情がないと、こういう行動には出られないって先輩たちは思い込んでいるのだろうか？

一応、彼とお姉ちゃんは親戚同士で、しかも一緒に住んでいる間柄だ。お姉ちゃんが誰かにかかわれたなら、彼が庇うのはそんなにおかしい話でもないと思う。

確かにあの彼にそんな優しさがあったのは意外で、それは本当に

見直したけれど、でもそういうことは別に恋とかそういう感情がないと出来ないことでは決してないんじゃないの。

だいたい私が彼を心底見直して感動したのは、そんな感情もなく私のお姉ちゃんを助けてくれたということであって、もし彼がお姉ちゃんを好きで、ただ気を引くためだったら、彼に対する印象を改めるほどでもない。

それなら世間でもけっこう有り触れたことじゃないか。好きな人のためなら、これくらいのは出来るだろう。

でもそうじゃなくて、彼は自分にとって少しも得にならないことに勇気を起したわけだから、褒めないわけにいかないと思うのだ。

まあ、もちろん、私がただ単に何も知らなかったという可能性はある。実は二人が付き合っているとか、彼もお姉ちゃんのが好きだってこともあるかもしれない。

しかしやっぱり、二人が私の目を盗んで、いつの間にか仲を深めていたなんて考えられない。

だってあんなわかりやすいお姉ちゃんに誤魔化される私では絶対ないし、彼がお姉ちゃんのことを必要以上に気にしている素振りも特に感じられなかった。それだって一緒に住んでいる私の目を誤魔化せるわけないのだ。

だからやっぱりそんな可能性は低いと思う。先輩たちが噂するようなことは絶対に二人の間にないに違いない。

彼は多分、いわゆる正義感って言えばいいのだろうか、そういうのが強いんだと思う。それでお姉ちゃんを庇ってくれたんだ。

でも彼はそうだとしても、これを機にお姉ちゃんは更に惚れてしまった可能性は充分にある。

いや、可能性どころか確実にそう違いない。あんなことをされる

と、只でさえ、そういうことに免疫のないお姉ちゃんが感動するのは間違いないから。

だとすると何かと、ややこしいことになりそうだ……。

もちろん私は彼を見直しつつあるから、前のようにお姉ちゃんのそういう感情を真っ向から否定するつもりはないんだけど、でも何か同じ屋根の下で暮らしている同士がそういう関係になるのはどうかと思うし、まあ、たとえそれを許すにしても、彼の性格にはまだまだよくわからないところがあることも確かだ。下手するとガラスのようなお姉ちゃんの心は、粉々にされそうな気がするのだ。

まあ、こういう心配をしてしまうのは、私が彼のことを何も知らないからだろう。もちろんこれまでほとんど会話してないんだから当たり前だけど。

よし、これを機会に、ちょっと彼がどんな人間なのか探ってみよう。

そうだ、それがいい。

お姉ちゃんの恋を応援するにしてもしないにしても、とにかくお姉ちゃんのために彼がどういう人間なのか、私が代わりに見極めておいてあげよう。

これまで彼をずっと避けてきたけど、もう切り上げて、これを機に彼との仲も修復しておくべきだと思うし……。まあ、修復っていうほど仲が良いことなんてなかったけれど、でもずっとこのままじゃ、お互いに気まずいままなんだから。

それにもしてお姉ちゃんが彼に何も言っていないなら、私が代わりに一言でも感謝しておかないと。

もしかしたらお姉ちゃんは彼に「ありがとう」の一言も言っていないかもしれない。いや、今朝のお姉ちゃんの様子を見る限りその可

能性は大だ。

そうだとするとお姉ちゃんの影響も悪くなるに違いない。彼にお姉ちゃんの面倒な性格をわかってもらわないと。お姉ちゃんだって感謝してるところと思うけど、かなりの恥ずかしがり屋だってことを説明しておこう。

とにかく決まった。

私の為すべきことは決定した。こういうことは素早いほうがいいと思う。お姉ちゃんは今、お風呂に入ってるからこの間に彼に一言声を掛けておこう。

でも何か緊張するな。

やっぱり明日でいいかな。

こんな時間に彼の部屋をノックして、ちょっと話があるんだけどって切り出すのは変かもしれない。しかもこれまでずっと無視してきたのに。

明日、部活を早めに終えてすぐに家に帰って、お姉ちゃんが料理をしているときか、買い物に出ている間に彼の部屋に行ったほうがいいかな。明日はちょうどお姉ちゃんが料理の当番の日だし。

よし、ようしよう。

その代わり明日は絶対、躊躇することなく行動すること。さもないと三日間、お菓子抜きを刑を自らに科すことを誓う。

第四章 アスカの日記 3

○月×日

さっき、彼と話してきた（私はちゃんと約束を守ったから、三日間お菓子抜きは無しだ）。まだ私の中に緊張が残っている。まるで先生に宿題を忘れた嘘の言い訳をした後のような緊張感。

正直言って、やっぱり彼と話すとうんざりするっていうのがまず第一の感想だ。

私はすっかり忘れていたのだ。彼がナルシストで、マザコンで、しかもお風呂に入っているときに扉を開けたのに、謝りもしないやつだったってことを。

しかも改めて今日気づいたんだけど、彼は面倒臭そうに私の話を聞く。

こういう態度の一つ一つが鼻につくから、私も彼の前に立つと無償に苛々してきつい口調になってしまい、平和な会話が成立しにくいのだ。

しかし今日は、今日だけはそこをとるあえず我慢し、自分でも驚くほどの自制心を動員して、私は素直にお姉ちゃんの例の事件のことでお礼を言ってあげた。

じゃあさすがの彼も驚きながら、でもちょっと照れたのか、満更でもないような表情を浮かべていた。

何だか初めて、彼のそういう表情を見た気がした。

いつも偉そうで、どこことなく押しつけがましい態度なんだけど、私に意表を突かれたことを言われて驚いたのだろうか、取り乱したときに浮かべた表情はいつもと違う感じだったのだ。

何て言えばいいのだろうか、多分、彼の素の態度が見れたと思う。しかもその表情は普段の彼よりずっといい。

まあ、お姉ちゃんを庇ってくれて以来、私はちょっと彼に甘くなり過ぎていく傾向があるのかもしれないけれど。でも本当にそう思ったことは確かだ。

もちろんまだまだ油断してはいけないことはわかっている。そのときだって私が素直にお礼を言ったのに、彼は「別にお前たちに気に入られようと思ってしたんじゃないぜ」って、わざわざ余計な言葉をつけ加えてくる。

どうして私たち姉妹が、彼に軽々しく「お前たち」なんて言われなければいけないんだって思ったし、こっちは素直にお礼を言っているんだから、そんな言い訳がましいことを言う必要なんて少しもないのに。

まあ、でもとにかく悪い人ではないことはわかったと思う。もちろん今日で一氣に彼への評価が一変はしはしないけど（まだまだ観察を続けるつもりだ）、もしお姉ちゃんが何が何でも彼のことを好きだというのなら、とりあえず応援してもいいかなって感じではある。

しかし私はこの一文を書きながら、ハッとして思ったのだけど、彼に恋人がいる可能性もあるんだよな。

心当たりがないわけではないのだ。さっき彼の部屋に行くと、彼はちょうど何かを読んでいた。私が部屋に来て慌てて隠していたけど、多分、あれは手紙だと思う。

もしかしたらそれは恋人からの手紙じゃないだろうか。ってことになれば、彼には東京に恋人がいることになるけど……。

そういえば前にもそういう場面を目撃したことがあった。彼が机

に向かつて一生懸命に何かを書いているのを見たことがあるのだ。
いや、それだけじゃなく、手紙が来るのを心待ちにしているのを見たこともあったっけ。

俺宛ての手紙がなかったかって、ちょっと慌てた感じでお母さんに聞いてたのは一度や二度じゃない。あれはどう考えても、恋人から手紙を待つ態度としか思えない・・・。

やばい。どう考えてもその可能性が高い気がする。だって考えれば考えるほど、思い当たる節がありまくる。

もし彼に東京に恋人がいるとしたら、少々頑張ってもお姉ちゃんの恋が実ることはないではないか。

いや、でもそれだけの情報でこんな重大事を決めてしまうのは良くない。むしろきちんと、そのところをはっきり確かめたほうがいいわ。彼が誰と文通しているのか、思い切って尋ねてみよう。

あらら、また仕事が出来てしまった。また隙を伺って、彼に話しかけないと。

しかも次は前よりも厄介な内容だ。でもまあ、躊躇していられない。とにかく聞くだけ聞いてみよう。彼はかなりお喋り好きみたいだから、うまく誘導すれば何でも話してくれそうな雰囲気があるし。

とはいえこんな面倒なこと、本当は私がやることじゃないのだけども。そもそも当人であるお姉ちゃんがやらないといけないことだと思っただけ。

しかし世にも大人しいお姉ちゃんに、そんなことが出来るわけがないのだから仕方がない。

手のかかる姉を持ってしまったものだ。それが正直な気持ちである。でもそんな姉でも、ちょっと一働きしてあげようって私は思う。彼が誰と文通しているのか調べて、とにかくお姉ちゃんの恋を密

かに応援してあげよう。

第四章 アスカの日記 4

○月×日

でも私は昨日あれから考えて思ったんだけど、たとえば彼に恋人がいるとしても、だからってそれでお姉ちゃんはその恋を諦めていいものだろうか。

それが叶おうが叶うまいが、ただ単にその恋をきっかけにお姉ちゃんが変わるきっかけになればいいんじゃないの。

私はかなり本気でそう思うんだけど、どうだろう。

多分、何よりも最悪なのが、好きなのに何も言い出さず、気がつけばお姉ちゃんの前から彼がいなくなっているパターンだと思う。

お姉ちゃんは大人数しいし消極的だから、放っておけばそういうことになりかねないのだ。それだと何も変わらない。いや、むしろ前より悪くなるかもしれない。だからそれだけは避けなければいけない事態。

でもまあ、それさえ避けられるのなら、別に彼が誰と文通してようがかまわないではないか。むしろそういう詮索は止めて、正面からぶつかればいいんだ。

って別にこれは今日、彼に誰と文通しているのか上手く聞き出せなかった私の言い訳ではない。本当にそう思うんだ。まあ、確かに彼に質問すら出来なかったことは事実なんだけど……。

でも一応、彼に話し掛けたことは確かだ。今日は土曜日、彼は観たいテレビがあるらしく、土曜日だけは夕食が終わってもすぐに自分の部屋に帰らないで、リビングルームに残ってテレビを観るのを

日課にしている。

お姉ちゃんはいつも通りすぐに部屋に引っ込んだけど、私はリビングルームに残って一緒にテレビを観ることにしたのだ。そして隙があれば話しかけて、さりげなく目当ての情報を入手しようとした。

まあ、結局、そのとき何も聞き出せなかったから偉そうに書くつもりはないけれど、でも彼との距離はいくらか縮められたと思う。

最初、明らかに彼は私のいつもと違う行動に戸惑っていたし、私自身も変な感じだったけれど、しかしテレビ番組が中盤にさしかかる頃には一緒のところまで笑ったりして、そんなに違和感もない自然な雰囲気になっていたと思うのだ。

何なら彼は独りでテレビを見るよりも、誰かと一緒のほうが面白いって感じたかもしれない。だから今日は訊くことが出来なかったけれど、このまま順調にいけばいつかそういう話題も自然に切り出せる手応えみたいなのは感じた。もうこれは時間の問題だと思う。というわけで事態は順調に進んでいるのだ。昨日、決意したように彼との仲は修復の方向に向かっているはず。

何だか私にとって彼の存在は、倒すべきモンスターって感じがして面白い。

どうやったらさりげなく近づけるかとか、どこが弱点なのかとか、彼を攻略するための様々な作戦を練るのがけっこう楽しみなのだ。

そういうのがあると、日々の生活にも張りが出るといふもの。まあ、彼をモンスター扱いするとちよっと可哀想なら、複雑なダンジョンでもいい。とにかくゲーム感覚で、ワクワクする感じ。

明日もそのゲームを楽しむことにしよう。

○月×日

やっぱりあいつは最悪だ！

本当に信じられない・・・。

昨日までの上機嫌が全てどこか遠くに吹き飛んでいってしまった。また当分、無視してやる。そして私が彼にちっとも興味が無いということを教えてやるんだ。

そうじゃないと許せない。この苛立ちは簡単に収まりそうにない。

これで書きたいことはもう全部書いたから、ここでペンを置き、日記帳をバシッと閉じたい気分だけど、まあ、一応、私がどうしてこんなにもうんざりするようになったのか、その経緯だけは書いておく。

今日もちよっとしたきっかけを見つけて彼と二人になった。今日は彼がお風呂掃除の当番で、それで私は彼が浴室を掃除をしているところを、洗面台に置いてあったブラシを取るついでに覗いて（実際、そのブラシは必要だった）、そして適当に挨拶をしつつこう切り出した。

「東京と違って、ここは全然遊ぶところがないでしょ。ねえ、暇な時間っていつも何やってるの？」

実はこの質問はけっこう練りに練った質問だった。彼が誰と文通しているか聞き出すことの出来る、かなりさりげないきっかけになると思ったのだ。だって彼が暇なときしているのは、手紙を書くことのはずだから。

でも私にとって「東京と違って、ここは全然遊ぶところがない」

って言葉は、自分の故郷を不当に貶めるようなセリフに思えて、口にするのに抵抗があった。

それでもここは仕方ないと割り切って、そう言ったのだ。

それなのに彼は目をパチパチさせながら私の質問をしばらく検討していたかと思うと、真剣に答えもしないでこう言ってきた。

「どうやら最近、俺に興味が出てきたようだね」って。

信じられない誤解である。私はただ、お姉ちゃんのためを思って行動していただけなのに。

その言葉を聞いたとき、私はあまりに恥ずかしくて顔が真っ赤になってしまった。自分が恥ずかしかっただけじゃなくて、彼の滑稽な勘違いも何だか自分のことのように恥ずかしかったのだ。

でも彼は私のそんな反応を見て、更に勘違いしたのかもしれない。私が彼にズバリ心を言い当てられて、それで取り乱したと思われたかも。だって彼はあろうかことか頭に乘って、鼻歌なんて歌いながらこうも言ってきたから。

「風呂掃除の当番を代わってくれたら、俺のことを教えてやってもいいぜ」って。

誰がそんなことをするもんか。私はもちろん、その無礼な言葉を一蹴してやった。

掃除当番くらい真面目にやれ。自分だって毎日お風呂に入っているんだから、それくらい責任はすすんで果たせ。

そういう当たり前のことを苦痛に感じて、誰かに押し付けようとする人間は嫌いだ。こんな奴は絶対、お姉ちゃんにお勧めできない。

そういうわけでもた彼の評価はガタ落ちである。それに彼に誤解されたままでは耐えられない。だからしばらくまた無視して、それ

で本当は私が彼なんかに関心がないことを教えてやる。
もうこれは心に強く決めたから。
私は絶対に考え直さないから。

第四章 アスカの日記 5

外は雨がシトシト降っている。天気予報では今夜は大荒れの天気になるらしい。まだそんな気配は窺えないけど、確かにちよつとずつ風も強くなり始めているかもしれない。

天気予報と言えここに疎開してきてすぐの頃、あいつが言っていたことを思い出す。東京に住んでいた頃の画面と全然違うって文句を言っていたのだ。

東京では関東周辺の地図の上に明日の天気が予報されているけど、こっちはこっちの地方で何か違和感があって嫌だって。

何を当たり前のことを言っているんだろうか。そんなの当たり前じゃないか。どうして私たちが東京の天気予報を知らないといけないんだ。馬鹿じゃないの？

まあ、でも彼はその天気予報を見る度に、はるか遠い彼方にまで来た感じがして、ホームシックを感じるらしい。

そう説明されると、その気持ちはわからなくはないのだけど・・・。

でもてその後、悪口が始まるのだ。東京とこっちを比べて、東京の生活がいかに良かったか言い始めるのだ。それで結局、私たちの街の悪口を聞かされる破目になる。

本当にうんざりさせられる。何でそんなことを言うのか全く理解出来ない。もしかしたら無意識なのか？ 実は悪気はなくて、ただ本心を隠せないだけなのか？

でも聞かされるほうとしては不愉快極まりないことである。どうしてこの程度の気遣いが出来ないの。本当に馬鹿だとは思えない。

さて、そんな馬鹿と、しばらく話しもしたくなかったのに、今日

の学校の帰り道の途中、偶然遭遇してしまった。

私が家に向かって自転車を軽快にこいで帰っていると、後ろからベルがチリリンと鳴って、何事かと思って振り返ったら彼が自転車を凄いスピードでこいでやってきてきたのだ。

特に会話を交わしたわけではなかったけれど、しばらく同じスピードで自転車を走らせ、まるで一緒に帰っているみたいな感じになっってしまった。

まあ、中間テスト一週間前で部活が休みになって帰る時間が同じになり、しかも同じ家に住んでいて、普通に帰れば家までの道は一本道なのだから、こういうことになるのも仕方ないのかもしれない。明日からもしばらく覚悟しないと。

でもこのとき、ちょっと昨日の仕返しが出来た気がする。彼はきつと、私がまた話しかけてくるんじゃないかって期待していたと思う。それなのに何も喋らないから、当てが外れて戸惑っていたに違いないのだ。

「あれれっ」って彼が思っていたかと思うと、ザマ見ろって感じだ。明日からは、もし彼が話し掛けてきたら、少しくらい返事してあげてもいいくらい気分は良くなった。

しかし今日のこの出来事に関連して、今でも気に病んでいることが一つある。

私と彼が別に言葉を交わすわけもなく、一緒に家に到着した後なんだけど、私が玄関に上がり、彼も続いて入ってきて、じゃあ、先に家に到着していたお姉ちゃんがそれに気づいて、「おやっ」という表情を浮かべて私たちを迎えたことだ。

そのいぶかしげな表情はすぐに消えたし、その後もお姉ちゃんは別に何も言いはしなかったんだけど、やっぱり気にしているようだったと思う。私たちが一緒に帰って来たと、お姉ちゃんに思われた可能性があるのだ。

だからって帰り道に偶然会っただけだって、私からわざわざ言い訳するのも変だから、もちろん私は何も弁解めいたことは言わなかったけど。

でも嫌な感じをお姉ちゃんに与えてしまったかもしれない。いや、嫌な感じを被ったのはお姉ちゃんだけじゃない。誤解された私だってそうだ。

どうも最近の私は誤解続きである。あらゆる人から誤解されてばかり。このままで私の周りから真実がどんどんなくなっていくって、虚像だけが独り歩きし、本当の私が消えてしまいうけ。

なんてね。そんなことありえないだろうけど。

でもとにかくこれで、お姉ちゃんの態度が大きく変わるようなら、さりげなく誤解は解いておいたほうがいいかもしれない。

と言っても、どうやればこのような誤解が上手く解けるのか、良い方法は何も思いつかないけど。

第四章 アスカの日記 6

○月×日

そういえばお姉ちゃんは部活もしてないし、そのうえ彼と同じクラスなのに、二人と一緒に帰っている様子はまるでない。

どっちかが上手く避けているんだろうか。それとも私が知らないだけで、たまに一緒に帰っていたりしているのだろうか。

でも少なくとも昨日も今日も一緒じゃなかったんだから、やっぱりそれはないだろう。まあ、お姉ちゃんは臆病だからそんな度胸もなく、いつも一人でさっさと逃げるように帰っているのかもしれない。

そういうわけでまた今日も帰り道、彼と一緒にあった。

昨夜の雨が朝まで残っていて、学校には自転車で行けず、帰りもノロノロ歩いていたら、じゃあまた彼が昨日同様、後ろから近づいてきて、私の傍にやってきた。

私は彼に気づき、すぐにプイッと下を向いて彼を拒否してやった。でも彼はそれにめげなかったようで、果敢にも私に話し掛けてきた。

彼はいきなり、自分はいかに勉強が得意かっという自慢話を始めた。東京とこっちじゃレベルが違い過ぎて、今度のテストも勉強なんてしないでも全て百点取れそうだって言い出したのだ。

あまりに自信満々な口振りだったから私は思わず、「じゃあ、全部のテストで百点取れなかったらどうしてくれるの？」って答えてしまった。

馬鹿馬鹿しい挑発に乗って、思わず彼の言葉に返事してしまった感じ。

じゃあ彼は余裕の笑みを浮かべて、「全部百点取れなかったら、これから一週間、風呂掃除をしてやる」だって。

一週間っていうのがケチくさい。そんなに自信があるのなら、一カ月って言えばいいのに、やっぱり小心者だ。

だけどそれで返事してしまったものだから、そこから彼と普通に会話する破目になってしまった。

それでどういう会話の経緯を辿ったのか覚えていないけど、いつの間にか話題はお姉ちゃんのことになっていた。

どうやら彼は最初から、そんな話しをしたくて私に話しかけてきた様子。

だったらもう私が出る幕ではないって咄嗟に思った。彼もお姉ちゃんのことが気にかかっているのなら、彼が誰と文通しているか私が探る必要はなく、もうあとは二人で勝手にやってくれて感じて、このときも適当にあしらってやろうと思ったんだけど、でもよくよく話を聞いているとそういう感じでもなかった。

彼はいつになく深刻な表情を浮かべて、お姉ちゃんのことについて話してきたのだ。

まるで難しい方程式の解き方を考えているかのように、あるいはわからない英単語の意味に検討をつけているかのように眉間に皺を寄せて。好奇心とか興味とか、そういうのは一切感じさせない表情で。

「彼女はいったいどういう問題を抱えているんだ？」って。

「も、問題って？」

何のことかわからず、私は彼の言葉にそう尋ね返した。すると彼は言ってきた。

「だからさあ、何か異様に恐がりだろ？ オバケとか幽霊とかが迫ってくるとかどうとか」

「お姉ちゃんがあんたに向かってそう言ったの？ そんなことを

」？

「えっ、いや、別に……。俺に言ってきたというか何というか……」

彼はかなり慌てながら、言い訳めいたことを言ってきた、それでも私がいぶかしげに彼を眺めていたら、「お前は妹だろ？　こういうことを聞いて、何かピンと来ることないのかよ！」と、逆切れされるように言われた。

本当に腹の立つ態度だ。彼に「お前」と言われるとイラッとするし、その偉そうな口調もムカつく。

しかし実は彼の言う通り、「オバケとか幽霊」と聞いて、ピンと来ることがなくはなかった。

なくはなかったのだけど、そのときは知らない振りをしておいた。我ながら意地悪だと思う。でもよくわからなかったのだ。彼がいったいどういうことを尋ねたいのかその真意が。

今もこの日記を書きながら、改めてじっくり考えているんだけど、まだよくわからない。多分、彼も何か隠しているに違いないし。

確かにお姉ちゃんはある日の授業中、オバケがどうか幽霊どうかか叫んで、倒れたことがあるらしい。バスケット部の先輩たちが教えてくれたことがある。もちろんそれは、彼が疎開してくるずっと前である。

まあ、彼はそのことを誰かから聞いたのだろう。

でもそんなのはもう昔の話だ。まあ、確かにちよっとお姉ちゃんの状態を心配したくなるような内容ではあるんだけど、最近のお姉ちゃんはどうそんなこともなく落ち着いているんだ。

だからこの話に関して私はわからない振りをした。っていうか、そんな内容のことを誰彼構わず言い触らしたくもない。

すると彼は何だか不満そうな表情をしていたけど、諦めた様子で

すぐに話題を変えてきた。

「昨日の雨とカミナリ、凄かっただろ？　まるで台風が来たみたいな季節外れの嵐。お前は恐くなかったのか？」

「別に。子供じゃないんだから」

恐いわけがないじゃない。

っていうか、そんなにひどい嵐だっというのは学校で友達に聞いて初めて知った。私はぐっすりと眠っていたから……。

「あんたは恐かったの？」

東京では空襲も耐えて来たって話なのに。

そう言っただけじゃあ、彼は「俺のことじゃないよ」と言っただけで黙ってしまった。

「俺のことじゃないって？」

当然、私はそう尋ねた。だって気になるじゃないか。雨とカミナリを恐がった別の人のことが。だけど彼は私の質問に答えず、それどころか目の前の水たまりをピョンと飛び越えたかと思うと、私を残して家に向かって走っていった。

「一緒に帰ると、彼女に変な誤解をされるかもしれないから」と捨て台詞のような言葉を残して。

「ちょ、ちょっと」

私は何だか彼に置いてけ去りにされたような気分で、彼の後ろを呆然と見つめてしまった。

私の質問に答えずに、誤魔化されたっていうのもあるけど、一人きりにされてしまった感じで、ちょっとばかり寂しくなってる。

でもどうやら彼もお姉ちゃんの昨日の反応に気づいていたのは間違いないようだ。彼と私が一緒に帰ったのを見て、ムツとしたお姉ちゃんの表情を。

いや、何だかそれだけじゃない気もする。彼のそのときの態度や

口ぶりからすると、よりはっきりしたことも知っているような感じ。
何だか彼の態度はそんな雰囲気が見受けられたのだ。絶対に何か
隠している。でもはっきり私にそれを言おうとしない。

どうも嫌な予感がする。

私の知らないところで、事態がムクムクと動いているという空気・
・。

こういう雰囲気を私は昔に経験したことがある。まあ、比べるのは
どうかと思うけど、お父さんが病氣になったときの、あの家庭の
雰囲気を私は思い出してしまったのだ。

あのとき私は幼くて、両親はお父さんの深刻な病状を話してくれ
なかったのだけど、でも家の中の空気は明らかに変で、私はその空
気の乱れに気づかないわけにいかなかった。そしたら案の定・・。
駄目だ。嫌なことを思い出してしまった。今まで生きてきて一番
辛かった日々のことを。

お父さんのことを思い出すのは好きだけど、このときの記憶だけ
は辛い。それを思い出してしまうと、しばらく涙が止まらなくなっ
てしまう。そういうわけで日記どころじゃなくなったので、今日は
この辺で。

第四章 アスカの日記 7

○月×日

私が今まで見た最悪の悪夢、それはお父さんが亡くなって、私たち女三人だけでこの世界に取り残されるという夢だ。

私はそんな夢を何度も何度も見てきた。お父さんが死んで、本当にお母さんとお姉ちゃんと私だけになって、その悪夢が現実のことになってしまったあとも、繰り返し何度も何度も。

その悪夢から目覚める度に私は泣いていた。

不思議なものだと思う。その悪夢が今や私の現実なのに、私は日々その悪夢通りの現実を生きているはずなのに、なぜだか夢の中でお父さんがいなくなったことを知ると泣いてしまうのだ。

夢の中だと悲しみは増幅されるものなのだろうか。普段なら我慢出来ることも、眠りの世界では理性のタガが外れてしまつて。

だけどそんな悪夢を見ても、私は隣の部屋に聞こえるほどの悲鳴をぜったいにあげはしないと思う。思わず子供みたい泣きじゃくるときはあつても、決して悲鳴は発さない。だからこれはやっぱり異常な事態……。

えーと、昨夜、何が起きたのか順に書いていく。

これは多分、昨日の日記に記した、私が感じたちょっとした嫌な予感というやつが、当たってしまったのだと思う。私の知らないところで何らかの事態が密かに進行しているじゃないかっていう予感が、こういう形で私の前であらわになったのだ。

だから真夜中、お姉ちゃんの叫び声が聞こえたとき、普段なら熟睡して、あれくらいで目覚めない私も、そのかすかな予感のせいな

のか、すぐに目が覚めてしまった。

しかしそうは言っても最初、私は彼がお姉ちゃんに何か卑猥なことをしでかそうとして、それでお姉ちゃんが拒絶の悲鳴を上げたのと思った。

そのせいか私は何の恐怖も感じないで、とにかくお姉ちゃんを彼の魔の手から守るろうとばかり部屋を飛び出した。

だけどそれは失礼な誤解だったようで、彼も眠そうに目をこすりながら襖を開けて現れたのは、私が自分の部屋を出たのと同じくらいだった。

それでもまだ起きたばかりで、あまり頭が働かなかったせいか、思わず私は彼にこう言ってしまった。

「ちよつとあんた、お姉ちゃんに何をしたのよ！」

「はあ？ 何言ってるんだよ、お前。俺も今この瞬間、自分の部屋から出てきたばかりだよ・・・」

彼は心底呆れるように私を見てきた。

確かにその通りだった。彼がお姉ちゃんの部屋に侵入してからすぐに戻り、自分の部屋から出て来るというのは時間的に無理。そう言われてようやく私も事態を把握出来た。

「ってことは泥棒か何か？」

私は途端に不安が高まって、彼にすがりつくように尋ねた。

「いや、また幽霊が現れたのかもな」

彼は何か心当たりがあるようにそうつぶやいた。

「ゆ、幽霊？」

そのときは何を馬鹿なことを言ってるんだって思ったけど、結果的にそれは的中していたのかもしれない。だけどこのときは彼のその言葉を聞き流し、とにかくお姉ちゃんの部屋に向かった。

お姉ちゃんの部屋に泥棒がいたらどうしようっていう恐怖心があ

ったけど、彼をお姉ちゃんの部屋の外で待たせ、私だけお姉ちゃんの部屋に入った。

もちろん部屋の中に泥棒も侵入者もいなかった。まあ、いたら大変だ。今頃、呑気に日記なんて書いている場合じゃなかっただろう。それどころか拍子抜けすることに、お姉ちゃんは普通に眠っているようだった。

一瞬、さっきのは叫び声じゃなくて、空耳か猫の泣き声なのかと思った。それで私は首を傾げながら、扉の外の彼を振り返った。じやあ彼がよく見るんだって感じで、お姉ちゃんを顎で差した。

彼の指図どおりに動くのは癪だったけど、確かによくよく見ると、お姉ちゃんは額に汗を浮かべ、何か重いものを胸に押し付けられているかのように小さな呻き声を上げていた。

明らかにさっきの声はお姉ちゃんだってわかるような苦しみ具合だったのだ。

私は驚いてお姉ちゃんに駆け寄った。

私が簡単に揺すっただけでお姉ちゃんは飛び起きるように目覚め、まだ悪夢の中にいるような怯えた表情で辺りを見回した。

「大丈夫？」って私が声を掛けると、どうやらその声が更にお姉ちゃんを驚かせてしまったようで、私から逃げるように部屋の端っこまで飛びのいていった。

まあ、お姉ちゃんはすぐに私だと気づいて胸を撫で下ろしたようだけど、どう見ても最初の怯えようは尋常ではなかった。息も切れて、汗もぐっしりで、まるで運動場を十周ぐらい走り終えた後のように疲れ果てている感じ。

しかしそれなのにお姉ちゃんは「ちょっと変な夢を見ただけよ」と言っ、一切の質問を受け付けないといった断固とした表情で、私を慌てて部屋の外に送り出そうとしてきたのだ。

もちろん、お姉ちゃんの言う通りすぐに外に出る気なんてなかつ

た。だってこのままじゃお姉ちゃんを心配するあまり、こっちが悪い夢でも見そうな心境だったから。

けどどうすればいいかわからなかった。お姉ちゃんはいつもの頑固さを発揮して、私を力づくでも追い出そうとする構えで、私が何を言っても耳を貸してくれない。

でもそのとき彼が部屋の中に入ってきた。

まあ、彼を褒めるのはあんまり気がすまないことなんだけど、このときの彼の行動は結果的に評価に値するものだったような気がする。

彼は部屋に入ってきて私たちの表情を交互に見比べたかと思うと、部屋の真ん中にどかっと座り、いつのまに用意したのかポケットからトランプを取り出して言ったのだ。

「ブラックジャックでもして遊ぼうぜ。もう目が冴えて眠れないだろ？」

お姉ちゃんは呆然として、私だって彼の唐突な提案に呆れて、しばらく啞然としてしまった。だけど彼はそれを少しも気にしたふうもなく、すぐにトランプを配り始めた。

まあ、さっきも言ったようにそれが結果的に良かったようだ。

もちろん最初はこんなことをして遊んでいる場合じゃないでしょって思ったから、どうにかさっさとそれを終わらせようと私は思っていたのだけど、でも当のお姉ちゃんがさっきの恐怖なんてすっかり忘れた様子で楽しみ始めた。

私だってやっているうちに、いつのまにかそのトランプ遊びに夢中になっていた。

今から思うと、彼はかねてからこういうことがいつか起きることをいくらか予想していたような気がする。それくらい素早かったし、的確な処方箋に思えた。

トランプで遊ぶのは時間が経つのも忘れるくらい盛り上がった。彼は手先が器用なのか、トランプをくるのがとても上手だった。まるでマジシャンみたいで、手の中で巧みにカードを操るのだ。

まあ、それは素直に凄くなって感心した。初めて彼の特技を発見したって感じた。

それにトランプの色んなゲームを知っているようだ。ポーカーに大富豪、神経衰弱にスピード、その他に色々、私たちに簡単にルールを説明してきて、これまでやったことのないゲームもした。

結局、どれくらいトランプで遊んでいたのか覚えていない。気がつけば私たちは散らばったトランプを囲み、思い思いの格好で寝ていた。真夜中、あんなにうなされていたお姉ちゃんもスヤスヤと安らかに寝息を立てていたのだ。

学校があるから仕方なく二人を起こしたけど、しばらくそつとしておいてあげたくなるような平和な光景であった。

私たちは今まで何度か、こうやって同じように朝を迎えたことがあるかのように、寝起きの顔を見合わせ、ちよつと照れたように自然に笑い合った。

窓から朝日が差し込み、鳥の声も聞こえる。連日、雨が続いたけど今朝は天気が良いようだ。

しかしそんな朝の光景に和んだのもそのときだけだ。

いったいお姉ちゃんの身に何が起きているんだ？

今の私はその不安のほうをはるかに強い。

悪夢にうなされたお姉ちゃんを見るのはもちろん初めてだった。これまでもこういうことがあったのであれば、ゆゆしき事態である。

もちろんお姉ちゃんはたまたま悪夢と遭遇してしまっただけかもしれない。誰だって不運にもこういう悪夢と鉢合わせてしまうことはあると思う。私だって嫌な夢を見ることは度々あること。

それに彼と一緒に住むようになって、その慣れない状況に神経が過敏になって、そういう夢を見やすい状態なのかもしれない。お姉ちゃんは神経が細やかだから、そういうことがあっても不思議じゃないんだ。

でもやっぱり、かねてからこういう悪夢に見舞われていた可能性のほうが強いように感じる。もしかしたらお姉ちゃんの性格が一変したことも、これに関係があったりして。

まあ、一応、彼に聞いてみるべきかもしれない。

さつきも書いた通り、彼はお姉ちゃんが悪夢に見舞われるかもしれないと、あらかじめ予測しているかのようだった。前兆のようなものがあつたのか、あるいはお姉ちゃんは彼に相談していたのか・・。いや、でもそれはあの大人しいお姉ちゃんに限ってありえないことだと思うけど。

とにかくまた明日の帰り道、彼と一緒にいるだろうから、そのとき彼に尋ねよう。彼がどのように答えるか楽しみだ。それでこの問題がどれだけ深刻なのか、見当がつけられる気がする。

第五章 ミキオの手紙 1

エビ夫、お前がこんなに俺を褒めてくれるんでちょっと驚いている。俺はただ見ていられなかっただけさ。苛立ちが限界に達したんだよ。あれはお前が思っているような正義感とか優しさなんてものじゃない。だいたい俺は後悔しているからね。

前の手紙にもちよつと書いたけど、教室での居心地が最悪になった。ミウの味方をしたことがクラスの連中に気にいられなかったのか、あるいは崖から飛び降りなかったことで、俺を腰抜け扱いしているのか、まあ、学校はつまらなくなった。

その翌日なんてさ、学校に行くと黒板にチョークでデカデカと、俺とミウの名前が相合い傘で書かれてたんだ。

まるで小学生みたいな嫌がらせだろ？ 田舎者は中三になってもこんなことをして喜んでいるみたいだ。俺は平然と無視してやったけど、ヤレヤレだよ。

まあ、その代わりと言っちゃなんだけど、ミウとアスカの俺に対する態度はまるで変わったから、家ではずっと過ごしやすくなったんだけど。それも前の手紙に書いたな。

アスカなんて用もないのに俺に接近してきてさ、何か言いたげな顔で見つめてくる。あんだだけ俺を嫌っていたアスカがだぜ。

昨日なんて一緒にテレビを見た。いつもならアスカは自分の部屋にテレビがあるから、すぐに部屋に引き上げるのに、こんなのか月以上もここで暮らすようになって初めてのことだよ。どうもさ、事あるごとに俺と二人きりになりたがるんだ。

もしかしたらアスカもお前と同じように勘違いしているのかもしれない。俺を善良な人間だと思っていいのかも。まあ、単純な奴だよ。

でもそれにひきかえ、当事者のミウの反応はよくわからなかった。あれ以来、更に俺を避けるような態度で、もしかしたら俺は出過ぎた真似をしてしまったんじゃないかって反省したぐらいだ。

ミウはさ、これまで低飛行ながらも、それなりに安定した学校生活を送っていたのかもしれない。

それなのに俺のあの行動のせいで、俺との仲を壊したてられるっていう嫌がらせまで新しく加わってしまったって、それなりに安定していた彼女の日常を混乱させてしまったかもしれないし、あるいはあれで逆に、ミウに恥をかかせてしまったんじゃないかって気さえした。

別にミウはそれをイジメだなんて感じてなかったかもしれないのに、俺が庇ったりなんかしたことで、逆にイジメと呼ばれうるものだって証明してしまったっていうか、何か上手く説明出来ないけど、わかるだろ？ とにかく俺は余計なことをしてしまったような気がして、ずっと後悔してたんだよ。

まあ、だけどそれは心配のし過ぎだったみたいだ。

今日さ、屋上で一人風に吹かれて昼休みを過ごしていたら、そこにミウがトコトコとやってきて俺に言ってきたんだ。

「私のせいでこんなことになって、ごめんなさい」って。

どうして謝るんだよ。お前のせいじゃないだろうって俺は呆れて言い返したら、いきなり泣き出して、まあ、はつきり言われたわけではないけど、でもこれでミウの気持ちもわかった。

多分、俺が危惧していたようなことはなかったみたいだ。ミウもミウなりに俺と話しをするきっかけを探してたんだろうな。

ミウはクラスメートからの嫌がらせに俺まで巻き添えになっっているのを、よっぽど気に病んでいるようで、それでついに居ても立ってもいられなくなって、謝ってきた感じだった。

ミウは本気で自分が悪いと思っっているみたいなんだ。俺がクラス

の連中を敵に回し始めたことを、ちょっと深刻過ぎるんじゃないかってくらい心配しているんだ。

気にするなって言っても、なかなか引き下がらなかった。そもそも悪いのはミウじゃないし（全部クラスメートたちだよ、悪いのは）、それなのにどうもミウは何でも自分が悪いと思いたがる癖でもあるのかってくらい、卑屈なところがあるんだよな。

いや、卑屈っていうか、自分が悪いと言って、自分の不幸に酔っているのかもしれない。

俺には理解出来ないな、そんな心理。どっちかと言うと何でも人のせいにしてしまう俺としては。ミウは損な性格をしてるなってし
か思えない。まあ、それで悲劇のヒロイン気分を味わえて、気分が
良いって言うのなら止めはしないけど。

やっぱりそういう損な性格になってしまったのには、何か原因でもあるんだろうか。確か一年か二年前くらいまでは、まるでそんなことなかったって話を聞いたし。

彼女は突然変わったって、今ではもう俺に話しかけてこなくなつたあの友達が言ってたんだ（まあ、そいつはもう俺を避けているから、友達とも何とも思ってないけど）。

でもそいつは確かに言っていた。以前のミウはそこまで暗くて大人しいタイプじゃなかったし、教室の中で誰も寄せ付けず、一人でイジイジしているようなこともなかったって。

何だか性格がガラリと変わったようなんだ。あるとき突然、気がつけばこんなことになっていたらしい。

原因があるとなれば何だろうな。もしかして父親を早くに亡くしたことが尾を引いているのだろうか。

でもそれならアスカだってそうだろうし、それに父親を亡くしたのはずっと前のことで（確か小学二年か三年のことだったかな）、かなり時差があって直接関係しているとは思えない。

もちろん別にたいした理由もなく、性格が変わるといふこともあるかもしれない。それなら理由を詮索するだけ時間の無駄といふものの。

まあ、いずれにしても俺の知ったことじゃないんだけどね。ミウのことで俺の一つしかない頭を悩ましている場合じゃないって本気で思う。

何よりの俺の心配事は、お前の身の安全だよ。ここにいたら、生活の瑣事にとらわれて、戦争のことを忘れてしまいそうだよ。

お前も一刻も早くどこかに疎開したほうがいいぜ。今の東京は戦場の最前線よりも危険だっていう考えもあるらしいじゃないか。くれぐれも気をつけてくれよ。

身の安全を第一に考えつつ、そして俺への手紙をその次の優先事項にしてくれ。しかし俺はお前への手紙を何よりも優先しているから。

○月×日 ミキオより。

第五章 ミキオの手紙 2

こんな不吉なことは書きたくもないけど、お前がもし爆弾でちょっと怪我でもしようものでも、俺は許さない。すぐに兵士になって復讐してやる。

本気だよ。俺はいつもそう考えている。

俺の心の中は、空襲の恐怖に怯えながら東京で暮らしている同郷人たちと、何とか敵を追い払おうと戦う、前線の兵士を思いやる気持ちでいっぱいだよ。

それなのに田舎者どもは、狭い教室の中で弱い者イジメをして、嗜虐的な喜びに浸っている。

呑気なものだぜ。日本は今、大変だっていうのに。ここの奴らは誰一人そんな自覚もない。

まだここに疎開したての頃、クラスの中の誰かが俺にこんなことを言ってきたことがある。国は愚かなことをしている。戦争なんて反対だって。

疎開して来た俺に同情的な口調だったから、そのときは聞き流したけど、そんな考え、心底馬鹿らしいと思う。確かに戦争は愚かなことだって点には同意するけど、俺が思うに戦争なんて「反対」出来るもんじゃない。

病氣や災害をさ、「反対」出来ないように。「戦争」って主語と「反対する」って述語はまるでつながらない。文法として成立すらしていないと思う。

まあ、そんな認識の浅い連中は、この人間だけじゃないけど。「戦争反対」なんてシュプレヒコールを掲げて、東京でデモをしてたやつらも全員、日本語の勉強からし直せっていうのが俺の意見だ。「反対」なんて受動的な行動で、「戦争」というあまりに巨大な

ものを打ち消すことなんて出来るわけがないんだ。こんなことで戦争の行方を左右出来ると思ってること自体、おめでたい奴らだ。

突然、こんなことを書き出すなんていったいどうしたんだと思われるかもしれないけれど、何だか無性に腹が立つんだよ。呑気に日常を謳歌している田舎者たちに腹が立つし、ここにいると戦争を忘れてしまいそうな自分自身にも腹が立つ。

おっと、こんな考えをお前に報告するためにペンを取ったわけじゃないのに、書いているうちに熱くなってしまったよ。別にわざわざお前にこんなことを書かなくてもわかりきったことだよな。

さて本題を書くよ。

実はちよつと書き難いことで、だから長々と前置きをしてしまったのかもしれない……。でも俺とお前の間に隠し事は無しだから書く。

はつきり言ってミウはこの頃おかしい。

いや、これまでもずつとおかしかったのかもしれないけど、そのおかしさがようやく俺の目にもはつきり現れてきたただけかもしれないのだけど。

東京のほうではどうか知らないけど、こっちでは昨夜、大雨が降ったんだ。

天気予報いわく、低気圧が異常に発達し、そこに寒気がなだれ込んでどうかこうとか。

風も強かったし、カミナリの音も激しくて、まさに春の嵐だったよ。

それで俺は夜中に目覚めてしまった。嵐の音を聞いているうちにますます寝付けなくなって、それに何だか喉が渴いてきたんで、台所に行って水でも飲もうと思って一階に下りていった。

雨とカミナリの音は凄いいけど、家中が静まり返っていた。

電気もついてなくて真っ暗で、それなりにこの家にも慣れてきたのに、さながらお化け屋敷に彷徨いこんでしまったみたいで、俺は急いで居間のテレビをつけた。

そんな成り行きで、お茶を飲みながらソファに座って、しばらくテレビを見ていたんだ。

別に面白いテレビなんてやってなかったけど、それでも随分気分転換になった。もうひと眠りしようかなって気分になってきた。

でもそのときだよ。階段をギシギシと下りてくる音がして、明らかに何者かがこちにやってくる気配がしたんだ。

マジで焦ったよ。俺は恐る恐る振り向いた。するとそこにいたのはミウだった。

それでも俺はびっくりしてしまっただけだ。

だってミウの顔色は真っ青だったんだ。窓の外の稲光が反射してそう見えたんじゃない。何だか食あたりでも起こしたかのような、あるいはとてつもなく恐ろしいものを見てしまった後のような、そんな顔色だったんだよ。

「どうしたんだよ？」

俺は当然、心配げに尋ねた。

じゃあミウは水を求めて砂漠を彷徨っている旅人のような虚ろな眼差しをしてつぶやいた。

「恐い夢を見た。幽霊に追いかけられる夢・・・」

そう言ったかと思うと、倒れ込むように俺のすぐ横に座ってきたんだ。

俺はミウの正気を疑ったよ。

別に彼女のその不可思議な発言を聞いてそう思ったんじゃない。そうじゃなくて、ミウは他人同士が当然わきまえないといけない距

離感を見捨て、やけに俺にぴったりとくっついて座ってきたんだから。

一瞬、寝ぼけているのかと思った。どう考えても大胆で、いつものミウの行動じゃないんだ。

でもよくよく見るとそういう感じでもない。やっぱり体調が悪いのかと考え直した。ミウの身体から伝わってくる体温はいや熱かったし、それに息も変に荒かったかもしれない。

まあ、ミウが言うには怖い夢を見たからってことなんだけど。

しかしちょっと怖い夢を見たくらいで、ここまで性も根も尽き果てたって感じになるとは思えない。

とにかく俺は戸惑ってたんだけど、ミウは俺に更にぴったりくっついてきて、そのもたれかかったままの姿勢で訴えかけるように言ってきた。

一人は恐いから、このまましばらく一緒にいて欲しいって。

そのときになってようやく、ミウは本気で何かに怯えていることが理解出来た。

全くもって甘えてくるような口調じゃなかったんだよ。本当に怖いものを見て切羽詰まった雰囲気だった。溺れた人間が、藁でも猫の手でも掴もうとする感じ。だから俺も彼女の言葉に頷くしかなかった。

それで結局、夜明けまで一緒にいたんだよな。

それはまあ、はっきり言って何か変な感じだった。

シャンプーの匂いなのか、汗の匂いなのかわからないけど、けっこうミウから良い匂いがするし、彼女は俺にもたれかかるように座ってくるもんだから、パジャマの生地越しにミウの柔らかい腕の感触が伝わってきて、その触れてる部分だけこそばゆい感覚がするっ

ていうか、何かこっちも身体中が熱くなってるっていうか、まあ、さすがにドキドキしたよ。

それでさ、そういう変な感じを誤魔化すためにも、俺は色々と彼女に向かって喋り続けた。

猫と犬のどっちが好きだとか、俺は今まで生きてきてブラックジャックじゃ一度も負けたことがないとか、東京生まれだけどスポーツで得意なのはスケートとスキーだとか、どうでもいいことばかりだけど沈黙は嫌だったんでね。

ミウも最初は心ここにあらずって感じだったけど、途中から焦点が合ってきたかのように、俺の話しに適当に相槌を打ってきたり、何なら逆に彼女から質問を返してきたりもした。

ミウの声をあんなにたくさん聞いたのは初めてだったかもしれない。これまで一緒に暮らしてきて、これまで聞いたミウの声を全部合わせても、原稿用紙二、三枚ぐらいにもならなかったのに、多分この夜だけで短編小説が一篇出来るくらいの会話を遣り取りしたかも。

ミウはどうやら俺が文通しているのを知っていたようで、相手がどんな人なのか尋ねてきた。だからお前のことも色々話したよ。

俺の唯一の親友で、優しく、強くて、背が高くて、体重もけっこうある大男で、動物で喩えれば象みたいな奴だって言ったらミウは笑ってた。

象みたいな大男ってのがなぜか面白かったらしい。本当にそうなのか会ってみたいんだって。いつか会えるよな。

夜が明ける頃には嵐もおさまって、二人とも疲れた感じで、自分の部屋にそれぞれ帰った。

あんなに怯えていたのが嘘のように、帰り際のミウは朗らかだったよ。いつかブラックジャックをしたいって、珍しいいいことに彼

女から言ってきたし、本当に間違えるようだった。

多分、医者が患者の病気を治してやったら、こんな気分になるんだろうな。何かちょっと良いことをした気分だよ。

でもミウが心配だ。

ミウはやっぱりおかしいよ。

いったい何に怯えていたんだって気になる。こんな歳にもなって、嵐をあんなに恐がるなんて、どう考えても異常なことだろう？

確かに激しい嵐だったけど、別に風の強さで窓が割れたり、水が溢れて家に押し寄せてくるなんて直接的な被害はなかったし、だいたいミウ以外の家族はみんな何事もなくスヤスヤ眠っていたんだから。

嵐が最も激しかった時間帯、ミウが窓の外を見ながら、不安げにつぶやいた言葉が忘れられない。

「まるで神様が怒っているかのよう・・・」

ミウはそう言ってたんだ。だから嵐の夜は恐いんだって。

かなり神経過敏なのか、あるいは創造力が豊かなのか、それにしても俺が考えもしない思考法だ。だからこっちとしては首を捻るばかりなんだ。

お前ならミウの気持ち理解出来たりするかな？

俺はふと思ったんだけど、昔からお前はこういう手のかかる女が、どちらかと言えば好みだったじゃないか。

しっかりした女子よりも、どうも放っておけない、危うい感じの奴に魅力を感じてただろ？

そんなことないって照れながら首を振っているお前の姿が目につかびそうだけど。でももし暇があれば検討しておいてくれよ。ミウのこの症状はいったい何なのかを。俺にはさっぱりだから。

俺にわかるのはミウが何か問題を抱えているらしいってことだけ。
妹のアスカや、おばさんがそれを把握しているのかどうか知らない
けれど、ちよっとこのまま放っておくのはまずいんじゃないかって
くらいの問題。

とにかくお前の知恵を拝借したい。

ってことですぐに返事をくれよ。

○月×日 ミキオより。

第五章 ミキオの手紙 3

貴重な意見サンキュー。さすがエビ夫だっと思ったよ。ミウは何か深刻な罪の意識にとらわれているんじゃないかっていう推測、芯を突いている気がする。

確かに言われてみればそうだ。嵐を見て、「まるで神様が怒っているよう」なんて言葉、そうとしか考えられないよな。

ただミウは被害者にこそなれ、加害者になるようなタイプじゃない感じだし、特に何か罪を犯したって心当たりもないから、まだその意見に全面的に賛同出来ないんだけど。

しかしこの分析は非常に論理的で説得力があると思った。お前はちょっととした思いつきに過ぎないって書いていたけど、充分に検討に値するさ。

さてそのミウのことなんだけど、昨夜、一晩中、彼女とトランプをして遊んだんだ。いや、ミウだけじゃない。アスカも一緒に三人で。

いきなりこんなに仲良くなるなんて、どうしたんだよってお前は驚いているかもしれないな。でもそれにはちゃんとした理由がある。聞いてくれ。

きっかけはミウさ。彼女はその夜、ちょっとした騒ぎを起こした。真夜中、普通に眠っている俺とアスカを叩き起こすような悲鳴を上げたんだ。

その声を聞いて本当に驚かされた。あの嵐の夜、ミウは幽霊に追いかけられる夢を見て、真夜中に起きたらしいんだけど、今回は本物の幽霊が出たんじゃないかってくらい叫び声だったから。

だから俺もさすがに心配になって、ミウの様子を見に行くべきか迷った。どうしようか迷いながらも襖を開けたら、ちょうど同じタイミングで妹のアスカも部屋から出てきた。彼女もミウの声で目覚めたようなんだ。それで二人してミウの部屋に行くことにした。

結局、ミウは悪夢を見ただけで、本物の幽霊に行くわしたわけじゃないかったようで、ちょっと胸を撫で下ろしたんだけど。

しかしそれでホッとして、じゃあ、おやすみってわけにもいい。あんな悲鳴をあげたミウを一人にしておくのはさすがに気が咎めるし、ミウだって一人になるのが怖いに決まっている。

けど妹のアスカの手前か、何だかミウは強がって、大丈夫だと言って俺たちを部屋から追い返そうとしてきた。

それでまあ、思いついたんだ。そう言えばミウがブラックジャックをやりたいがっていたんだから、このときが良い機会じゃないかって。

俺は急いで愛用のトランプを取って来て、二人をちょっと強引に坐らせ、さっさとトランプを配った。

「こんなときにどういうつもりなの？」って、アスカは俺の行動に戸惑い、何かぶつぶつと文句を言ってきた。でもミウはピンと来たらしく、大人しく俺に付き合い始めた。それを見て、アスカも嫌々ゲームに加わってきた。

そういうわけで、この三人でトランプをすることになったんだ。だけどけっこう盛り上がったよ。最初は二、三ゲームで終わるつもりだったんだけど、二人もどんどん乗り気になって来て、結局、一晩中それで遊んだ。

女の子二人とトランプで夜中遊ぶなんて、こんな羨ましいことはないってお前は思っているかもしれないな。

まあ、そのところは認める。はっきり言って楽しい夜だった。いや、楽しかったって言うか、目のやり場に困って仕方なかった

って言うか・・・。

ミウはネグリジェみたいなのを着ていて、ちょっと足を動かす度にスカートがめくれて、白い内腿どころか下着が見えそうになるし、それにアスカはショートパンツとTシャツで、前屈みになると胸元が見えて・・・、いや、でも何も見えなかったぜ。

っていうか、そういうのには出来るだけ目をやらないようにしていた。そんなのを意識しているってばれると軽蔑されるのは間違いない。あの夜はもっと何て言えいいのか、・・・そう、何だか修学旅行の夜のような感じだった。

これまでの諍いがまるで嘘のように親密感があって、本当の親戚みたいっていうか、友達みたいっていうか・・・。

ミウも本当に楽しそうによく笑ったし、アスカの負けず嫌いな性格もよく理解出来たって思う。

トランプはけっこう性格が出るだろ、それでこれまでよりもあいつらの人間性が理解出来た気がするんだ。

ミウは大人しいわりには大胆なタイプで、意外と勝負強かったな。一方、アスカは負けず嫌いのわりには負けてばかり。まあ、普段は生意気な奴だから、そこだけは可愛げがあったけど。

しかしどうもあいつは俺にだけは負けるのが嫌みたいで、鬱陶しいくらい対抗心を燃やしてくるんだよな。それには辟易させられたんだけど。

まあ、トランプでコテンパンにやつつけてやったから、俺の凄さが身に沁みてわかったと思う。これからはもうちょっと俺をリスペクトしてくれるはずだ。

真夜中をとうに過ぎて、アスカがトランプを繰りながらウトウトし出して、あいつの手からトランプを取り上げ、最後のほうはミウと二人でやってたんだけど、俺たちもいつのまにか眠っていたようだ。

まあ、一時はどうなるかと思ったけど、平和な朝を迎えたわけさ。その日の朝食は美味しかったな。食卓で顔を会わせても、いつも感じる気詰まり感がなくて、ご飯がスツと喉を通っていく。

それまでは変な緊張感があって、味もイマイチわからないくらいだったんだよ。でもその朝は本物の家族というのはい言過ぎだけども、かれこれ一年くらいは一緒に暮してきたくらいの気安さはあった。

俺はここに来て、初めてホッとしたかもしれない。この家でしばらく上手くやっていけるんじゃないかって思ったくらいだ。ようやく明るい未来が見えた感じさ。

そういうわけで俺はすっかりハッピーな気分だった。

この世に悩み事が全くなかったような、夏空のように晴れ渡った気分でその日を過ごしていた。

それでまあ、俺はすっかり忘れてしまってたんだ。ミウがとらわれている問題のことを。

俺たちがちょっと仲良くなったからって、別にミウの問題は何も解決していない。彼女は悪夢にうなされる程、何かに怯えている。それはまるで変わっていないのに。

それを証拠に次の夜、ミウは枕を胸に抱えて、俺の部屋にやってきた。

一人で眠るのが恐いってミウは言うんだ。でも俺といたら怖い夢を見ないで済むって言ってさ。

そう言われたら彼女を冷たく押し返すわけにいかなかった。ミウが本当に恐ろしい夢を見ていることをこっちは知っているから。

しかしさすがに女性と二人きりで眠るのは気まずいし、こんなところをあのアスカに見られたらどうなるか考えただけで震えてくるし、だから少しも安眠出来なかった。今日は本当に寝不足さ。

実はもうすぐテストで、寝不足は成績に響きかねない。でもそれなのに文句も言わずにミウの悪夢に付き合ってたんだから、お

前も俺を褒めてくれよ。

東京の学校でもテストだろ？

お前の頭の良さは嫌っていう程知っているから心配していない。ただ度重なる空爆の影響で、授業がろくに進んでいないんじゃないかってことが心配だ。

もしかしたらこの手紙が届くのは、ちょうどテストの真っ最中かもしれないな。だからって返事が遅れるなんてやめてくれよ。

俺はテストのことなんてほっぽり出して、お前への手紙を何より優先して書くから。

○月×日 ミキオより。

第五章 ミキオの手紙 4

おいおいエビ夫、まさかお前がこんなイヤらしい誤解をするとは思わなかったよ。

まあ、確かに同じ部屋で寝るなんて、文章だけで読んだら凄い状況を想像させてしまいかねないけど（そうさせないように、前の手紙でサラッと書いてみたんだけど、誤魔化せなかったか・・・）、だけど本当に全然そんなことないんだ。

ただ二人で同じ部屋で眠っているってだけだよ。俺の部屋は和室だからベッドなんかなくて、畳に布団を敷いて眠っているんだけど、サエはそのまま畳の上に敷布団も敷かず、自分の布団にくるまって、俺に背中を向けてちよつと離れて寝ている。

まあ、確かにそれは一晩だけじゃなくて、このところ毎日なんだけどね・・・。

でもお前が書いたようなことは一切ない。部屋は真っ暗だから何も見えないし、夏も近づいてきて窓も開けっぱなしだし、密室の中に二人きりって感じじゃない。

気がつけば彼女が俺の布団に潜り込んでいることなんてあるわけないだろ！ 朝起きるとミウの布団がめくれている、ネグリジェから下着が見えるなんて展開もない。

もちろん俺から何らかのアクションを起こすなんてこともしないさ。

ない、ない、ない、本当にないんだよ。

確かにさ、ミウは不思議なくらいスヤスヤ眠っていて、ちよつとばかり身体を触ったところで起きないかもしれない。

はつきり言って俺も色々考えたことはあったよ・・・。わざとこ

う、寝相の悪い振りをして、寝返りを派手にうってさ、さりげなくミウに触れようとかって。

でもそんなこと出来るわけがない。普段は悪夢にうなされているらしいミウが、本当にスヤスヤと眠っているんだから。まるで揺り籠の中の赤子みたいにさ。

それは何て言うのかな、俺への信頼感の証しだって思うんだよな。それを裏切ったときの代償は大きいだろう。どれだけ彼女を傷つけてしまうことになるか・・・、お前だって俺の立場だったらそう思うはずさ。

だけど俺が眠れなくなったのは事実だ。

どうも胸がドキドキするんだよな。さっきも書いたように俺には何の可能性もないのに、ただ眠ること以外にやることはないのはわかってるのに、やっぱりマンジリとしない。

あと、一緒の部屋に寝るようになったからって、彼女のことが更によくわかったなんてこともないよ。

あんまり会話を交わしていないんだ。

俺としてはこれもいい機会だと思い、どうしてこんな怖い夢を見るようになったのか、心当たりはないかってそれとなく尋ねたことがあるんだ。

やっぱり絶対、何かのきっかけみたいなのがあるはずだろ？

でも俺がそんな質問をしたら、ミウはいきなり「これ以上迷惑を掛けられない」とか言って、部屋を出ていこうとしたんだ。

ただちよつと尋ねただけなのに、まるで俺に傷つけられたとでも言いたげな表情でさ。

ミウはこれだけ俺を頼っている癖に、心を開こうとは思っていないようなんだよな。相変わらず無口でミステリアスなミウのままさ。

でもその口振りや態度からして、何か隠していることは間違いな
いようだ。このとき俺の質問を避けるように出ていこうとしたこと
自体、その証しだと思う。

ミウはきつと何かを気に病んで、幽霊に追いかけられる怖い夢を
見るようになった。

おそらくそうであろう。俺はそう確信している。でもミウはその
何かを俺に打ち明ける気なんて更々ないようだから、俺はどうにも
出来ないんだけど。

まあ、ミウが何も話す気がないというのなら、妹のアスカのほう
に何か心当たりはないかって密かに尋ねたりしている。

お前のお姉さんは深刻な悩みを抱いているみたいだけど、お前は
それが心配じゃないのかって。

アスカは何か心当たりがあるようだったけど、最初、何も言おう
としなかった。それどころかあいづらいことに、逆に俺に質問を
浴びせてくる始末。

アスカはあの夜、俺がトランプを手際よく用意していたところや、
その前の言動から、俺があらかじめ何かに勘づいていたんじゃない
かって疑っていたようだった。

まあ、アスカのその予想はぼっちり当たっているんだけど。

でもあの嵐の夜の密会のことを打ち明けるわけにいかないから、
そこを誤魔化すためにも、俺の質問に答えてから質問をしてこいよ
って少しきつめに迫ってやった。するとようやくアスカも、ぼつぼ
つと情報を口にし始めた。

アスカが言うには、ミウは一年くらい前に、授業中にいきなり幽
霊がいるって叫んだあと、気絶して保健室に運ばれるっていう事件
があったらしい。

それまでそんなことなかったのに、幼い頃に幽霊がいるとか言っ
て騒いだことも、霊感が強い感じもまるでなかったのに、突然にだ

って。

けっこう衝撃的な話しだろ？ 悪夢の中で幽霊を見たっていう話しより、ずっと衝撃的だ。っていうか、その悪夢の中の幽霊と、学校で見た幽霊って関連があるような気がするんだけど。別にそれは俺の気のせいじゃないよな。

それとアスカはこんなことも言っていた。その学校で気絶した事件が起きる少し前から、ミウの性格が何だか変わり始めたって。

これまでもまあ、特別明るかったり、活発なほうでもなかったけど、そのときを境にちよっと人が変わったんじゃないかってくらいになったって。

その話しは一時期仲良くなりかけた俺のクラスの友達からも聞いた。ちよっと前の手紙でもそのことを書いたはずだ。

やっぱりこの辺りに、何らかの事情があることは間違いないよな。ミウの性格の変貌と、教室で見たとかいう幽霊と、そして悪夢の中の幽霊。きっと関連があるはずだ。

それで俺はアスカにその意見をぶつけてみたんだ。この幽霊というキーワードが、ミウのその性格の変貌に関係していると思うのだけど、お前はと思うかって。

でもアスカは曖昧な表情で首を捻るだけだった。

どうもアスカは頼りにならないよ。どうしてミウが突然変わり始めたかって事情も、どうして幽霊とかオバケとか口にし始めたのかも、何もわかってないようだ。

何か知っているのに誤魔化しているって感じではないと思う。あいつは本当に何も知らないよう。まあ、すなわち俺と立場は同じってことなんだけど。

やっぱりミウに直接聞くしかないのか。しかしミウは俺を信頼し

ていないんだろう。夜中に部屋に入ってきて無防備に眠れる癖に、肝心なことは何も打ち明けようとしらない。

だから問題は少しも前進しないで、同じ所に留まったままさ。

だいたいさ、俺もいつまでもこんなこととしていられない。毎晩毎晩、ミウと一緒にいるなんて、それがアスカにばれたらと思うと気が気じゃないし、それに寝不足だってもうかなり深刻な域に達しつつある。

もちろんミウに同情しないわけじゃないけど、只でさえ居候の身で、起きている間も肩身が狭いんだから、せめて夜くらい心置きなく眠りたいものだ。

というわけでそろそろ限界だよ。

ミウは俺を買いかぶり過ぎていると思う。俺がいつまでもミウの親身になり続けていると思ったら大間違いだ。俺はいつでもミウに出て行けって言えるんだ。

ああ、それくらいのこと、躊躇しない男だよ。お前はよく知っているだろ？ 俺の冷徹さを。お前からミウに手紙を出して、それとなく教えてやって欲しいくらいだよ。いつまでも甘えるんじゃないで、腹を割って真相を打ち明けないと、あいつはいつまでも面倒看てくれないぜって。

何てな。まあ、そんなのは冗談だけど。

そう言えばお前も一度だけ、俺の部屋に泊まりに来たよな。確かまだ戦争が始まる前の、夏休みだったけ？

あのときはこの夜が永遠に終わらなければいいって思ったくらい楽しい夜だった。

学校でもどこでも毎日毎日飽きるほど喋っていたのに、なぜだか夜だと違うテンションで、普段とは違う話題とか、思わぬ本音なんか飛び出したりしてさ。

どうしてだろうね。真っ暗な部屋とか、布団とか、パジャマとか、そんなシチュエーションがいつもと違う俺たちにしたのかな。

そんなことを思い出すとお前に会いたくて堪らなくなる。ローカル線やバスを乗り継いでも、東京に帰りたくなるよ。

でもそういうわけにいかないから、目下のところ手紙を書くしかない。この手紙は言わば俺の身代わりでお前に会いに行っているわけだ。

じゃあ、返事を待っているから。

○月×日 ミキオより。

第五章 ミキオの手紙 5

お前は俺がミウに頼りにされて、同じ部屋で眠ることになったことを内心では嬉しいがっているんじゃないかって書いてたけど、それはとんでもない誤解だよ。

本当に寝不足なんだぜ。そのせいでテストの出来もイマイチだった。まだ結果は返ってないけど、手応えは最悪さ。もしかしたら俺の人生で最低の点数が帰ってくるかもしれない。

今の俺はどうしてこんなにミウのことを色々心配してやらないといけないんだって気分だよ。かろうじてまだ忍耐力は持続しているけど、いつ出て行行って叫んでもおかしくない。むしろ穏当に追い出せる方法があるのなら、それを採用したいところ。

まあ、確かにお前の書いた通り、俺は普通の人間が減多に体験しないようなことを経験しているのかもしれない。別に付き合っているわけでもない異性と、一緒に寝るなんて珍しいことだと思う。

お前はその不可思議なシチュエーションを楽しめよって無責任に書いていたけど、でもそんなのは無理さ。当事者になってみろよ。面倒以外の何事でもないんだから。

俺はいわば毎晩、ミウという一個のミステリーを鼻先に突きつけられている感じ。

大人しくて臆病なのかと思えば、こんな規格外の大胆な行動に出るだろ。その癖に無口で俯いてばかりだから、内心では何を考えているのか全然わからない。

前に盗み読みしたアスカの日記に拠れば、ミウは俺のことが好きとかどうとか書いていたから、もしかしてミウは俺に何か期待してるんじゃないかって考えなくもない。

実は悪夢なんて大したことなくて、ただ俺と一緒に夜を過ごした

いだけで、いや、何ならもつとそれ以上のことまで望んでいて、毎晩の部屋にやってきていているんじゃないかってさ。

でももし俺がさ、自分の欲望に負けて、ミウの身体にちょっと触りでもなんかしたら、やっぱりミウは悪夢を見たとき以上の悲鳴を上げそうな気もするし。

「私、そんなつもりなかったのよ、やめてお願いだから、ミキオ君」って泣きながら言われたら、こっちが泣くよ。俺は一生、女性と恋なんて出来ないトラウマを抱えるだろうな。

いや、たとえそんなことがなく、ミウが俺の行為を静かに受け入れたとしても、何だか逆にミウの罠にかかったような気分で、それはそれで不愉快なんだよな。

わかるだろ？ お前なら俺のそんな気持ちも。何だか女スパイのハニートラップに引っ掛かった、間抜けな政治家みたいじゃないか。嫌だよ、俺はそんな間抜けなお男になるのは。

だから前に進むわけにもいかないんだ。そういうわけで同じところで何もせずに立ち止まっているしかなくて、でもそれが一番の苦痛なわけで・・・。

この状態から抜け出すには多分、ミウの謎を解くのが一番だと思う。ミウがどうして幽霊なんでもものに苛まれているのか、その悩みを解決して、一人で眠られるようにしてやれば、俺もこの状態から解放される。

一応、ミウの謎を解くために妹のアスカへの聞きこみはそれとなく続けている。目下の味方はアスカとお前くらいだから。

でもアスカは俺がミウのその幽霊問題を気にしていることを不思議がっている。

あの真夜中の悲鳴以降、最初はそれに戸惑っていたアスカも、今

ではすっかりミウも落ち着いていると思ひ込んでいたようなんだ。
まあ、アスカはミウが毎晩の俺の部屋に来ているなんて知らないのだから、そう思うのも仕方ないかもしれない。あいつはミウが毎晩、一人で眠れないくらい苦しめられていることを知らないんだ。

しかもアスカは、ミウが幽霊を見たと言って学校で気絶した件を、今回の悪夢のことと無関係だと思っているようなんだ。

アスカが言うには、それからのミウはまるでそんな事件などなかったようにずっと落ち着いているらしいから、これはとくに終わったことだって。

どう考えてもアスカは認識が甘いだろう？ その能天気さにマジで腹が立つよ。でもだからって、ミウは今一人で眠れないくらいまで悪化してて、いつも俺と一緒に寝てやっているなんて言えるわけがない。だから俺はあいつの甘さを指摘することも出来ないんだけど・
・。

そんなこんなでおれは悩んでいるわけだ。

どうやったらミウが俺にその問題を打ち明けてくれるか、まあ、それは簡単にいかないだろうから、少なくともアスカをどうやったらかこの問題に引き込むことが出来るか。

はつきり言って一人でミウの心配をするのは負担だよ。アスカにも協力して欲しい。でもあのことをばらすわけにいかないから、何とも難しい。

こんなに悩んでいる俺なんて初めてじゃないかな。しかも他人の問題のことだし。東京で暮らしていた頃は、何の悩みもなく気楽に暮らしていた気がする。

しかしこんな悩みを、いつ爆弾が落ちてくるかわからないお前に相談しているのもどうかと思うんだけど。

まあ、お前は戦争のことを忘れさせてくれる、呑気な田舎の生活が書かれた手紙を読むのは面白いって書いてくれたから遠慮しないで書くけど。ちょっと呑気っていうのは心外だけどさ。こっちはこっちで必死なんだよ。

とにかく暇があれば検討しておいてくれ。どうやったらミウが俺に自らの問題を打ち明けてくれるか、あるいはアスカをどうやらこの問題に上手いこと引き込むことが出来るか。

だからって何にもアイデアが浮かんでこないからって手紙を書かないなんて真似はよしてくれよ。

何はともあれ返事だけはすぐにくれ。

○月×日 ミキオより。

第五章 ミキオの手紙 6

さすがエジ夫だっと思ったよ。お前の作戦通りにして、見事にアスカをこの問題に引き込むことが出来たんだから。

俺は本当にとんでもない親友を持ったもんだ。その感動を世界中に報告して回りたい気分だぜ。でもまあ、お前への賛嘆はこれくらいにして、とにかく経過を報告する。

アスカが、ミウの性格がある日突然変わったことに関しては強い違和感を持っているのなら、それに特化して話を聞けばいいじゃないかっていうお前の提案通り、俺はアスカに質問してみた。

するとアスカも上手くそれに乗ってきたんだ。そしてミウの性格の豹変以来、彼女の行動で何か以前と変わったことはないかって話しになって、アスカはけっこう重要な言葉を口にしたと思う。

アスカに拠ればミウはそれまで遅刻したことなかったのに、そのとき以来遅刻が増えたって。あまりに遅刻が増えたんで、担任から叱責の電話がかかってきたくらいに。

しかも毎日、アスカよりも先に学校を出ているのに遅れていたらしい。どうして遅刻しているのかと言えばその理由は判明していて、ミウが明らかに遠回りしているからだそうだ。

そう言えば俺も毎朝、ミウが遠回りで学校に行っているのを不思議に思っていた。家のすぐ前の、駅に通じる大きな通りをそのまま真っ直ぐに行くのが通学路としては普通なのに、ミウは全く反対の方向に自転車を走らせているんだ。

そして現に今でも、ミウは俺たちよりも先に家を出ているにもかかわらず学校には遅れて到着している。まあ、遅刻まではしていないようだけど。

そのときから今に至るまで、ミウのその習慣は継続しているんだよ。

明らかにおかしい行動だろ？ どうしてわざわざ遠回りをしないといけないのかわからない。アスカも俺のその問いに首を捻って不思議がっていた。

だからその謎だけでも解こうぜって、その翌日、早速アスカを誘い、ミウのあとを尾行にすることにした。まあ、こうして上手くアスカを引きこむことに成功したわけさ。

しかし残念ながらそのときの調査では、大した発見はなかったんだけどさ。

ミウは別に変った行動なんて取ってなかった。どこかに寄り道しているわけでもなく、誰かと会っているわけでもない。

だからただ単に学校が嫌いだから、遠回りしているんじゃないかってアスカと話していたぐらいで、しかしそのわりには授業に遅れないよう凄い必死になって自転車をこいで、決してそんな様子でもなかった。

エビ夫はどう思う？

お前ならどんな推理をするか教えてくれ。これだけの情報じゃ何もわからないって言われるかもしれないけど、でもお前の洞察力には舌を巻いているんだから。

俺としては問題解決の端緒となりそうなのを一応見つけられた気がするから、また尾行したいと思っている。

もしかしたらミウが途中で俺たちの尾行に気づいて、何か隠したっていう可能性だってなくはないし、あるいはそうじゃなくても、その日だけ偶然、何もしなかったってことも考えられると思うから、しばらく注意深く見張り続けるつもりだ。

しかしそれが上手く行き始めた一方、せっかく仲間に引き込めたアスカが面倒な誤解をし始めたかもしれない。

「あんた、お姉ちゃんのこと好きなの？」ってあいつは真顔で俺に質問してきたんだ。

アスカみたいな人間には、こんなに親身になって他人のことを心配しているのは、恋愛感情が原因だとして考えられないよう。

馬鹿らしい。

俺はただ単にゆっくり眠りたいから頑張っているだけなのに。ミウが好きだったら、一緒の部屋で眠るのをこんなに拒否しないって。ただ単にミウの存在が重みになってきたんだ。

もちろんそんなこと言えないから適当に誤魔化したけど、あいつはまだ納得してないみたいだ。

まあ、別にどんなふうに誤解されても俺はどうでもいいんだけど。いや、実はちょっと自分でも自問自答したことがあるんだ。

もしかして俺は知らないうちにミウに恋してはいなかった。

だから俺はけっこうミウに対してだけはこんなに親切で、親身になってやっているんじゃないかって。

ちょっと自惚れた言い方になってしまうかもしれないけど、確かに俺さえその気になれば、ミウは俺のことが嫌いじゃないようだから、簡単に恋人関係になれるのかもしれない。

恋人になれば、デートしたり、キスしたり、もっとそれ以上のことも出来たりするわけじゃないか。

だったら案外、夜もゆっくり眠れるかもしれない（恋人になって、あれをやってしまえばさ。もうこの居心地の悪い宙づり状態から逃れられるわけだから）。

これはかなりの誘惑だよ。考えてみればミウは暗いし、話していても全然面白くないんだけど、顔は可愛くないわけじゃない。肌の色が白くて、ちょっと笑うと優しく目が細まって、はつきり言うてかわいいって思う。

多分さ、おれ以外の人間がミウにこんなに頼られていたら、きっとコロツといているだろうね。

だから俺はかなり冷徹に、自分の感情を客観的に見つめて、アスカの意見を検討してみた。

しかし俺はミウに惚れていない。俺に関してそれはないというのが検討の結果だ。

だいたい俺はこういう恋愛のパターンが一番嫌いなんだよ。好意を持たれているから、こっちも相手を好きになるってパターン。の恋愛が。そんなの主体性がないと思うし、恋にただ飢えているだけって感じがするじゃないか。

恋がしたいから恋をするなんて馬鹿らしい。そんなの女子供の恋愛だよ。俺は男だからありえないってわけさ。

まあ、それにそもそも俺は、世話を焼くよりも焼かれるほうが断然好きだしね。

ちよっとうざいくらい構ってくれる女性のほうがいい。どう考えてもミウはそういうのと正反対だろ。悪いけどミウは手の掛かる赤子だよ。

だからアスカは本当に馬鹿げた誤解をしているということさ。でもそんな誤解をされようがそれをわざわざ正す気もないんだけど。それより何より、俺はどうしてミウが学校をわざわざ遠回りして行っているか探らなければならぬからね。さっきも頼んだように、お前も協力してくれよ。

返事を待っているからな。

○月×日 ミキオより。

第五章 ミキオの手紙 7

またお前は俺の目から鱗を落とすような指摘をしてくれたな。

ミウが遠回りしているのは、これまで通っていた道を通りたくなかったからじゃないかって。

確かにそうかもしれない。あれから何度かミウの尾行をしたし、放課後にもミウが通っている遠回りのほうの道を詳しく探査したんだけど、何にもわからなかったんだ。

何の変哲もない普通の通りなんだよ。どうしてミウがわざわざこの道を選んでいるのかさっぱりだ。正直言って俺もアスカもこの作業に辟易しかけていた。俺たちはまるで見当違いのことをやっているんじゃないかって。

でもお前の指摘だと、ミウが回り道をしている道をいくら調査しても、何も見つからないことになるよな。むしろ俺たちが普段通っている道にこそ何かが隠されているかもしれない。

またお前のお陰で行き詰まりから脱せられそうだ。早速、アスカに提案してみるよ。

あいつは俺以上に忍耐力がないのか、もうこの捜査に飽きている。回り道しているのは、ただお姉ちゃんの気まぐれなんじゃないのって言うんだ。お姉ちゃんは自分の意思をはっきり言い現わさないほうだから、ちょっととした事に神秘的な意味を感じてしまっって、それに私たちは必要以上に振り回されているだけじゃないかって。

まあ、一理ある意見ではあるんだけど、ただアスカはそういうもつともらしい理屈を、もうこの捜査が面倒だから言っているに違いない。ただそれを辞めるための言い訳だよ。

だけどそうかと思うと、あるときアスカは深刻な顔でこんなこと

も言ってきた。

「お姉ちゃん性格が変わってしまったのは、とても悲惨なことがあったからかもしれない。お姉ちゃんはその悲惨な事を忘れたいたいと思っているのに、私たちがほじくり出すのは逆にお姉ちゃんを傷つけるかもしれない」って。

東京でも報じられたと思うけど、この前、神奈川のほうで連続婦女暴行犯が逮捕されただろ。そのニュースを朝食のときに見ていて、その日の学校に行く途中、アスカは口にするのも忌まわしいって感じですってきたんだ。

確かにその可能性もなくはない。

そのときそのニュースをミウも見えていたんだけど、ミウの食事をする手が止まって、それから食が進まないようだった。もしかしたらミウはそんな事件の被害者で、それを隠しているんじゃないかって思わせるようなリアクションだったかもしれない。

本当にそうならばかなりヘビーで、シリアス過ぎて、俺たちの手に負えないことかもしれない。

確かにアスカの言う通り、静かに手を引くべきかもしれない。

でもこれはあくまで俺の直感に過ぎないんだけど、ミウの豹変はそういうことがきっかけではないと俺は思っている。

いや、もしそうだとしても、その事実を蓋するのはやっぱりどうかと思う。ミウは苦しんでいることは確かなんだから、このまま放っておくわけには絶対いらない。アスカは一見、ミウのことを思いやっているようでそうじゃない。

それにミウが恐がっているのは幽霊なんだよ。それと神様。一緒に部屋に眠るようになって、ときおり俺は彼女が浅い眠りの中でつぶやく寝言を耳にしている。

ミウは暴漢に襲われて、その恐怖のフラッシュバックに苛まれた

りして、悪夢を見ているわけではないと俺は確信している。だってもしそうだったら、だいたい男の俺と一緒にいるのも嫌だと思うし。

ミウが何に怯えているのか知らないけれど、でもその胸の苦しみを誰かに聞いてもらいたいはずなんだ。

あの嵐の夜、初めてミウと夜を過ごしたあのとき、彼女は俺に何かを打ち明けたそうにしていた気がする。

まあ、これも俺の根拠のない直感なんだけど、でもきっと口にするれば楽になるようなことなんだよ。

だけどミウはあんな性格だから、それをなかなか言い出せなくて、一人で抱え込んで苦しんでいる。だからこっちでいくらかヒントを掴んで、それをミウにぶつけて、ミウから自然に告白するように仕向ける。

それでミウが何に悩んでいるのかわかって、もしそれが本当にどうしようもないことだったら、俺はミウが一人で眠れるようになるまで、幾晩でも付き合ってやるよ。

ミウがとんでもないことに悩んでいるってわかったら、逆に俺も諦めがつくしさ。俺が東京に帰るまで、ミウをとことん守ってやつてもいい。その程度の覚悟は出来ている。

・・・何だかちよっと熱くなり過ぎたかな。

まあ、とにかく俺の言いたいことは、アスカの弱気に与することは出来ないということさ。お前の意見を参考にしつつ、もうしばらくミウの秘密を探ることにする。

しかしこんなところに来て、まさかこの俺が探偵の真似事みたいなことをするようになるなんて正直思わなかったよ。

実はふと我に返ったとき、後ろめたさを感じるんだ。

さっきからミウのためだって散々書いてきたけど、どっかで、自分の好奇心を満たすためにこんなことをしているんじゃないかって

思ってたさ。

所詮、全部きれいごとかもしれない。俺はただ単に、ミウのミステリーに引きずり込まれているだけなのかも。

でも謎があれば知りたくなるのは、ミステリー小説好きのお前ならよくわかる心理だろ。別に下世話でも何でもないよな。

もしかしたらお前は俺よりもこの謎に夢中じゃないのか。

お前から手紙を読む度に、ちょっとそう思うんだ。まあ、お前のことだからそういうふりをして俺に付き合ってくれているだけかもしれないけどさ。

でもこの謎に興味があって気になって仕方ないのなら、すぐに返事をくれよ。

おっと、こんなことを書くと、まるでミウの不幸を利用しているようだってお前に叱られそうだけど。

○月×日 ミキオより。

第五章 ミキオの手紙 8

ちよつとまずいことになった。

いや、ちよつととじゃないな。これはかなりまずい急展開だよ、聞いてくれ、エビ夫。

ミウと俺が一緒に部屋に寝ていることがアスカにばれてしまったんだよ。アスカは俺を見て、汚らしいとか何とか言って、それから口を聞いていない。

ミウももう俺の部屋に来るわけにいかなくなったから、昨日から一人で寝ている。

まあ、久しぶりにぐっすりと眠れて、俺の慢性的な睡眠不足は解消されたんだけど、でもこれでミウのミステリーから遠ざかることになるそうだ。

また俺たちの間の空気も悪くなったしね。ここに来ただけの時期に逆戻りさ。

しかもばれ方が酷かった。ばれたというか、どうもミウが自らすすんでばらしたって感じで、こっちも彼女は何を考えているのかわからなくなったし。

しかしそもそもそのきっかけはアスカのほうだと思う。多分、あいつが全て悪い。アスカはしびれを切らした感じで、これまでのことをミウに全部言いやがったんだ。

俺たちが密かにミウのあとを尾行していたこと、二人でどうしてミウがこんなことになってしまったのか、毎日話し合っていたことなど。

アスカはコソコソ探るよりも、思い切って直接聞いたほうが早いって言い出したんだ。俺は止めたんだけど、調査は行き詰っていたことは確かだったし（お前からのグッドなアドバイスを頂いたけど、

それも突破口にならなかったんだ）、それに二人は姉妹だろ、ここはその血の絆に任せてみるのも悪くないかもしれないって思っ
て、アスカの好きなようにさせてみた。

でもそれが大失敗だった。やっぱりミウは不愉快に思ったんだろ
うな。今から思うと当たり前のような気がするんだけど・・・。

しかしそのときは俺たちに何の文句も言いはしなかったんだよ。
確かに俺たちの疑問に一つも答えてはくれなかったけど、ミウはそ
れほど怒っている様子ではなかった。

どうしてわざわざ遠回りしているのか、どんな悪夢を見ているの
かとか、アスカは全ての疑問を姉にぶつけて、まあ、ミウはその質
問に対して何も心配することはないって言うように首を振るだけだ
った。

何だか嫌な空気が流れて、悪い予感はしたんだけどね。でもこの
ときはそれで終わった。

しかし問題はその後、その日の夜だよ。

その夜、ミウは俺の部屋にいつもより早くやってきた。いつも
はアスカが寝静まった頃を見図り、足音を忍ばせてやってくるんだ
けど、このときは襖を開ける音もいつもより大きかったし、部屋に
来てからも無暗やたらと物音をたてるし。

俺はてっきりアスカが早くからぐっすり眠ったっていう確信があ
ったから、ミウはそんな不用心なことをしているのかと思ったんだ
けど、逆だった。

ミウは間違いなく、わざとやりやがったんだよ。どうしてこんな
ことやったのか理解出来ないけど。

その音を不審に思ったんだろう、アスカはまずミウの部屋に行っ
て、いないことを確かめてから、俺の部屋にやってきた。

それでジ・エンドさ。

アスカは目をひんむいて驚いていたな。まさかこの家でこんな不品行なことが行われているなんて思いもしなかったって感じの表情で。

もちろんそんなの、あいつのハレンチな誤解なんだけど。

一応、アスカと話をして、その滑稽な誤解を解くように努力はするけど、これはどう考えても簡単に解決しそうにない。あいつはすっかり頭に来ているよ。

でもこれでミウは俺の部屋から退場したから、俺もう必死になる必要もなくなったんだけど。

もうミウが何に苦しみうが関係なくなったわけさ。

まあ、とにかくそういうわけだ。お前は俺たちのことなく稚拙な内輪揉めに呆れているかもしれないな。俺だって馬鹿らしいんだよ。これからどうなるかわからないけれど、またうんざりしそうな日々が始まりそうだ。

○月×日 ミキオより。

第六章 アスカの日記 1

○月×日

不愉快だとしか言いようがない。他人の家でこんな事をしているなんて、私じゃなくても誰だってあんな風に憤っているはずだ。

戦争で日本中が困ってて、自分も戦争からの災禍からを避けるためにここに来たというのに、それなのに何てイヤらしいんだ。

もう一生、口もききたくない。顔だって見たくない。もしまだこんなことが続くのなら、お母さんに言いつけてやる。それでも効き目がないのなら、学校の先生でも、警察でも何でも呼んで、私の家をこれ以上ラブホテル代わりに使わせない。

私は本気だ。本当にムカついているんだから。ずっと彼に騙されていた気がする。やっぱりあいつは最低な性格の人間だったんだ。彼がクラスの連中からお姉ちゃんを助けたのも、結局、そういうのが目的だったんだろう。最初からイヤらしいことしか考えてなかったんだ。それなのに私はすっかり騙されて、彼は実は良い奴だなんて見直してしまっていた。

もしかしてここ最近、彼が私に接近していたのも、いつか私を部屋に引きずり込もうとしていたのかもしれない。

そうだ、そうに違いない。

彼はお姉ちゃんを心配する振りをして、私に優しい性格だということ的印象付け、私が油断し、彼に心を許したのを見計らって、私をもその欲望の餌食にしようとしていたんだ。

どう考えても鬼だ。獣だ。詐欺師だ。

私は何とも愚かなことなんだけど、実はこんなことを思ったりす

ることがあった。彼がお姉ちゃんを心配して私に色々と尋ねてきたり、お姉ちゃんのあとをつけて尾行したりするのは、実は私と一緒にいたいからじゃないかって……。

彼は確かにお姉ちゃんのことを心配しているんだろうけど、本当は私に気があるんじゃないかと思ったりしてたんだ。

そんな勘違いをして浮かれていた私は本当に馬鹿だった。いや、ある意味それは私の勘違いじゃなくて、彼の策略だったのだけど。

もう少しで姉妹揃って彼に弄ばれかけたわけだ。もしそれが学校の友達や近所の人に知られたら、最高の笑い者になっていたことであらう。

彼は悪魔だ。戦争の産んだ狂気だ。彼はそういう人間だったのだ。だからもうそれに驚かされることはないんだけど、しかしその一方で、私が本当に驚いていることは、あの大人しいお姉ちゃんがこんなことをしていたことのほうである。

私はお姉ちゃんを甘く見ていたかもしれない。大人しい大人しいと思っていたら、ちゃっかりやることだけはやるんだ。あんなお姉ちゃんでも人生の快楽だけは満喫するよう。

しかもあんなふうに大胆に、私のすぐ傍で。

たとえばあの悪魔の甘言に騙されたんだとしても、信じられない出来事である。

しかもあのお姉ちゃんの私に対する挑戦的な眼差し……。

多分、お姉ちゃんにはわざとばらして、私に見せつけてきたんだと思う。それは間違いない。お姉ちゃんはあれを勘違いして、私に嫉妬していたんだろうから。

昨日、あの悲鳴の夜以降、実は二人でお姉ちゃんの行動を注意深く見守っていたり、色々と二人で相談していたことをお姉ちゃんに思い切って打ち明けたんだけど、お姉ちゃんはそれでカチンと来たんだと思う。

お姉ちゃんは私と彼が長い時間を一緒に過ごしているなんて知らなかっただろうから、それに驚いただろうし、もしかしたら私に彼を奪われるんじゃないかってことも恐れたに違いないんだ。

本当に馬鹿みたいな誤解なんだけど、とにかく誤解して、それでお姉ちゃんは自分と彼との関係を私に知らしめるため、わざと物音をたてたりして、私が彼の部屋にやって来るように仕向けた。

部屋に入ってきた私を見たときのあのお姉ちゃんの表情から判断する限り、それは疑いようのない事実だと思う。

そのときお姉ちゃんはまるで校庭の銅像のように落ち着いていた。それにひきかえ、彼の慌てぶり。彼は訳のわからない言い訳をして、私に何か弁解をしようとしてきた。

そして今朝もずっと何か言いたげにこっちを見ていた。あんな場面を見られた癖に、まだ私を諦めきれないようだ。ああ、恐ろしい、人間の欲望というのは。

もちろん私は完全に彼を無視し続けているけど。もう二度と彼に騙されるものか。

とにかくもう嫌だ。

さっさとこの家から出て行って欲しい。

いや、私がこの家から出ていきたい。

彼はもちろんのこと、お姉ちゃんもだって顔を会わせたくないから。

私がお姉ちゃんにこんな感情を抱いたのは初めてかもしれない。お姉ちゃんは大人しいし、争いごともし嫌いなタイプだったから、私に声を荒げたり、ケンカしたりすることなんてほとんどなかった。お父さんが亡くなってからは特に。

しかしそんなお姉ちゃんがこんなふうに変貌するなんて……。恋をしたのか、何なのかわからないけど、とても嫌な性格の人間

になっ
てい
る
と
思
う
。

も
う
、
お
姉
ち
ゃ
ん
な
ん
て
嫌
い
。

第六章 アスカの日記 2

○月×日

何だか最近急に暑くなってきた、ああ、夏が近づいてきたんだなって本当に実感するんだけど、でもいくら暑くても自転車に乗っているときは風が心地良い。

その風を誰にも邪魔されず、自転車を軽快に走らせているときの気分は本当に最高。

しかしあるうことか、その心地良い風をあいつが邪魔してきた。

えーと、つまりどういうことかって言うと、部活が終わっての帰り道、私が自転車で家に向かって帰っていたら、両端を畑に挟まれた狭い道の真ん中で彼が私を待ち伏せしていたのだ。何だかまるで違法な通行料を取り立てる山賊のように。

しかも彼は私の行く手を遮るや否や、何と私のことを「エロい」だの「やらしい」だのと言って罵ってきた。

私が呆気にとられたのは言うまでもない。

彼は何の部活にも入っていないから、待っていたとしたら、かなりの時間ここにいたことになる。

私を待ち伏せするためにずっとここで時間を潰していたことにも呆れるけど、しかしそれ以上に、私を見掛ける否や、そう言って罵詈雑言を浴びせ掛けてきたことには驚きと怒りを通り越し、ただただ啞然とさせられた。

まあ、よくよく聞くに、彼は私をただ単に罵りたかったわけではなく、私が誤解をしているからそれを解きたかったらしいのだけど。ただ彼はお姉ちゃんと一緒に部屋で寝ているだけで、私が妄想して

いるようなことは何もないと。そんな勘違いをしてしまうのは、私の頭の中がイヤらしいことばかりだからだって。

「彼女がさ、一人で眠れないっていうから仕方なく、ああなっただけさ。お前が想像していることはないよ」

彼は怒っているとも、何かを頼みこんでくるとも言えるような表情で、私にそう言ってきた。

「ちょっと待って、私が想像していることってたとえば何よ？ あんたに私の想像していることがわかるの？ 私の頭の中が覗けるの？」

あまりの無礼な言葉にしばらく呆然としていた私も、何とかその驚きから立ち直り、そう言い返してやった。「あなたは超能力の使い手か何かなんですか？」

「お前のそのリアクションでわかるよ。お前がどれだけエロい誤解をしているか」

「普通そう思うじゃない。同じ部屋で寝てるんだから」

どんな言い訳してもこんな状況じゃ芸能記者に鼻で笑われるわよ。

「でもマジでそういうことじゃないんだよ」

彼はまるで私がわからず屋だと言いたげに苛々しながら言ってきた。「だから実は今まで黙っていたけど、俺があれだけミウのことを心配していたのはそのせいなんだよ。彼女は毎晩、一人で眠れないような状況なのさ。だから俺は」

あっ、そう。

別にそんな見え透いた言い訳なんてしなくていいわ。私にとってもうそんなこと、どうでもいいんだから。

私はまだ何か言いたげな彼を無視して自転車に跨った。そして彼を振り切るため一気にスピードを上げた。

彼は私を追いかけようと急いで自転車に乗ろうとして足を滑らせたのだらう、背後で豪快に転ぶ音が聞こえた。それで心が挫けたよ

うで、もうそれ以上追いかけてこなくなった。

ザマ見ろって感じた。何なら骨の一本か二本折ってしまえば良かったのに。

しかしわざわざ待ち伏せしてまで、私を侮辱してくるとは、いったいどういうつもりなんだろうか。もうお姉ちゃんとのことはどうでもいいから、これから一切、私にかまうのはやめて欲しいものだ。彼は怒っている人間に追い打ちを掛けて、更に怒らせるのを面白いと感じる性格なんだろうか。まあ、そうなんだろうな。こういうのが好きな困った人間なんだ。

ここ最近、彼と一緒にいる時間が長くて、彼の性格を理解出来ていたつもりだったのにこの始末である。

やっぱり何を考えているかわからない。完全に私の理解の範疇を越えている人間だ。東京では戦争前から少年犯罪が横行していたようだけど、恐らく彼もその空気に毒されたのだろう。

でもまあ、良かったかもしれない。取り返しのつかないことが起きる前に、彼の本当の正体がわかったんだから。もうこれ以上、彼に騙されることはないだろうし。

第六章 アスカの日記 3

○月×日

今日もまた彼が同じところで山賊にみたいに待ち伏せしていた。家の中では話し掛けてこない癖に、外ではまるで違う態度だ。

「俺だって別にお前に誤解されようがどうよされようが、どうでもいいんだけど」

昨日のように途中で私に逃げられないようにするためか、彼は私の自転車のハンドルを掴みながら言ってきた。

「でもせっかくな、それなりにお前と仲良くなれたのに、こんな誤解でその関係を不意にしたくないんだよ。俺の話を最後まで聞いてくれよ」

しかし昨日の無礼極まりない態度と比べると、今日の彼は少し違っていた。自転車のハンドルを握ってきたことを除けば、何だかその態度は紳士的だったのだ。

しかもなかなか感動的なセリフを言うではないか。「それなりにお前と仲良くなれたのに、こんな誤解でその関係を不意にしたくないんだよ」なんて。

マンガとかでその物語のクライマックスにそのセリフが出てきたら、ちよつとウルツとくるかもしれない。まあ、彼が言ってもあまり説得力はないけど。

しかし真剣な彼の表情に免じて、一応、彼の話しに耳を傾けてあげることにした。

「どうしてミウがあんなことをしたのか、お前も何となくわかるだろ?」

彼は言ってきた。

「あれが原因だよ。俺たち二人でここ最近、ミウのことを一緒に探ってたって打ち明けたことが。それでミウは勘違いしてカチンと来たんだと思う。俺とお前がコソコソとミウのことを探っていたことに怒ったというより、それでミウは俺とお前の仲を勘違いしたっていうか、嫉妬したというか……。って、まあ、俺の友達がそうやって推測してくれたんだけど」

「はあ？　ちょっと待って、友達ってどういうこと？　もしかしてそんなこと、あっちこっちで言い触らしたりしているの？」

「だけど相変わらず私を苛立たせる言動に変わりはなかった。もっともっと突っ込んでやりたいことはあったけど、まず私はその発言にカッとなった。こんなトップシークレットに値することを、誰彼構わず言い触らしているなんて。」

「いや、誰彼構わずじゃないよ。ただ東京の友達に手紙で相談していただけさ」

彼はサラッとそう言って話しを進めようとしたけど、私はちょっと待ってと詳しく問い詰めた。

するとまあ、その友達があの文通相手だということであった。私が一時期、気になって仕方なかった人物が、ここになって突然登場してきたのだ。

彼が言うに、その友達は男の中の男で、誰よりも信頼出来る人間だって胸を張って主張してきて、私の心配など取るに足らないと一蹴しようとするのだけど、そうであっても不愉快に決まっている。こんなことを私以外の人間に漏らすなんてありえない。

当然、そう思って私が不満な顔をし続けていたら、彼は更にムキになって言ってきた。その友達がいかに素晴らしい人間で、たとえば私がその友達のことを少しも知らないとしても、こんな誤解をされたら本気でムカつくって。

私はそんな彼の怒り方にうんざりしたけど、彼がそんなに熱くなくなるの親友がいたというのは意外で、本来ならもっとうんざりしても良かったはずなのに、思わずその勢いに押されてしまった。まあ、彼のペースにはまってしまうたのかもしれない。

「えーと、どこまで話したっけ？」

そう言いながら彼は話を戻した。「とにかくミウは俺とお前の仲を誤解して、あんなことをしたんだよ。自分で言うのもなんだけど、ミウは俺のことを独り占めにしたかったっていうか、何て言うか・・・」

本当にこんなこと、恥ずかしげもなく自分で言えるものだ。私は呆れた。

「あんたの言いたいことはこういうこと？ お姉ちゃんはあるんたのことが好きだから、私とあんたが放課後に会ったりしていることを知って、それで私とあんたの仲を誤解して、嫉妬して、お姉ちゃんは見せつけるようにあの場面を見せたってこと」

「そう、そういうことだよ、さすがアスカ」

そんなこと、最初から知ってるわよ。

「でもそれがどうしたっていうのよ？ お姉ちゃんが誤解して、嫉妬したにしても、あんたとお姉ちゃんが一緒に寝ていたことは事実じゃない」

彼の全く効果のない言い訳に呆れながら私はそう言い返した。

「だからそれは何にもないって言っているだろ。ミウは一人じゃ恐くて眠れないらしいから付き添っているだけで、お前が想像しているような卑猥なことは何にもない。ただ単にミウはその事実を利用しただけだよ」

「だからその証拠はって言ってるの？」

「な、ないけど。でも三人で一緒にトランプして、それでいつの

まにか眠っていた日があつただろ？ あれでミウは俺と一緒にいればスヤスヤと眠れそうだって思ったらしく、それから一緒に部屋に寝るようになって……。しかしそれでもたまに悪夢にうなされてる。それだけミウの症状はヤバいんだよ。お前も妹ならもっと心配してやれよ。ミウが何かとんでもない悩みを抱えていることは事実なんだから」

だからそんな証拠のないことを、いくら大きい声で言われたからって少しも説得力のない話しなんだ。私は全く納得出来ない。

彼にはつきりとそう告げたら、彼は少し迷ったように黙ってから言ってきた。

「だったら今夜からお前が、ミウと一緒に寝てやれよ。そうすればお前もわかるよ」

「嫌よ、あんなことがあつたのに」

彼のその提案は無神経極まりないことだと思う。私とお姉ちゃんの仲はかつてないくらい気まずいのに。

だけど彼は私の気持ちなんて少しも歯牙にかけないで、更に続けた。

「次に誤解を解くのはお前の番だよ。ミウに何もかも誤解しているって教えてやるんだ。俺は昨日今日と、こんな何もないところでお前を何時間も待って、こうやってお前の誤解を解いたんだから。お前でも出来るだろ？ それが出来なければお前は俺以下だよ」

「ちよつと待ってよ。こっちは全然誤解なんて解かれてないんですけど。私は今でもあんたとお姉ちゃんが一緒に寝ていて、不純異性交遊をしていたと確信しているわ」

「わかった、じゃあ、それでいいよ。お前は一生、エロマンガみたいな誤解をし続けてろよ」

「何よ、その言い方！」

「でもミウが俺とお前の仲を誤解していることは事実だろ？ 俺とお前は好き合っているわけでもないのに、ミウはそう思っている

可能性がある」

「お姉ちゃんが本気でそう思っているとしたら、本当に最悪だわ」

「だからその誤解を解くのはお前の番だって俺は言ってるんだよ。」

それが出来なければ、もう一度言うけど、お前は俺以下だ」

「・・・わ、わかったわ」

今、思い起こしながら彼との会話をここに置き起こしてみただけど、でもどうしてこんなことで彼に説得されたのかわからない。どうも彼の言っていることは無茶苦茶じゃないか。

だけどあのときは多分、これが出来なければお前は俺以下だって言葉に、過剰に私は反応してしまったのだと思う。それで思わず彼のその提案に同意してしまった。

どうやら彼の挑発に乗ってしまったようなんだ・・・。

まあ、だけど彼の言う通り、もし本当にお姉ちゃんが毎夜、眠れないくらい悪夢にうなされているのなら、このまま放っておくのは気が引けることは確かだ。私が傍にいて、それがまぎれるのなら、一緒に寝てあげてもいいとは思った。

だから私は一応、決心はした。お姉ちゃんと仲直りすることを。もちろん彼に説得されたからではなくて、お姉ちゃんを思う私の真心によってだ。

しかし結果的には彼の言いなりになったみたいで癪にさわる。それにどうも緊張するのだ。お姉ちゃんとケンカしたのはほとんど生まれて初めてだから、私が謝ったときのお姉ちゃんの反応が少しも予測出来なくて。

彼が現れてから、お姉ちゃんは私の見たこともない面をあらわにしている。正直言ってそれはどれも好ましくない面ばかり。やけに嫉妬深かったり、平気で男性に頼ったり。

私のこれまでのお姉ちゃんのイメージは粉々に破壊されているん

だ。お姉ちゃんが見知らぬ他人みたいに思えてならない。

まあ、でもだからこそ、早く仲直りしておかなければいけないと思うのだけど。このまま放っておけば、お姉ちゃんは更に私から遠く離れていってしまいそうだから。

第六章 アスカの日記 4

○月×日

昨夜、私は散々躊躇した挙句、布団と枕を持ってお姉ちゃんの部屋に押し掛けた。

「一人じゃ恐いんなら、今夜から私が一緒に寝てあげる」

私はそれだけ告げて、さっさと持ってきた布団を敷いてすぐに横になった。素直に謝るのも、お姉ちゃんは誤解しているよって切々と説くのも嫌だったから。そういう面倒なのは後回しにしておいて、とにかくお姉ちゃんの部屋に入りこむのが第一だと思ったのだ。

お姉ちゃんは不服そうにしていたけど、特に何も言わないで私の行動をただじっと見守っていた。

多分、お姉ちゃんも私とつかじつくりと話し合いたいと考えていたんだろう。お姉ちゃんが私を見るその視線にも、私と同じ決意に似たものが窺えた。

しかし話し合いは一向に始まらなかった。私が何も切り出せなかったからだ。

部屋に押し掛けたのは私だから、当然のこと、話を切り出さなといけないのは私のほうだというのはわかっていたけど、私は見慣れない天井を眺めたまま黙り続けてしまった。

軽い世間話しから始めるべきか、共通の思い出話しから語ろうか、あるいはいきなり本題を切り出すべきか、色々と迷っていたんだ。そしてそのうちに、沈黙の地位が向上したかのようになって、ますます話しづらくなってしまった。

ただひたすら時計の音だけがカチカチとなっていた。その時計の音が沈黙をかき立て、私の口をますます重くさせる。全てが私とお

姉ちゃんの会話を邪魔しているかのようにだった。

もうこのまま時間だけが過ぎていって、すぐにも朝が来てしまうんじゃないかって思いかけた頃、しかしお姉ちゃんのほうから話し始めた。

ただお姉ちゃんはポツリとこう言ってきたのだ。

「彼の傍にいたら、怖い夢を見ても平気なの」

あまりに突然過ぎて、私はお姉ちゃんが寝言でも言ったのかと思ってしまう。でもお姉ちゃんは私をしっかりと見据え、そう言ってきた。

私は驚いて、しばらくお姉ちゃんをいぶかしげに見るだけだった。何だかお姉ちゃんはまるでそのことを恥じるかのような表情をしていた。自分の現状を嘲笑うような、でも彼無くしてはいられないってはつきり私に言ってきた。

その言葉の意味が少しずつ私の胸に沁み渡っていくにつれて、彼が私に必死に言い訳していたことが本当だって納得せざるを得ない気になった。そのときのお姉ちゃん表情が、その言葉にかなりの説得力を与えていたから。

何だかとても意味深で、同情をかき立てるような表情。もう到底これ以上放っておけないという感じだったのだ。彼もそんなお姉ちゃんを見たら、どんなおかしい頼みでも頷くかもしれない。

「でも多分、アスカちゃんとか駄目だと思う」

お姉ちゃんは更にそう言ってきた。

「えっ？　わ、私とじゃ駄目って・・・？」

その言葉の意味がわからなくて私はそう返事を返した。だけどそう言いながら、私はハッとして思い出したことがあった。

そう言えば昔、一年ぐらい前だったと思う。お姉ちゃんが私と一緒に寝てって頼んできたことがあった。

ちょうど幽霊騒動があった頃、お姉ちゃんの性格が変わり始めたときだったと思う。私は別に深く考えず、お姉ちゃんのその依頼をオッケーした。

確かそれが一、二週間続いたと思う。だいたいお姉ちゃんが私の部屋に来て、ベッドの下に布団を敷いて寝ていた。

でもお姉ちゃんのほうから突然、もう別々に寝よって言ってきて、それから一緒に寝ることはなくなった。

何だかそのときのお姉ちゃんの断ってくる口調が、私にがっかりしているというか、私じゃ助けにならないって言うか、そんなニュアンスが感じられた。

それがとても印象に残っていて、けっこうあとまで尾を引き続けた。どうしてお姉ちゃんは突然、私と一緒に寝てくれたと頼んできたのか、そしてそれを止めるときの口調が、あんなだったのか。

そのときはその訳がわからないまま、時間と共に忘れていったのだけど、今、ようやくその意味がわかった。

お姉ちゃんはこの時期から既に悪夢を見ていたんだ。それで一度私に頼ってきたことがあった。だけど私と一緒に寝ても、上手く安眠することは出来なかった。

って言うことは一年前からお姉ちゃんは苦しんでいたってことだ。
・・・

私はそれを聞いて胸に迫ってくるものがあった。お姉ちゃんのとが心配で堪らなくなって、私は思わず急き込むように尋ねた。

「お姉ちゃん、どうしてこんなことになったの？ 怖い夢って何なのよ？」

でもお姉ちゃんは私のその質問には何も答えてくれなかった。言ってもどうにもならないと言った感じで、うっすらと微笑んだだけだ。

しかしその代わりなのか、お姉ちゃんは毎晩どんな悪夢を見るの

か教えてくれた。井戸から幽霊が出てきて、それが追いかけてきて、逃げ回っているうちに息が切れ、苦しくなって目が覚めるって。寝ているだけなのにマラソンを走ったときのように疲れると。

「彼が隣にいてくれたら、そんな悪夢を観ないで済むの？」

私は尋ねた。

お姉ちゃんは私の問いに首を振った。

「でもいつも彼が助けてくれるから。あのときみたいに。だから逃げないで済むの・・・」

「あのときって？」

「教室の中」

おそらく教室でクラスメートからからかわれていたところを庇ってもらったときのことだろう。

よっぽどそのときのことが印象に残っているのか、どうやらお姉ちゃんは彼の夢の中のナイトのよう・・・。

「でも私じゃ頼りにならないんだね」

私は苦笑いしながら言った。お姉ちゃんも苦笑いして私の言葉に頷いた。

私はお姉ちゃんの話しを聞いて、更に色んな疑問が沸いた。まだまだ質問したいことがあった。この機会を逃してはいけないと思って、更に尋ねようと思った。

でもお姉ちゃんは私のそんな気配を察したように、ゆっくりと静かに背中を向けてしまった。ちょっと喋り過ぎた。もうこれで質問は打ち切りよって感じで。

だから仕方なく、私はお姉ちゃんの背中に向かって一人で話し続けた。

お姉ちゃんは誤解している。私と彼はただお姉ちゃんのことを一緒に心配していただけで、別にお姉ちゃんが危ぶむようなことは全

くないって。

確かに影でコソコソしていて、お姉ちゃんを驚かせたかもしれないけど（お姉ちゃんにしてみれば、私と彼は普段ほとんど喋りもしないと思っっていたはずなのだ）、でもそれもこれも彼がお姉ちゃんを心配するあまりの結果だ。

「多分、彼もお姉ちゃんのこと好きだよ。私は応援してるから」

まあ、このセリフは言えなかったのだけど・・・。

言っておいたほうが、もっと上手に誤解を解けたかもしれないな。でもとにかくお姉ちゃんの誤解を解く努力はした。私は彼と約束したことを果たそうと思ったのである。お姉ちゃんは今もう一言も返事してくれなかったけど、これは別に質問じゃないからかまわない。お姉ちゃんが聞いていないはずがないから。

それから更に私はこんなことも言っておいた。彼と一緒になら安心して眠られるのなら、また明日から一緒に寝ればいいって。

「でも二人きりだと何かと問題があると思うし、お母さんにばれたら絶対びつくりするはずだから、私も一緒に三人で寝よう」

お姉ちゃんはそのとき、ようやく私のほうを向いた。

第六章 アスカの日記 5

○月×日

早速、私は彼にこのアイデアを話した。彼は意表を突かれたのか、最初は間拔けな顔であんぐりと口を開けていたけど、お姉ちゃんがあんたの傍じゃなければゆっくり眠れないらしいって私が告げると、渋々と頷いた。「まあ、いいか。二人きりよりも逆に眠れるかな」って言うって。

しかし私がそんな提案をしてきたことに彼は安心もしたらしい。どうやら私も本腰を入れてお姉ちゃんのことを心配し始めたようだ、と。

まあ、それに関しては認めざるを得ないと思う。お姉ちゃんといくらか話して、今までの私の認識は浅かったことがよくわかった。

お姉ちゃんはどうやら簡単に癒すことの出来ないような問題を抱えている。

しかし果たしてそれは、ちっぴけな私たちの手に負えるような問題なのだろうか。

それにもしかして私たちがその問題に不用意に近づくのは、余計にお姉ちゃんを傷つけてしまうことになるんじゃないか。

前にもそんな躊躇を感じただけど、このときもまた私がその不安を彼に告げたら、前と同様に彼に叱られた。「毒を食べるなら皿までだろ」って声を荒げられて。

こんな単純な説得のされ方をしても、はあ、そうですかって納得出来るわけもないんだけど、でもこれはお姉ちゃんのためだとか、そういう類のきれいな事を並べて説得してこないのは好感が持てると

思う。

彼は取っつきにくいし、どうも無愛想だから、とにかく悪いほうに誤解されやすい性格だと思うけど、いわゆる悪人じゃないと思う。私の思う悪い人っていうのは、好かれるためなら嘘を平気でつく人。人を説得するために空約束をしたり、美辞麗句を並べる人のこと。少なくとも彼はそんなタイプじゃないだろう。

・・・って、ちょっと前まで彼の悪口を書いていたのに、何だか手の平を返しているみたいだけど。もしかして私自身が、私の嫌いなそういうタイプなのかな。少なくともちよっと調子が良過ぎるかもしれない。反省しないと。

まあ、とにかく今夜から三人でお姉ちゃんの部屋に布団を並べて眠ることになった。

どうしてお姉ちゃんの部屋に決定したのか、その理由だけは簡単に記しておく、お姉ちゃんの部屋は私や彼の部屋より少しだけ広いし、置いている物も少ない。

それに私の部屋はお母さんの寝室の真上だから、万が一にも三人分の足音が聞こえたりしたら怪しまれると思うし、何より私も彼もお姉ちゃんのためを思っただけの行動なのだから、お姉ちゃんが部屋を提供するのが筋だということになってそう決まった。まあ、順当であらうと思う。

でもそれにしても奇怪なことになったものだ。

まさかこの三人で枕を並べて眠ることになるなんて。

しかもそれほど私たちは仲良しってわけでもないのに。この世には不思議なことが起きるものだ。

私はいびきも歯ぎしりもしないと思うけど不安だ。それに絶対じゃないと思うけど、彼が眠っている私に触ってきたりなんかしてきたら、どんな事情があろうが即終了である。

それ以上にありえないことだと思うけど、お姉ちゃんが彼とイチヤイチヤし出したら、すぐに家から追い出してやる。

もちろん彼は馬鹿じゃないから、こんなことはないと絶対信じているけど。

女の子二人と同じ部屋で眠ることになった彼の心境はどんなだろうか？　ちよつと想像も出来ない。きっとこういうのは単純に嬉しいものでもないんだろうな。

多分、それなりに気を遣うだろうし、何かと誤解されやすい状況なんだから面倒だとも思う。

しかしそれなのに一応こうして付き合ってくれているんだから、まあ、私たち姉妹は彼に感謝してあげないと。

第六章 アスカの日記 6

○月×日

ジャングルで眠るような危険と隣合せの夜は、とりあえず何事も無く無事に過ぎた。

私は彼を押し入れに眠らせればと提案したんだけど、彼はさすがに不服そうだったし（俺は猫型ロボットじゃねえよだって）、押し入れには物がいっぱいだったので、仕方なく彼を扉側に追いやり、少し離れてお姉ちゃん、そして私は部屋の一番奥という並びで眠ることになった。

でもまあ、この並びは良かったんじゃないかな。お姉ちゃんが障害物になって、彼の危険度はかなり減じたし、お姉ちゃんと彼はどうか知らないけれど、私は自分の部屋のように普通に眠れたのだ。

しばらくこのような生活が続くのもかもしれないけど、心配していた程のことはなかったと思う。それにもう少し日が経って慣れてくれば、昨夜のような重苦しい空気も消え、もっと和やかになるだろうし。

昨日の夜は本当に酷かったのだ。まるで入学式の日の教室みたいで、私たちはまるで初めて顔を合わせた者同士のような緊張と堅苦しさの中に居続けた。

私はそれをちよつとでも和ませようと話しかけてみた。そういえばこの前の中間テストのとき彼と賭けをしたことを思い出して、それを言ったりしたのだ。

でもそれも逆効果だった。

彼はもちろん全部百点だったさ、と明らかに嘘だとわかる態度で言い張るので、じゃあ私が証拠を見せてよって迫ると、だったらそっちのテストの結果も教えろと言ってくるので、そんな約束はして

ないじゃないと私が怒ったら、彼が逆切れして来て、それでまあ、いつもみたいにケンカになりそうになったんだけど、そんな私の遣り取りを黙って見ていたお姉ちゃんが、ジェラシーたっぷりの眼差しでこっちを見てきたのだ。

私はヤバいって思って、すぐに話題を逸らした。でもそれで余計に空気が重くなった。

そのおかしな空気のまま、お互いおやすみと言い合うこともなく、私たちはそれぞれ眠ることに集中し始めた。歯切れの悪い眠りの始まりだったと思う。

私はどっかであのランプで遊んだ夜のようなものを期待していたのかもしれない。あの修学旅行の夜のような。

でも昨日の夜はそれとは程遠い重苦しさ、ぎこちなさ。

とはいえそんな重苦しくて、ぎこちない空気が立ち込める中、このような状況で眠れるのになって思っていたけど、気がつけば朝だった。

どうやら私はすぐに眠りに落ちて、それなりにぐっすりと眠れていたようなのだ。

二人も問題なく眠れたようだと思う。直接どうだったか尋ねたわけではないけど、もう三人で眠るのは止めようという異議が誰からも出なかったのだから、お姉ちゃんも彼もそれなりに眠れたんだろう。

まあ、だからそういうわけで、この作戦は上手くいきそうである。

もうあと一、二時間もすれば、昨日同様お姉ちゃんの部屋に眠りに行くことになる。

今日も部活で身体を動かし、かなり疲れているので、すぐに眠りに落ちることが出来るだろう。

だいたい私は特別無神経で、肝が太いからどんな場所でも寝つき

が良いわけではなくて、部活で走り回っているからよく眠れると思うのだ。

複雑で、繊細なお姉ちゃんに比べて、私はわかりやすく単純だなんて彼に思われていたら、本当に腹が立つ。

お姉ちゃんも何か運動を始めればいいじゃないだろうか？ そうしたら怖い夢に悩まされることなんてなくなるかもしれないのに。

・・・なんてまあ、そんなことで解決する問題じゃないかもしれないけれど。もっと深刻で、入り込んだ何かがあるかもしれないのだ。

実は今日、部活が始まる前の時間、私は一人、お姉ちゃんの変貌の訳を独自に探ってみた。

っていうとちよつと大袈裟かもしれないけれど、まあ、お姉ちゃんと同じクラスのバスケ部の先輩に、それとなく話を伺ったのだ。一年ぐらい前、お姉ちゃんの性格が変わり始めたんだけど、そのきっかけに何か心当たりはないかって。

先輩はそんな昔のこと、どうしていきなり質問して来るんだって驚いていたけど、私がお姉ちゃんのことを心配だからだってちよつと大袈裟に訴えると、姉思いの妹なのねって言いながら、けっこう親切に教えてくれた。

しかし答えは特に思い当たることはないとのこと。

むしろあるとき突然、お姉ちゃんが他のクラスメートを避け始め、一人で過ごすことを好むようになったらしい。

その先輩に聞けば、お姉ちゃんがクラスで孤立して、嫌われるようになったのは、お姉ちゃんのそんな振る舞いが原因のようだ。

お姉ちゃんが周りを避け始めたから、クラスメートがお姉ちゃんを嫌い出した。どうやらその順番が正しいよう。

結局、この調査ではこれ以上のことは何もわからなかったけど、

しかしこれでお姉ちゃんの変貌の原因は、学校や友達関係にはないと判断していいことになったかもしれない。

その他の何かがお姉ちゃんを変貌させたのだ。

それがわかっただけでも少しは前進したと考えるべきであろう。とにかくまた彼と一度、じっくりと相談してみたほうがいいと思う。

お姉ちゃんは一昨日の夜、どのような怖い夢を見るのか私に教えてくれた。

井戸から幽霊が出てくるという夢らしい。彼はそれを知っているのだろうか。もしかしたらその夢の内容もお姉ちゃん謎を解くヒントになるかもしれない。それを含めて彼と話し合おう。

とはいえ、なかなか二人きりになる時間がないのだ。これからすぐに彼と会うとはいえ、そこにはお姉ちゃんがいるわけだし、お姉ちゃんの前でそんな相談をするわけにいかないんだから。

それに彼と私が二人きりでまたコソコソとしているのがばれたら、お姉ちゃんはまだ勘違いして怒っちゃうかもしれない。どうしてもお姉ちゃんの目を盗んで会わなければいけない。

何やら厄介なお姉ちゃんを持ってしまったものだって、冗談抜きで思う。

嫉妬深いし、勘違いは多いし、その上、一人じゃ眠れないんだから……。

確かにお姉ちゃん表情を見る限り、それに関しては申し訳ないと思っっているようだけど、でもそれにしてもどうかと思う。

これで万一にでも、ただ彼の気を惹くための狂言か何かだとしたら私は承知しない。実は悪夢も幽霊も全部嘘。いわば仮病みたいなものだったら……。

でもそれは絶対にならないことは確かだろう。だから私も悩ましいのだけど。

第六章 アスカの日記 7

？

○月×日

また彼と一緒に学校に登校することにした。一週間ぶりくらいだろうか。お姉ちゃんと彼と一緒に寝ているのを発見して、何かと揉めて以来のことだ。それまではお姉ちゃんを尾行したりして、一緒に登校していたのだ。何だかそれが随分前のことのように思える。

だからと言って、これは別に彼と仲直りした証しなんかではない。その方法ぐらいしか長い時間、二人きりになる機会はないと思ったからだ。

今朝、お姉ちゃんに見つからないよう、予め用意しておいたメモを彼の手にそっと渡した。「一緒に学校に行こう」って書いて。

何でこんなことをコソコソしなきゃいけないのかって思ったけど仕方ない。お姉ちゃんに見つかる絶対面倒なことになるのだから。

まあ、お姉ちゃんは相変わらず、変な道を通って遠回りしているようだから、彼と一緒に登校してもお姉ちゃんに見つかることは絶対ないはずである。

テスト期間中、私と彼は帰り道で偶然会うのに、どうしてお姉ちゃんとは会わないのかって不思議に思っていたけど、理由はこれなのだ。

お姉ちゃんは絶対に普通の道を通りたがらない。

それにはおそらく何らかの理由があるんだろうけど、まだわからない。

しかしこの日の朝、お互い入手した情報を出し合って、それに関して思うところを話し合っていたんだけど、それで一つ気づいたこ

とがあった。

まあ、私が気づいたわけじゃないんだけど、彼が何かピンと来たようだったんだけど。

私が例の井戸から幽霊が出てくるっていう、お姉ちゃんの悪夢の具体的な内容を彼に教えてあげたら、彼は言ってきたのだ。

「そういえば、この辺に井戸はないのか？」

彼はシャーロック・ホームズか、ドラマの中の探偵の真似でもしているのか、額に人差し指を当てるポーズで、私にそう尋ねてきた。私はそのポーズにちよつと笑いそうになったけど、笑わないで教えてあげた。

私たちの家には井戸なんかないけれど、旧家の庭や、大きな通りの角に共用の井戸があったりするって。とはいえ今では使われていないのが多いはずだけど。

「田舎だから井戸なんか珍しくないのか」

田舎だからっていうのは余計だけど、まあ、その通りだ。

彼は井戸なんか使ったことがないどころか、見たことすらないらしい。しかしここに住む私たちにとって割合に身近なもの。

そして同時に不気味なものでもあった。その暗い水底から何かが出てくる妄想を抱いても別におかしくない。お姉ちゃんの想像力は特殊でも病んでいるわけでもない。

「俺は井戸なんて映画とか漫画とかでしか知らないな。横山光輝の三国志でさ、劉備の奥さんが怪我して、逃げるのに足手まといになるって事で、自ら古井戸に身を投げる場面があるんだけど、あれは切なかったね」

彼はそんな感じで知っている限りの井戸に関する思い出を色々と言ってきた。

それくらい都会人である自分にとって、程遠いものだと言いたか

ったのか、相変わらず彼の言葉には苛々させられた。

「しかしそれを単純に考えるとしたら、ミウは井戸の近くを通るのが恐いから、わざわざ遠回りしているってことなんじゃないのか？」

彼はまた額に指を当てるポーズをしてそう言ってきた。

「まあ、私もそう思ったんだけど、でも多分、それはないと思う。あっちの遠回りの道も井戸の前を通らないといけないはずだから」
むしろ遠回りの道のほうは、通りのすぐ傍に井戸があるはずだ。もう使われていなくて、蓋みたいなのがされているけど井戸は井戸である。

井戸が恐いのなら、絶対あっちの道は通らない気がするのだ。

「そうか、だとしたら井戸は関係ないのかもしれないな・・・。
ただそれは夢の中で変形された何かの象徴に過ぎないってことなのか」

私の言葉に彼はそう返してきた。

「何よ、象徴って？」

「えーと、何て説明すればいいのか、置き換えっていうか何て言うか、夢の中に出てきた出来事をそのままに受け取るんじゃないかって別の物に解釈して理解する・・・。まあ、夢占いみたいなものさ。お前、フロイトとかユングも読んだことないのかよ」

「ないけど、誰なの、それ？」

「だから大物夢占い師だよ」

「ふーん」

そんな話をしながら私たちはいつもよりノロノロと歩いて学校に向かっていただけ、井戸と聞いて私はちょっと思い出したことがあった。

「そういえばあの古い大きなお屋敷の庭にも、井戸があったんだ

けど」

そのときちょうど私たちの前に、あの大きな屋敷が見えてきた。そのせいか、私はそんな懐かしい記憶を鮮やかに思い出したのだ。

まあ、そこは屋敷というより、今では廃屋としか呼びようがない建物で、もちろん誰も住んでいなくて、手入れする人もなく、その屋敷を囲んでいる土塀はところどころ崩れていて、庭も荒れ放題だった。

でもそこは幼い頃の私たちの遊び場だった。小学校に通い始めたかの頃、近所の子供と一緒にそこを公園代わりにしてよく遊んでいたのだ。まだまだ元気だったお姉ちゃんも共に、井戸の周りで鬼ごっこなんかしていたものだ。

「ふーん、まあ、興味深い情報ではあるけど。でもミウは井戸そのものを恐がっているわけじゃないだろう」

彼はそんな情報、大した価値もないといった感じで言ってきた。

「そうなのかな」

「おそらく井戸なんかにこだわっていたら、逆に真実から遠ざかるかもしれない」

まあ、私だってただ偶然、そんなことがあったものだって思い出ただけで、別にこれが特別重要なことだとは考えていなかった。

だからさっさと別の話題に移ろうと、その屋敷から目を逸らしたんだけど、でも突然、興味無さそうにしていた彼がハッと顔色を変え、大きな声を上げて言ってきた。

「ちょっと待てよ、アスカ・・・」

「何よ、いきなり」

「やっぱり井戸かもしれないな。だけど全ての井戸を恐れているんじゃないくて、この屋敷の庭にある井戸だけを恐れているとしたら、ここを通りたくないっていう心理は理解出来る」

ここから学校までの道に、他に井戸は？

彼はこのアイデアが気に入ったのか、少し興奮した表情で、私に掴みかかるようにして尋ねてきた。この日、朝から弱い雨が降っていたから、私たちは傘を差していたんだけど、そのとき彼の傘が私の傘にぶつかって、雨の滴が弾けた。

「ちよっと冷たいわね、濡れたじゃない」

その滴が私の顔を濡らしたのだ。

「ごめん、ごめん」

彼はハンカチを取り出し、私の顔を乱暴に拭いてきた。そんな滴くらいでガタガタ言うな。さっさと俺の質問に答えろって態度で。

「ないわ。家から学校までの道には、井戸は確かこの屋敷の庭にしか」

私は彼の手からハンカチを取り上げ、自分で顔を拭きながら、せっかちな彼の質問に答えてあげた。

「やっぱりそうか！」

「でもさっき言ってたこと、何だっけ？ 井戸は象徴とか置き換えとか言ってたじゃない。あれはどうなったのよ」

「いや、そんなのは忘れてくれ。とりあえずミウの悪夢を真っ正直に受け取るんだ。ミウがこの庭にある井戸の存在を知っていて、ここを通るのを避けているとしたら、この井戸がキーになることは間違いないだろ」

「そうかなあ・・・」

どうも彼の考えがコロコロ変わるから、いくら確信がありそうな表情でそう言われても少し納得出来なかった。

確かにこのような気味悪い廃屋の井戸からなら、幽霊が出てきても違和感はないかもしれないけど、だけどそれにしても。

「もしかしたらこの井戸か、その近くで、ミウを脅かすような出来事があったのかもしれない」

「うーん」

私たちは立ち止まり、言葉を交わす代わりに、彼のその意見を検討するよう、壊れた塀の間から、その屋敷の荒れた庭を覗きこんだ。庭には雑草が生い茂っているのが見えるだけで、肝心の井戸はここから見えなかった。井戸は確か、門の近くにあったはずである。庭の奥には朽ちかけた屋敷が見えた。

昔、この辺りで一番の大金持ちだった一族が住んでいたお屋敷だ。私が生まれた頃には既に没落していたけれど。

「なあ、明日はミウも一緒に、三人でここを通って学校に行こうぜ。それで彼女の様子を窺うんだ」

彼は少し迷うように言葉を選びながら、そう言ってきた。

「本気で言ってるの？」

学校が遅れることも気にしないで毎日この道を避けているお姉ちゃんか、私たちが一緒に行こうと誘ったくらいで承諾するだろうか。私はそう思って彼に異議を申し立てた。

「でももうまどろっこしいことは面倒だし、これ以上、俺たちだけでああでもない、こうでもない話し合っても限界があるさ。ミウが俺たちの誘いを拒否したら、そのときその訳を追及するんだ。それでさ、それとなくあの屋敷とか井戸の話しを持ち出して、ミウがどんな反応をするか見極めるんだ」

「わ、わかった」

こうして二人で話し合っている間にも限界があるっていう部分に関しては、彼の意見に賛同せざるを得ないと思った。だから私は彼の言葉に頷いた。

でもこうして彼の言葉を書き出すと、何だか二人してお姉ちゃんを取り調べるみたいで感じが悪いけれど。

だけど彼も別に拷問係みたいな表情で言ったわけじゃない。彼だってお姉ちゃんのことを心配して、そう言ったんだ。そういうわけ

で私もその意見に賛成した。

まあ、とにかく今朝の話し合いで、私たちはそういう結論に辿り着いたのだ。

雨のせいでいつものように自転車で登校出来なかったし、私たちは話し合いながらゆっくり歩いていた上に、立ち止まって屋敷の中を覗き込んだりもしていたから、朝の朝礼どころか、一時間目の授業開始にも間に合わなかった。

でもその苦労の甲斐あって、けっこうな収穫はあったと思う。

もしかしたら彼とこうやって調査をやり始めてから、初めての前進だったかもしれない。お姉ちゃんがこの道を避けているのは、この屋敷の井戸が理由かもしれないって考えは。

まあ、もちろん私たちは全外的外れの推測をしている可能性もあるんだけど。

でもそれもこれも今夜のお姉ちゃんのリアクション次第であろう。お姉ちゃんが私たちの言葉にどんな反応を示すかでわかるはずだ。

？

第六章 アスカの日記 8

○月×日

今朝も私と彼の二人で登校した。結局、お姉ちゃんに誘いを拒否されたからだ。

私たちが一緒に学校に行かないかと切り出したときのお姉ちゃんの反応は早かった。もしかしたらいつか、そのようなことを言われるんじゃないかって空気を感じていたのかもしれない。

お姉ちゃんは私たちの申し出に驚くこともなく即座に拒否したのだ。絶対に無理だという感じで、お姉ちゃんは断固として首を振った。

お姉ちゃんの予想以上の頑なな反応にちょっと気押されながらも、でも私たちは退かなかった。じゃあせめて、これを機会にどうして遠回りして学校に行っているのかその理由を教えてよって迫った。もしかしたらそれは、一人で眠れなくなったことと関係があるんじゃないのって。

でもお姉ちゃんは私たちの言葉に耳を塞ぐように、激しく首を振るだけだった。

お姉ちゃんはこの問題に関して、私たちに言い訳すらする気がないようだった。ただ口にするのは、どうしてあなたたちにそんなことと言わなきゃいけないのって言う拒絶の言葉だけ。

「もう私に関わるのはやめて」と言えたならお姉ちゃんは言っていた気がする。しかしこうやって毎晩、同じ部屋に寝て貰っている手前、さすがにそんなことは言えなかったんだろう。でも態度と口調はそう言っているも同然だったけど。

お姉ちゃんのあまりに断固とした拒絶に、私たちもこれ以上説得

しようもなかった。それなら仕方がないって感じで、私たちも諦めかけた。

しかし更にお姉ちゃんが驚くべき反応を示したのはその後だった。彼が最後に一つだけ質問があるんだけど、あの大きな廃屋の庭にある井戸のことを持ち出したのだ。

お姉ちゃんは彼が何の話をしようとしているのかわからなかったのか、しばらく呆けたようにポカンとしていたけど、しかし徐々に彼の言葉が意味のある質問として明確になっていったんだろう、突然さっと顔色を変え、今にも卒倒するんじゃないかってくらい狼狽え出した。

「どうしてこんなこと、私に聞くの？」って言いながら。

お姉ちゃんのあまりに激しい取り乱しように、私たちのほうが取り乱しそうになった。何とかそれをこらえて、私はすぐに言い訳するように言った。

お姉ちゃんが見る悪夢に決まって井戸が出てくるって言っていたから、ただ単に昔よくあの庭で遊んでいたことを思い出し、彼に話したんだって。

私がそう弁解すると、ようやくお姉ちゃんは落ち着いたようだったけど、でもお姉ちゃんのあまりに激しい拒絶反応を前に、もはやこのことを軽々しく問い詰めるのは不可能だって気分にならずには居られなかった。

確かにお姉ちゃんの反応は異常で、あの井戸に何かあるのかもしれないって疑いは更に強くなったことは確かだった。でもお姉ちゃんがこんなふうに取り乱すようなことをこれ以上追及するのは気が引ける。

それから誰も喋らなかった。私は緊張した空気を和らげる術も見つけられなくて、各々が勝手に眠る準備を始めるのを黙って見ているしかなかった。

その夜の私たちが、いつもより寝つきが悪かったことは書くまでもない。

彼は何度も寝返りを打っていたし、お姉ちゃんは逆に自分の身体を抱きしめるように丸まったまま少しも身動きしなかったし、そして私もそんな二人の気配を朝まで感じ続けた。

その翌日、私と彼は寝不足の顔を見合わせて、また一緒に学校に向かった。昨日のお姉ちゃんのことについて話し合わなかったけど、思っていることはそれほど違いなかったはずだ。

もうこれ以上、立ち入るのは止めよう。ただお姉ちゃんをそっと見守ろう、そんな感じだと思う。

私たちはあの井戸のある屋敷を素通りして、ただただ学校への途次を急いだ。停滞している梅雨前線のせいで今日もまた雨で、自転車で登校出来なかったから、ちよつと油断すれば遅れてしまうのだ。だから私たちは早歩きで歩いた。まるでどちらが先に学校に到着するのか競うように。私が彼の先を行けば彼はスピードを速め、彼が私を抜いたら、私はよりスピードを上げて彼を抜き返したり。

そんなことを繰り返しているうちに、彼は呆れたように言ってきた。「お前は本当に負けず嫌いだな」って。

それが今朝、交わした唯一の会話だ。

私は言葉にしなかったけど、心の中でだけ言い返した。私はあんなに負けるのだけがなぜか嫌なだけで、別に負けず嫌いじゃないって。

ちなみに遅刻は免れた。けっこう余裕で学校に到着することが出来た。

うんざりすることに明日も雨らしい。

いや、明日はただの雨どころ大雨、未明には嵐がやってくるこのことだ。この日記を書いている現在、夜の十一時半、その天気予報通り、既に雨が降り始めている。

まるで私たちの不吉な先行きを暗示するような嵐になりそうだ。

第六章 アスカの日記 9

○月×日

この世には悲しみが絶えなくて、ニュースからは毎日、殺人や暴力事件などが報道されている。今はもう戦争一色で、そんなニュースは少なくなかったけれど、ちよつと前までは嫌という程そのようなニュースをテレビで見たものだ。

でもそんな事件が私の身近でも起こっていたなんて。

あまりの衝撃で私は言葉も出なかったし、今もこうやって一応、冷静に日記が書いているのが不思議なくらいである。

とはいえ学校でも何事もなかったかのように授業や部活もこなした。夕食だってお姉ちゃんや彼と顔を会わせながら普通に食べられた。

一見して私は、いつもの私と変わらなかったはずだ。

でもそれはまだ私が、その話しを心の底から信じていなかったからだだろう。まだどこかで嘘に決まっていると思ひ込もうとしているからだ。

それに偶然、お姉ちゃんと彼の話しを立ち聞きしてしまっただけというのも、まだ私の現実感を希薄にしている原因かもしれない。もしかしたら私は聞き間違えたという可能性もあるんだから。

だからってはっきりしたことを確かめることが恐くて、今朝も彼と一緒に登校したのだけど、その真偽を問い質せなかった。

とにかく急展開で、もう何もかも暗礁に乗り上げたのかと思ったら、一転してこういうことになったわけで、まだ私は混乱の中から一歩も外に出られていないのだ。

まあ、勿体ぶっていないで、さっさと肝心なことを書こう。

でもこれはちょっと日記にすら書くのがはばれる内容だ。しか
しだからって書かないでこの秘密を自分の胸に仕舞っておくのも不
可能だから、思い切って書くしかないのだけれど。

もしかしたらあまりに激しい嵐が、お姉ちゃんをああいいう心境に
したのかもしれない。

昨夜、天気予報の通り、夜が更けるに連れて空模様は悪化した。
雨風は強く、しかも湿度が異様に高くてジメジメしてかなり寝苦し
い夜だった。そんなに広くもない部屋に三人いるのも、余計に部屋
の湿度を高めたのかもしれない。

一昨日、あんな遣り取りがあつたのに、私たちはまた三人でお姉
ちゃんの部屋に眠った。むしろ何か変えるほうが難しい空気で、た
だ惰性に流されてお姉ちゃんの部屋に集まったんだと思う。

お姉ちゃんはずっと顔を伏せた感じでいたから、その表情をよく
見たわけでもないんだけど、かなりナーバスだったのは間違いない
と思う。

でもそのときのお姉ちゃんが全てを告白する覚悟をしていたとも
思えない。そういう覚悟をしていたからナーバスだったのではなく
て、ただその前の夜の気まずさが尾を引いていたからナーバスだっ
たのだろう。

私たちは別に会話を交わすでもなく、お互いのペースでそれぞれ
勝手に眠った。それはこれまで通りだ。何ら特別でもない。とにか
く特別なものなんて最初は少しもなかったのだ。

その夜、蒸し暑くて寝苦しかったわりには、私の寝つきは相変わ
らず良かったかもしれない。その前が寝不足だったせいもあるだろ
う、屋根に激しく響く雨の音と、ゴーゴー唸る風の音を聞きながら、
すんなりと眠りに落ちていた。

だけど真夜中、どこかに落ちたカミナリの音に驚いたのか、私はハッとして目を覚ました。

それで部屋の中が不気味に静まり返っていることに気づいた。

もちろん窓の外は風と雨の音で騒々しいから、本当に静まり返っていたわけではないんだけど、でもいつも感じる気配がないことはすぐに気づいた。

見るとお姉ちゃんも彼も、二人ともいなかった。

私は即座に立ち上がり、二人を探しに部屋を出た。

なぜか取り残されたような気がしたし、何だか嫉妬のようなものを感じたんだ。いや、もちろん前日のシリアスな遣り取りがあっただけに、何かお姉ちゃんの身に悪いことが起きたんじゃないかって心配もした。

とにかく私は足音を忍ばせながら部屋を出て、彼の部屋をこっそり覗き、お姉ちゃんの部屋の扉も開けた。しかし二人ともどこにもいなかった。ますます私は嫌な胸騒ぎを覚えながら、一階に下りてみた。

するとすぐにリビングルームのほうから人の声がするの気づいた。私は廊下に立ち止まり、耳を澄ました。リビングルームからテレビの音と、その音の下に隠れるように、彼とお姉ちゃんの声が聞こえてきた。

二人は押し殺した声で、何か言い争いでもしているようであった。でもそれを聞いて私はホッと安心した。とにかく無事だとわかったからだ。

その安心感に背中を押されるようにして、私は用心深く足音を忍ばせリビングルームに近づいた。

今、思うとここで引き返したほうが良かったかもしれない。むしろ二人にばれるのも恐れずに、よくあそこまで近づけたものだと思

う。でも私は二人がこんな夜中に何を話しているのか気になって仕方なかったのだ。

私は足音を忍ばせ、リビングルームに通じる扉に辿り着き、屈みながらそっと覗きこんだ。そして思わず息を飲んでしまった。

お姉ちゃんが倒れ込むように、彼に抱きついていたから。

それを見てやっぱりそうなんだって思った。二人は私の目を盗み、こういうことをやっているんだって。

はつきり言ってそのとき私は嫉妬を覚えた。何なら二人の邪魔をしてやろうかって立ち上がりかけた。

しかしお姉ちゃんの声に涙が混ざっているのに気づいて私は固まった。しかもお姉ちゃんはその涙に滲んだ声でこう言ったのだ。

「私、人を殺したの」って。

最初、それはテレビの中から聞こえてきた声なのかと思った。だってあまりに非現実的なセリフなんだから。どう考えてもあのお姉ちゃんに似つかわしくない言葉。

だけどテレビから聞こえてくる声はフランス語か何かの外国語だったから、その涙混じりの声は、お姉ちゃんの声に決まっていた。

私はその言葉を聞いてすぐ、その場から逃げ去るように立ち去ってしまった。

今から思えば逃げる必要なんてなかったと思う。すぐにということなのってお姉ちゃんに尋ねれば良かったんだ。そうすればこんなモヤモヤした気分を感じないで済んでいたかもしれない。

でも内緒話を盗み聞きしてしまったことは確かだし、お姉ちゃんはその告白の相手に、私ではなくて彼だけを選んだってことなんだから、やっぱりあるとき出ていくのは無理だったとも思う。

とにかく震える足を何とか抑え、そろりそろりと足音を忍ばせて

部屋に帰った。そして急いで布団にくるまり、スヤスヤ眠っている振りをした。

けれどもちろん、それから一睡も出来なかった。お姉ちゃんと彼が部屋に帰ってきたときも起きていた。

起床時間になって、否が応でも起きないといけなくなったとき、少しも寝ていないのが二人にばれたらどうしようかと内心焦った。

でもそれは二人も同じだったようで、むしろお姉ちゃんと彼のほうが必死に私の視界から逃げようとしていたから、逆に私の不自然さを二人に悟られずに済んだと思う。

でもそんな二人の様子を見て、昨夜の出来事が夢でなかったことがわかった。お姉ちゃんは泣きながら、本当に衝撃的な告白をしたんだって。

とはいえ今日の日記の冒頭で書いたように、まだ私はそのお姉ちゃんの言葉を全面的に信じているわけじゃない。だって私は話しの一部始終を聞いたわけじゃないんだから。何もかも私の早とちりだって可能性もなくはないのだ。

もしかしたら実は全部嘘だって、お姉ちゃんはそのあと言っていたかもしれないんだ。いや、下手したらお姉ちゃんはただ彼の同情を買おうとしていただけだっていう可能性もある。

むしろそっちのほうが可能性は高いに違いないって私は思う。だってそんな話し、どう考えても現実感を欠くし、そんな事件が現実にあったのなら、新聞とかニュースで報道があったはずじゃないか。小さな街だ。現実にもそのような事件が起きていたとしたら私が知らないはずなのに、それなのに心当たりの事件が無いんだから、お姉ちゃんの言葉は嘘だったとは思えない。

まあ、とにかく彼に聞いて全てを確かめるのが一番だと思う。彼に盗み聞きしたのを打ち明け、お姉ちゃんとどんな話しをしていたのか聞くんだ。

このままだと私の頭は混乱したままで、どうにかなってしまいうなんだ。何が真実なのかはつきりさせないと落ち着くことも出来ない。

でも全部本当だって言われたら、そのとき私はいったいどうすればいいのだろうか？

第七章 ミキオの手紙 1

なあ、エビ夫、いきなりこんな質問から入るのもなんだけど、もしこの戦争がいつまで経っても終わらず、やがて俺たちも兵士として戦場に赴くことになって、そして目の前に銃を持った敵が現れたとき、果たしてお前はその目の前の敵を躊躇なく撃ち殺せるか？

いや、俺は躊躇なく撃ち殺してみせるよ。

殺されるくらいなら殺すに決まっている。それが戦場のルールだし、たとえば俺の銃が敵の命を奪ったのだとしても、それは国からの命令に従ったに過ぎないだけだから、その敵を殺したのは俺じゃなくて国のはずだ。そんなのは殺人なんかじゃない。

それにこれまで俺たちの親族や友人が何人も殺されているんだ。敵に恨みこそあれ、情けを抱く理由なんてない……。

これまでは何の迷いもなくそう思っていた。何なら一刻も早く戦場に行って、敵を殺しまくりたいなんて思うこともあった。

だけど今はその考えも激しく揺らいでいる。

ミウの苦しみを傍で見ているからだ。

この前の手紙でもうミウが何に苦しんでいるのか、俺たちには永遠にわかりそうにないって書いたけど事態は一変した。突然、ミウが胸の内を全て話してくれたんだ。

そこに至るまでの経緯はあとでゆっくり書くけど、とにかくミウが何に苦しんでいたのかから先に書く。

ミウは今から一年ぐらい前の、ある雨の日、人を殺したんだって。あまりに唐突過ぎて耳を疑うかもしれないけど、冗談じゃないんだ。最後まで読んでくれ。

ミウたちの家から学校に行くまでの途中に、もう誰も住んでいない大きな屋敷があつて、そこは昔から子供たちの遊び場みたいになつていて、ミウにとつてもここは馴染みの場所だつたみたいだ。

ある日の学校からの帰り道、いきなり空が曇り、カミナリが鳴つたかと思うと大雨が降つて来たらしい。傘を持っていなかったミウは、しばらく雨宿りをしようとその馴染みの屋敷の庭に逃げ込んだ。屋敷の中でも雨宿り出来るようだったけど、そのときは母屋の軒下で雨が止むのを待っていた。

前にもこうやって雨宿りしたことがあつたみたいだ。だからミウは落ち着き払い、真夏の気まぐれな雷雨をそうやってやり過ごそうとした。

だけどこのとき、ミウには不運だつたことに、そこに先客がいたらしい。

この屋敷に住み着いた浮浪者なのか、たまたま雨宿りしていた変質者なのか、ミウは中年の男だったということくらいしか特徴を覚えていないみたいだけど、とにかくそんな人間とミウは遭遇してしまった。

そいつはミウに何か声を掛けながら近づいてきた。ミウはもちろん警戒して、その男から逃げようとした。でも上手く追い詰められなかった。

その庭に古井戸があるんだ。もう枯れているみたいだけど大きな井戸だ。ミウは逃げ場を無くし、その井戸を背後にして、そこから身動き出来なくなつたらしい。

それでこの男は飛び掛かるように、ミウに襲いかかってきた。そこから先は何がなんだかわからなくなつたつてミウは言つていた。とにかく必死で抵抗して、その男を振り払おうとして、気がつ

けばその男が悲鳴を上げて井戸の底に転げ落ちていったって。

あまりに訳のわからない出来事で、ミウは自分の身に何が起きたのか理解出来なかったらしい。家に帰ってから、それから何日経っても、まるで現実のこととして受け入れられなかったみたいだ。

例えばその男は井戸に落ちたんじゃなくて、神がミウを助けるために天から手を伸ばし、その男をつまんでどこかミウの視界の外に投げ捨てたとか、あるいはそもそもその男なんて実在していなくて、ただ自分は幻と格闘していただけじゃないかとか、とにかく夢の中で起きた出来事のような感覚しか持てなかった。

いや、たとえばそれが夢じゃなくて、本当にその男が井戸に落ちて死んだのだとしても、こんなことで罪の意識を持つのは馬鹿らしいとミウは思っていたようだ。自分は何も悪いことしてないし、勝手に男が井戸に転がり落ちていっただけなんだから。

そうやってミウはこの出来事をさっさと忘れようとした。

だけどあるとき、そいつの幽霊を見たらしい。その男が恨めしそうな顔をして、授業中の教室に現れたんだって。

もちろんそんなのは幻覚だろう。幽霊なんかいやしない。ミウの罪の意識が見せた幻だ。

しかしそれからミウの地獄が始まった。

やがてその幽霊は夢の中にまで現れるようになり、自分は人を殺したんだって罪の意識に囚われるようになった。

ミウはその苦しみのあまり警察に自首しようとしたこともあったらしい。でも怖くて、どうしても無理だったって。

ミウは泣きながら言ってたよ。「どうして何も悪いことしてないのに、私が警察に行かないといけないの」って。

その通りだって俺も思う。ミウがその事件に対して罪の意識を抱くのは馬鹿らしいと思うし、そんなの大間違いだよ。

だけどそれなのにミウは罪の意識に苦しんでいる。そしてその罪

悪感が、ミウに幽霊の幻覚を見せたり、悪夢を見せたりしているんだ。

そういうことだったんだよ。ミウを苦しめていたものの正体は。俺も想像していなかったことで、まだ驚いている。でも同時に納得も出来た。ミウはこの告白をしてから、俺に謝るように言ってきた。

「私のことを心配してくれているのはわかったけれど、私が悪いことをしたんだから、本当のことを言えるわけがなかった」って。

ミウは何も俺のことを信じていないわけじゃなかったんだ。それもこれも罪の意識を感じていて、人に打ち明けるようなことじゃないとミウは思い込んでいたんだ。

しかし本当のことを言ってもらった今、問題はこれから俺に何が出来るかってことに問題は移ったわけだ。

悩みを打ち明けたら俺が解決してやるって意気込んでいたんだから、今更どうにも出来ないなんて言えるわけがない。

とにかくどうやってミウの罪の意識を和らげるかだと思う。死んでも当然のような犯罪者が死んだだけなんだから、罪悪感なんて抱かなくていいんじゃないかって説得するしかないと思うんだけど、でもその程度でミウの心が軽くなると思えない。

ミウだってそれぐらいのことわかっているだろうけど、それでも人の命の重さの前で慄然としておののいているんだから。

そんなミウを見ると、戦争ってものがどれだけ異常なものなのか実感出来る気がする。

ミウの場合、どう考えてもそれは正当防衛で、悪いのは全て男のほうだし、そいつが死んだのだって自業自得だ。

それにもかかわらずミウはこんなにも気に病んで苦しんでいるんだ。

一方では戦争という名目のもと、恨みのない人間同士が殺し合っている。

異常だと思わないか？ しかも武器を持っていない市民に向かって爆弾を落したりさ……。

いや、もしかしたらそれとこれとは全然違う問題なのかもしれないけど、でもやっぱり人の生き死に関わっているのだから同じだろう？

やっぱり戦争は異常だよな。お前には今更、何を言っているんだよって言われそうだけど、俺は改めてそう思ったよ……。

とにかく俺はミウを助けたいと考えている。そういうわけでお前の知恵をまたしても借りたいんだけど……。

本当に俺はお前に助けばかりを頼んでいるよな。でももうこれが最後だ。

って言ってもこの問題はこれまでと違って、いくらお前だからって簡単にどうこう出来るなんて思っていないけども。でもお願いだ。検討だけはしてくれ。

あと出来ればこの手紙を読み終えたら、燃やして欲しい。

内容が内容だけに万が一ってこともあるし。何から何まで手間をかけて申し訳ないけど、お願いだ。

もちろんお前を信用してないからじゃないぜ。お前を信用してなかったら、こんなトップシークレットを打ち明けるわけがないんだ。ただミウに対するケジメとしてさ。ミウはこの事実をこの世で俺しか知らないと思っているようだから。

だからこの手紙を燃やしてくれ。この事実をお前の脳内だけに収めておいてくれ。

○月×日 ミキオより

第七章 ミキオの手紙 2

返事ありがとう。手紙もすぐに焼いてもらってすまなかったね。お前も衝撃を受けたようだな。でも間違いのないことだよ。この事件は本当に起きたんだ。

確かにお前が書いた通り、俺に打ち明けてミウの心の重みも幾らか軽減されていると思う。ずっと一人で悩んでいるよりも、その心の負担を少しでも共有出来る相手が出来て、絶対にミウも心強いはずだ。

それにミウはこの事件を打ち明けたら、俺の態度が変わるかもしれないって不安を抱いてたようだけど、そんなことなくて良かったって言ってたし。

ミウの精神状態は上向きだよ。でもそれでも、まだまだ悪夢が止むことはないようだから大した前進ってわけではないけど。

やっぱりこういうことは時間しか解決しないものなんだろうか。と言っても、もうこの事件から一年以上が経っているというのに。

いったいどれだけ待てばこの傷が癒えるのか暗然とせざるを得ない。お前が言うように、気長に見守るしかないんだろうけど。

しかし俺もいつまでもここに住んでいられないしな・・・。
少なくとも俺が去るまでには何らかの解決を見たいものだ。

えーと、本題に入る前に先にお前の質問に答えておくよ。本題と言っても別にたいした報告もないんだけどさ。

不幸中の幸いで誰もこの事件の目撃者はいないようだ。お前が危惧しているような、誰かに目撃されていて、そいつがミウを脅迫しているなんてこともない。

あと警察がこの事件を把握している様子もないみたいだ。死んだ男はまともに住所も職もなかったんじゃないかな。行方不明者としてその男の身内が捜索届けを出しているって気配もないと思う。一応、図書館に行つてその頃の新聞を読み漁ってみるけど、多分、その不安は杞憂に終わるだろう。

ミウはある部分ではラッキーだったんだ。もちろん本当にラッキーだったら、こんな事件に巻き込まれないはずなんだけどさ。でも最悪のケースはミウがその男に殺され、逆にその井戸に落とされていたつていうパターンだろ。それを考えたらミウは自分の運の良さを喜ばないといけないはずなんだけども。

さて本題。

前の手紙ですっかり書き忘れていたんだけど、ミウがどうしてもんな告白を突然したのか、それに至る経緯を書いておく。

最大の原因は多分、嵐だったと思う。

最初、ミウが何に苦しんでいるのかを知ったのも、あの嵐の夜だったし、それにそもそもミウがこういうことになった原因が、嵐のような夕立が降ってきて、雨宿りしたのが原因なんだから、ミウは嵐の日には特にナーバスになるに違いない。

それでナーバスになって、その夜、また眠れないようだった。

いや、それだけじゃなくて、その前日、更にミウをナーバスにさせるような出来事もあった。それは少し前の手紙で書いたはずだ。学校へ遠回りしているのはあの井戸が関係しているんじゃないかってミウに尋ねたら、彼女がかなり狼狽したつていうあのことさ。

そういう色んなことが重なったんだろうか、とにかく真夜中、ミウは俺を揺すつて起こしてきたんだ。

そんなことは初めてでちょっと驚いたけど、でも予想も出来たことだった。その前の嵐の夜もミウは眠れず、それで二人して今でテ

レビなんか見ながら時間を潰したんだから、どっか心の端のほうでそんな事態を予測してたんだ。

それでまたその夜も、居間でテレビを見ながら、嵐が止むのを待つことにした。アスカはぐっすりと眠っているようだったけど、起こさないように静かに起き上がって。

下の部屋でしばらく二人でテレビを見ていた。古い映画がやってたな。多分、フランス映画だと思う。途中から見ただけだけど、こっう面白かったよ。

最初はぼーっと見ていただけなんだけど、いつの間にかその映画にのめり込んでいた。初めから見えてないからよくわからないんだけど、主人公の青年が二人の姉妹と大きな田舎の屋敷で暮らしているんだよ。

今の俺と同じような状況だろ？　それで思わずその映画に見入ってしまった。

まあ、もちろん映画の主人公と俺の生活とはかなり違うけどさ。映画のほうは恋愛感情が絡んできて、その三人の仲が徐々にややこしくなってくるような展開。まさにフランス映画って感じかな。まあ、それでも俺はそれを興味深く見ていた。

だから隣でミウがしくしく泣き出したときは正直言ってイラついた。せっかく面白い映画を見ているのに邪魔するなって感じでさ。だけどミウがまさか、そのような覚悟を決めているなんて夢にも思っていなかったから。

もちろん隣で人が泣いているのに無視するわけにもいかないから、俺は「どうしたんだよ？」って声を掛けた。するとミウは何の前置きもなく単刀直入に言ってきたんだ。

「私、人を殺したのって」

そんなことを言われても俄かに信じられなかったのは言うまでもない。ミウもいつの間にかこの映画に熱中していて、一瞬、それに

関することを言ったのかと思ったくらいさ。

でもそれにしておかしい。ミウは泣いているし、それにちよつとその言葉の意味を考えてみれば、ハツと納得出来てしまった。だからこうしてミウは幽霊に怯えているのかもしれないって。

それにずっと前の手紙でお前と相談しただろ。ミウが吹き荒れる嵐を見ていったことを。「まるで神様が怒っているみたい」って言うってたんだ。お前はそれを分析して、ミウは深刻な罪悪感を抱いているんじゃないかって予想していた。俺はそれを思い出した。そしてピンと来たんだ。全て符合するんじゃないかって。

聞いてすぐは意味がわからなかったけど、けっこうすんなりこの衝撃的な事実を俺は受け入れられたんだよ。

しかしこの事実は受け入れられたんだけど、ミウに掛ける言葉が見つからなかった。だから俺は「そんなこと気にするな」って意思を示すためにも、ミウを抱きしめるしかなかった。

その行動は今でもどうかと思っているんだけどさ……。

しかもミウは俺を試すかのように、何度も「私は人を殺したの」って言うんだ。こんなことをしたのに許してくれるって俺に尋ねる感じで。

だからそう言われる度、より強く抱きしめるしかなくて、何だかドラマのクライマックスシーンみたいな臭いことをしてしまった。俺らしくないよ。でも事態が深刻なだけに仕方なかったとも思う。

実はこの事実を、俺とお前以外にもう一人知っている奴がいる。妹のアスカだよ。あいつはこの夜の俺とミウの密談を目撃していたらしいんだ。

ほんの数日前まで何食わぬ顔をしてたんだけど（前の手紙を書いた頃は、そんな事実を俺は知らなかった）、突然、打ち明けてきた

んだ。あの夜の話を聞いてたんだけど、あれはどういうことなのかって。

どうやら俺たちが抱き合っているのも見られたみたいだし、それにこれまで一緒にこのことを相談してたんだから、アスカに隠すのはどうかと思って、あいつに全部話した。

アスカも衝撃を受けてた。自分の姉なのに、今まで何も知らなかったって。まあ、ミウが必死に隠していたんだから仕方ないじゃないかって慰めておいたけど、でもアスカは自分にじゃなくて、まず姉が俺に打ち明けたことがショックだったようだ。

これまであまり仲が良い姉妹じゃなかったことを悔やんでいる。もっと仲が良ければ、ずっと前にミウの助けになれたかもしれないって。

しかしもはやこんなことで悔やんでも仕方ないんだ。この事実が明らかになかったからには、これからどうやってミウの力になるか考えろよって、俺に似合わない説教をしてしまった。

アスカはそれで納得していたけど、でも俺自身、こんな偉そうなことを言ったわりには、どうやってミウの力になればいいのか全然わからないんだけど。

何か良い方法はないものかな、エビ夫・・・。

とにかくこの事実を知っているのは本人であるミウと、妹のアスカと、俺とお前しかないんだ。

彼女たちの母親も知らない。すなわち頼りになるのはお前しかないってことさ。だからこの手紙も地球上から燃やして消去して欲しいのと、あと、これからも相談に乗って欲しい。

頼む、早い、返事を待っているからな。って言ってもお前の返事が遅過ぎたことなんてこれまで一度もないから、俺は全然心配してないんだけど。

○月×日 ミキオより

第七章 ミキオの手紙 3

ミウが警察に出頭したいって言い出した。

警察に何もかも打ち明けて、きちんと刑罰を受ければ、きっと今より少しは心も軽くなるだろうし、それにこれ以上、俺たちに迷惑を掛けたくないからだってさ。

前の手紙で、ちょうどお前は書いてくれていたけど、そもそもこの事件は正当防衛だし、警察が把握していない事件で自首をすれば、刑が大幅に軽減されるっていう仕組みがあるらしいって。

別にそのことをミウに教えたわけじゃなかったんだけど、ミウも自首を口にし始めたんだ。どうやらミウはマジのようだ。

でも俺はそれに絶対反対だ。

警察に名乗り出たところで本当にミウの心が軽くなるかわからないし、罰ならこれまで苦しんだことでもう充分受けたと思う。もうミウはさっさと忘れることだけに集中すればいいんだよ。

それに警察に知られたら、このクソ狭い田舎のことだ、どうなるかわかったものじゃない。

周りの目は変わるだろうし、おぼさんだって働きにくくなるかもしれない。それにたとえ罪に問われない可能性があったとしても、これまで通りに生きていけるか保証もないんだ。

だいたいミウは何も悪いことをしてないんだぜ。偶然、悪人に遭遇して自分の身を守るために対抗したただけだ。それなのに運が悪かったとか、仕方がないからってことで、警察とか裁判とかそんな面倒臭いものに関わり合いになるなんて憐れ過ぎるじゃないか。

だから今回ばかりはお前の意見に断固反対だ。もう自首ぐらいし

か解決手段がないなんて、他人事だと思って安易に書いてきてんじやねえよって、悪いけど本気で思ってしまったよ。

手紙だけじゃ限界があるんだよな。お前もこっちに来て、ミウの苦しみを間近で見たら、そんなこと書けるはずがないんだ。ミウが後ろ指差されるような事態は絶対に避けたいと思うに決まっている。

・・・しかし俺がどんなに反対しても、当のミウは決心を固めつつあるのかもしれないんだけど。

ミウは俺に打ち明けることが出来たくらいなんだから、警察に自首するのなんてどうってことないって、ちょっと今まで見たことがない、確かな意志のこもった眼差しで言ってきた。

これまでミウは警察が恐くて仕方なかったそうなんだけど、俺に話したことで今までなかった勇気が湧いてきたって言うんだ。

けっこうホロリとさせられる言葉だろ。昨日なんて三人で一緒に学校に行ったんだぜ。すなわちあの井戸のある屋敷の前を、ミウは通れるようになったんだ。

かなり無理してって感じだったけど。その屋敷の前でミウは、真冬の寒さを感じるように震えていたけど、でもその前を通った。

ミウは自首することに反対している俺を納得させるために、そんな無茶な行動を取ったみたいだ。もう何も心配はいらないってことを説明するかのよう。

それを見て、妹のアスカは考えを変えつつある。

あいつも最初、何も悪いことをしていないのに警察に行く必要なんじゃないって反対してたけど、少しずつミウの考えに賛意を示すようになってきた。これを機に自分も、学校とかで色々と言われるようになるかもしれないけど、そんなこと気にしないでいいよってミウに言い出したんだ。

もしかしたら事態はこのような形で決着が着きかけているのかもしれない。

俺が反対しているうちは決断しないってミウは言ってたけど、俺も実際追い込まれつつあるんだ。しかもタイミング良く、お前まで手紙で自首のことを書いてきたし・・・。

もうどうすればいいのか、俺にはわからないよ。

タイムマシンでもあれば、俺がミウに警告して何もかもなかったことにしてやるんだけど。まあ、でもそんなものがあるわけない。地球を何度も壊すくらいの兵器はあっても、そういう便利なものは作れないんだから、科学者は使えない奴らばかりだ。

だけどもうにかならないものだろうか、エビ夫。

さっきはちよっときついことを書いていしまつて済まなかったと思うけど、でも頼りはお前だけなんだ。お前にも自首なんか最悪の解決法だって言って欲しい。だったら俺はその言葉を頼りに、もっと違う方法を考え続けるから。

ミウが自首しても、俺自身はアスカやおばさんみたいに何の痛みも被らない。所詮、俺は居候、旅人みたいなものだから。だから俺は自分の身が可愛くてこんなことを言っているじゃないことはわかってくれるだろ。

ただこんな形で、こんな狂った事件の幕引きをしたくないんだ。

しかも戦争なんかして、俺とお前を引き離し、今現在も俺たちを苦しめている国なんかには、ミウの善悪を判断された上、罰されたくない。

ただ、それだけなんだよ。

だから何か名案はないかな・・・。

○月×日 ミキオより

第七章 ミキオの手紙 4

さすがだ、エビ夫！

やっぱりお前は天才かもしれない。本当に頼りになる親友だよ。ミウも確かにその男の死を確認したわけじゃないはずだよ。ってことはお前の言う通り、別にその男が本当に死んだのかわかんなくてわからないはずなんだ。

ミウが見た幽霊も悪夢も、全部ミウの気のせいに決まっている。彼女の罪悪感が見せた幻。本当にそいつが化けて、出たわけじゃもちろんない。

ってことは、その男が実は死んでいなかったっていう状況にも出来る。

本当にお前は天才だよ。頭が良い。さすが俺の親友！

お前はこんなことをしていいかって、倫理やら道徳やら、死者に対する尊厳やらを鑑みると絶対に勧められないって書いてたけど、俺にはそんなこと関係ない。やるよ。たとえば婦女暴行未遂では絶対に死刑にならないとしても、それも関係ない。

むしろここまでミウの自首したいっていう意志を撥ねつけ続けた甲斐があった気分さ。だって誰も傷つかない、完全なる解決法が見つかったんだから。

実は既にアスカにもこの考えを打ち明けた。この手の込んだ方法は一人じゃ無理だからね。当然、あいつに助けを求めることにした。アスカは俺のアイデアを聞いて（っていうかお前のアイデアか）、しばらく呆気にとられていたけど、俺以上にそのアイデアに感激してたよ。私も絶対に協力するよって、鼻の穴を膨らませながら意気込んだた。

だから明日、学校を休んで、アスカと一緒にその計画を実行する

つもりだ。

かなり面倒で、キツイ仕事になりそうだし、ミウどころか警察も騙すことになるわけだから、並大抵の覚悟じゃ失敗しかねない。でも俺の注意力と勇気を総動員して、完璧に成し遂げてみせる。

上手くいったかどうかは、すぐに手紙に書くから待っててくれ。

○月×日 ミキオより

第七章 ミキオの手紙 5

今日は疲れた。精も根も尽き果てたって感じだ。

でもこの計画の第一段階は上手くいったと思う。完全に上手くいったかどうか判明するのは、ミウや警察の反応が絡んでくる明日以降で、だから全ての結果が完全に判明してから手紙書いてもよかったんだけど、とにかくお前も事の成り行きが気になっているだろうから、この段階で報告しておくよ。

しかし難事業なんてものじゃなかったよ。想像を超える大変さだった。でもそれを成し遂げた俺とミウをお前も褒めてくれ。

まず頑丈なロープを入手するところからして大変だった。東京ならちょっと歩けばホームセンターやら、駅前のデパートやらにそういう専門の売り場があるから、その辺で余裕に入手出来るけど、この田舎でそれを手に入れようとすればわざわざ電車に乗って遠出が必要だ。

しかもその前にミウも騙さなければいけないから、何食わぬ顔をして学校に向かわなければいけなかったし。

だからこの計画はもっぱら時間との戦いだったと思う。ミウに怪しまれないためにあまり遅く帰るのもまずいし、死体を扱うんだからそういうのは日没までにやり遂げたかったし。

ちょっとだけ授業を受けて、お腹が痛い振りをして早引きした。アスカも時間通りに上手く学校を抜け出してきた、待ち合わせ場所にやってきた。それでまず、アスカの案内で町までロープを買いに出た。

平日の朝から、制服姿で街をウロウロしないといけなかったから、周りの目が気になったよ。しかしまあ、無事に駅前のデパートで口

ープは入手出来た。他にも軍手とスコップも買って、また電車で飛び乗った。

なかなかやって来ない電車も、このときはそれほど待つ必要もなかった。タイミング良く駅にやってきてくれたんだ。それに乗って地元の駅にとんぼ帰り。

それから駅前停めておいた自転車に飛び乗って、目的の場所、あの死体のあるはずの井戸に大急ぎで向かった。

そして誰にも見つからないようにこっそりと屋敷の庭に忍び込んだ。

俺はこのとき、その屋敷の庭に初めて足を踏み入れた。苔のついた石の灯籠が倒れていたり、飛び石が埋め込まれていたり、そこは立派な日本庭園がかつてそこに存在していたんだろうって感じのかなり広い庭だった。松の木や、俺の名前の知らないたくさんの木が植えられている。

目的の井戸は俺たちが入った門のすぐ近くにあった。俺たちはすぐにその井戸に向かい、躊躇なく作業に取り掛かった。

まあ、その前に、間違いなく服が汚れたりするだろうから、制服から体操服に着替えることにした。

時間が勿体ないから、井戸の前でさっさと着替えることにしたんだけど、そのときアスカなんて俺の前でも躊躇することなく、さっさと着替えてきて、俺がそれに気づいて慌てて後ろを向いたぐらいだ。俺たちは一分一秒も無駄にしたくないって感じで、焦りに焦っていたんだ。

体操服に着替え終わり、まず俺たちは買ってきたロープの端をすぐ近くの木に括りつけ、それを井戸の底に向かって垂らした。

深さ十メートル以上は軽くあったんじゃないか。井戸の底まで、いくら目を凝らしても見えなかった。石を落としても、落ちた音がなかなか聞こえてこないぐらいの深さ。

しかしどうやら井戸の水が完全に枯れているようだってことは、本当に有り難いことだった。お前もそれを心配してたよな。井戸の水の有無次第で、この計画の成否が左右されるかもしれないって。

井戸の中に入るまではけっこう覚悟が必要だったよ。

ちよっと手を滑らせたらずっ逆様で、下手したら怪我だけで済まないかもしれないし、井戸の底には気持ちの悪い虫やら爬虫類やらがウジャウジャいそうだし、それより何より、その底には死体があるんだ。そう思うと簡単には決心がつかなかった。

それに無事に底に辿り着けても、それから死体を回収しないといけない難事業が待っているわけだし。

崖の上から海に向かって飛びこまなければいけなくなった、あのときよりもビビってたな。あれも相当ビビってたけど、結局、飛び込めなかったんだ。しかし今回はどんなに恐くても実行に移さないわけにいかない。

俺が躊躇しているのを見兼ねてか、アスカが励ましてきたよ。まるで戦場に赴く兵士を送り出すような深刻な表情でさ。「頑張つて」とか、「気をつけてね」とか言ってる。あいつにしては珍しい、温かい言葉だった。

別にその声に背中を押されたわけでもないけど、俺もどうにか覚悟を決めた。軍手をつけ、死体回収のリュックを背負い、井戸の底に下りていった。

井戸の底は真っ暗だから、家から持ってきた懐中電灯を口にくわえて。でもその程度の光じゃ気休めにもならなかった。井戸の闇はこんなんで照らしきれない。

まあ、今こうやって無事に手紙を書けているわけだから、もちろん俺は無事に下まで辿り着けたわけで、だからあまりに大袈裟なこととは書きたくないのだけど、でも顔にムカデが落ちてきて、それが

しばらく俺の顔の上で散歩したときは、本当に手を離しそうになったんだぜ。

ヘビメタ・ミュージシャン並みに首を振って、何とか払い落したけど、あれはマジで危なかった。今から思うと無事に辿り着けたのは奇跡だと思えないんだよ。

それに井戸の底に近づくにつれ、何とも言えない悪臭が立ち込め始めた。俺はどうにも我慢出来なくなって二回ほど吐いたよ。そのとき口にくわえていた懐中電灯が真っ逆様に落ちていった。

一度上に戻って、鼻を洗濯バサミか何かでつまんで、やり直そうかと思ったくらいさ。でももう上のアスカの顔も見えないくらいまで降りて来ていた。だから吐き気を覚えながらも、とにかく一気にやり終えることにした。

鼻をつく悪臭の源は、腐乱した死体の匂いだと思っていたから、俺はとんでもない壮絶な光景を想像していた。だけど井戸に底に転がっていたのは完全に白骨化した死体だった。でもそこに確かに、死体はあったんだ。ミウの言った通りの出来事が起きていた証拠が。井戸の底に落としてしまった懐中電灯は、幸い潰れていなかった。それでそこを照らした。

完全に白骨化した死体は、ボロボロの衣服にボロボロのズボンを履いて、仰向けに窮屈な姿勢で横たわっていた。

こいつが今までミウを苦しめていた男かと思うと、何とも言えない気持ちになったな。だからって踏みつけたり、叩いたりなんてしていない。だってこれからこの男の存在を完全に抹消してやるんだから。それが何よりの復讐だろう。

ここからの作業は割合さっさと済ますことが出来た。俺だって空襲を体験してきたんだ。黒焦げの死体か、全身赤く焼け爛れて、皮膚や内臓を晒している半死の怪我人を見てきた。それに白骨化した

死体にはウジ虫もたかつてなかったし、予想した気持ちの悪い虫もウジャウジャいなかったし。

さすがに人間の骨を触るのは気が引けたけど、実際はただの木の枝を触ったくらい感触しかなかった。頭がい骨だって躊躇なく鷲掴みにしたよ。

むしろそれらが入ったりリュックを背負ったときの重みのほうが何とも言えなかったな。それは妙に軽かったんだ。この死体の不気味な存在感に値しない軽さっていうか。この軽さがミウを苦しめていたなんて信じられない感じだよ。

でもとにかく、この死体がここに一年以上に渡り、存在していたっていう証拠を完全にかき消せたと思う。お前のアドバイス通り、その死体の髪の毛を回収するために、その周りの土もちゃんとリュックに入れておいたよ。それから俺はロープを上って、井戸の外に出た。

上がるのは下りるよりもずっと簡単だった。それに死体を事もなげに回収し終えた俺はもう、さっきまでの俺じゃなかったからね。確実に一つか二つ、レベルが上がったと思う。そのせいか下りたときの半分以下の時間で外に出られた。

井戸の外に出て、悪臭から解放され、外の新鮮な空気がこんなに美味しく感じられたことはこれまでなかったよ。

金魚みたいに空気を求めて、何度も何度も深呼吸してたら、感極まったアスカが泣きながら俺に抱きついてきた。

一時間以上、俺は井戸の中にいてたらしい。もう上がってこないんじゃないかって思ったそうさ。

まあ、俺の心配をしてくれていたのは嬉しいことだったけど、自分の身体に沁みついた井戸の悪臭が気になって、慌ててアスカから身体を離れた。

それにまだ喜んでいる場合でもなかった。まだもう一つ難事業が

待っているんだ。「さっさとお次の作業にかかろうぜ」って言って、俺たちは山に向かって自転車を飛ばした。

この白骨化した死体を隠すためじゃなくて、一応、墓のようなものを作ってやるためにも。

誰にも発見されず一年以上ほったらかしにされてたんだ。この死体は本当に化けて出て、ミウを苦しめていたかもしれないんだから。面倒なことだけど、ちゃんと弔ってやることにしたんだ。

田舎だから、人が立ち寄らない場所には事欠かない。ロープを買うよりもずっと簡単に、墓を作るのに打ってつけの場所を見つけれた。

人が滅多に来ないような、入ってくるのは猟師か、カブトムシを取りに来るカブトムシ取り名人くらいしか来ないような森の奥。

その森の奥に穴を掘って、死体を埋めた。

スコップは持ち運びを優先したから、片手サイズのが一つしかなくて、充分な大きさの穴を掘るのにかなり手間取った。二人で交代しながら穴を掘って、終わったのは夕方の五時を過ぎていたかな。

昼食を食べる暇なく働き通しで、お腹はペコペコだったけど、俺はまだあの悪臭が鼻から取れなかったし、死体を間近で見て食欲は少しも沸いてこなかった。アスカのほうはどうか知らないけど、二人とも休息を取らずに働き続けた。

死体を埋める段になって、ちょっとアスカと話し合ったことがあった。その死体が履いていたズボンの後ろポケットに財布らしきものが入っていたんだ。

もしかしたらその中に免許なんかがあるかもしれない。それを見たら死者の名前も判明するけどどうするって、俺はアスカに提案してみた。

あいつは即座に首を振った。そもそもこんな人間、お姉ちゃんの前にも私たちの前にも現れなかったことにしたいって。それに名前

を知ったら、いくら悪人だからってちょっと情が沸きそうだし。

俺もその意見に賛成したよ。その財布の中に、この男の家族の写真が入っていない可能性もないわけじゃないんだし。そんなのを見たら、さすがに夢に出るよ。だから悪人は悪人のまま死んでもらうことにした。

しかしここに来る途中に買った花と、家の仏壇から持ってきた線香は死体の近くに供えた。

いや、線香はマッチやライターを忘れて火をつけられなかったんだけど。まあ、でもそういうのを供えて、しばらくその墓に手を合わせて二人で祈った。

悪いのはあんたなんだから、化けて出ないでくれよ。でもその代わり、その罪は問わないし、あんたのことを罵りもしないって。

勝手な祈りだったかもしれないけど、今のところ俺たちの身に悪いことは何も起きていないから、どうやら聞き入れてくれたようだ。

とにかくこれで一仕事、やり遂げたわけだ。

俺は一刻も早く家に帰ってシャワーを浴びたかった。ジメジメした井戸の中に長時間いたせいか、全身を虫が這いずり回っているような感覚があつてずっと不快だったんだ。

でもその帰り道、ちょっととした寄り道をした。偶然、前を通りかかったお寺で葬式が催されていたんだ。もちろん知らない人の葬式だよ。いくら田舎だからってアスカが誰もと知り合いつてわけじゃない。

だけど俺たちはこっそりその葬式に参加させてもらうことにした。全然別の人のためのお経を聞いて、その仏壇に手を合わせても全然意味はないのかもしれないけど、でも正式な死者を弔う儀式に参加したかったんだ。アスカも俺の提案にすぐに飛びついたから、同じような気持ちだったんだと思う。

それにこんなのは気のせいに過ぎないんだろうけど、死と接触し

たから身を清めたいって言う意識があったんだろうね。お寺で修行を積んだお坊さんのお経を聞けば、身体が清められそうじゃないか。

もちろん葬式に参列している遺族の人たちから、「何だ、こいつ」みたいな目で見られていた。

でも必死に祈っている俺たちを見たら、追い払う気も失せたんだろうね。お焼香までさせてもらったよ。だから本来弔われている人の成仏も、心の底から祈っておいた。写真で見たけど、とても人の良さそうなお祖母さんだったし。

まあ、そんなところだ。それが今日の一部始終かな。

最初にも書いたけど本当に疲れた。腕も足もぐったりだよ。でも難しい仕事をやり遂げたからか、テンションだけは異様に高くて、俺は一気にこの手紙を書き終えつつある。しかしいつもよりもちょっと長めの手紙を。

お前も読むのが大変になるような長さだろうね。でもそれぐらい大変な日だったってことだと思う。

俺は何か自分でも不思議なんだよ。こんな俺が他人のために身を粉にして動き回るなんてさ。

もちろん親友であるお前のためなら何でもするつもりだけど、別に大した恩もない奴のために（まあ、居候はさせてもらっているけど・・・）、こんなに働くなんてさ。そんな俺の姿をお前も想像出来なかったんじゃないかな。

帰り道、アスカにしみじみ言われたんだ。「あんたって本当は良い奴だったんだね」って。

今頃気づいたのかよってアスカに言っただけで、でも自分でも思ったんだよ。「俺も意外と親切なところがあっただな」って。

まあ、自分でそんなこと思う時点で、それ程でもないんだろうけどさ。だけど見事、しんどい仕事をやり遂げることが出来たと自分

でも思っている。

しかし意外って言えばアスカだって意外だった。

あいつはけっこう頼りになる奴なんだよ。最初はただの口うるさいだけのガキかと思ったけど、あいつがいなければこんな大それたこと絶対に出来なかったはずだ。

なんか自分でもよくわからないんだけど、あいつの前だと見栄を張ったり、背伸びしてしまうんだよな。でもそれが結果的に、プラスに働いた。自分の力以上の力が出たって感じた。

って何か俺は、大仕事をやり遂げて満足げに振り返っている感じになっているけど、本当はまだまだ安心するわけにはいかないんだけど。

完全にこの計画が成功したかどうかは、まだ明日以降の展開に掛かっている。俺がいい気になるのはまだまだ早い。

これからミウに、もう自首でも何でもしてくれて、何もかも諦めた振りをする。じゃあミウは自首するために警察に赴くだろう。そして警察がああ井戸を調査することになるわけだ。

まんまと警察が俺たちの偽装工作に騙されることを祈るけど、それが上手くいくかどうか保障はない。下手したら死体がどこかに持ち出されたことに気づいてしまうかもしれないんだから。

でも俺たちの計画通りに進めば、この事件自体が無かったことになるんだ。ミウはその男を井戸に突き落としただけで、その男はそれで致命傷を負うことなく、自力で井戸を脱出して、どこかに逃げたってことに。

すなわちミウは誰も殺してないってことに。

そうなればミウはこの罪の意識から逃れることが出来るに違いな。自分は人を殺したわけじゃなかったんだって、これまでの苦しみはただの早とちりのせいに過ぎなかったんだって、きつと罪の意

識から解放されるだろう。

まあ、お前の立ててくれた計画を、改めてお前に説明するのもな
んだけどさ。それにしても完璧な作戦だよ。

でもお前はどんなことでも嘘は嫌だって言ってたな。結果的にそ
れで救われる人がいても、人を騙して真実を覆い隠すのはどうして
も性に合わないって。

その気持ちももちろんわかるし、そんなお前に反論するつもりも
ないんだけど、でもこの世には神も許してくれる嘘だってあると俺
は信じている。

いや、俺はこれを嘘だなんて思っていない。

何て言えばいいのかな、もっと大それたこと、事実そのものの書
き換えっていうのかな、ただ単にうわべを誤魔化した程度じゃなく
て、この行動で世界を変えたつもりでいるんだ。

だから俺自身は、ミウに対しても、警察に対しても、何ら後ろめ
たい思いはないさ。むしろかつてない充実を味わっているくらいだ
から。

そういうわけだからお前も今回だけは大目に見てくれ。そしてこ
の計画が上手くいったら一緒に喜んでくれ。

ということでもたすぐに返事を書くからな。上手くいったかどう
か、出来るだけ早く知らせる。楽しみに待っていてくれ。

○月×日 ミキオより

第七章 ミキオの手紙 6

俺の手紙はお前のもとに届いているよな。

お前からの返事がいつまで経っても来ないから、それを待たずに書くことにしたんだけど、もしかしてエビ夫、怒っているのか？

警察もミウも騙した俺たちの嘘を。

お前は実は俺たちがあんな大それた計画を本気で実行するなんて考えてなかったとか？ それで俺と絶交しようとしているんじゃないよな。

まあ、何かの手違いだと信じている。しかしもしお前が本当に怒っているのだとしたら、こんなことを堂々と書くのはちよつと気が引けるんだけど、完璧にあの作戦は成功したよ。警察は見事に騙されてくれたようだ。

ミウはあまりの現実の変貌ぶりにまだ少しもついていけないようだけど、でもきつと少しずつこの新事実を受け入れて、完全に罪の意識から解放されることだと思う。

ミウは家からすぐ近くの交番に駆け込んだらしい。俺もアスカも付き添う間もなく、ミウは俺たちの意表を突いたタイミングでその行動に出たから、こっちも詳しいことはよくわからないのだけど、でも交番に行ったことが幸いしたと思う。

交番のお巡りさんの操作能力なんてそんなに科学的でもないだろうし、多分、俺と同じように懷中電灯を片手に井戸の底に下り、肉眼で死体があるかないか確認しただけだと思う。そしてお巡りさんはさっさと判断した。ここに死体はないって。

何ならミウに、君は警察をからかっているのかって叱責したかも

しれない。

そうじゃなくてミウの深刻な表情を見て、たとえこの事件があったと確信しても、下まで落ちずにどこかに上手く引っ掛かって、脱出したと判断してくれたんだろう。

まあ、あの井戸の形状を見て、そんなことがあり得ると判断したのだとしたら、ちょっとそのお巡りさんの能力を疑いたくなるけど、でも肝心の死体がどこにもないんだから、そう考える以外になかったんだろうね。

「君は誰も殺していないんだ」

とにかく警察はそう結論を下した。

警察にそうやって太鼓判を押されたんだから、ミウだってその事実を受け入れないわけがない。

でもまだ少しも実感がないようだ。

それもそうだと思う。これまであんなに苦しんでいたことが、ただの勘違いに基づいた早とちりってことになるんだから。ミウだってしばし呆然とせざるを得ないだろう。

しかしミウはこの事実を受け入れて、いずれこの新世界を楽しむ始めと思う。俺はそう信じている。

それもこれもお前のお陰なんだぜ。なのにどうして、返事をくれないんだよ。臍を曲げるなんてお前らしくないな。いったいどうしたっていうんだよ。

確かにお前が嘘を嫌いだっていうのは俺も知っているし、この計画に心の底から賛成してなかったのはわかってるけど、でもこれはお前のアイデアなんだから、怒るのもそれぐらいにして、とにかく返事をくれ。

その返事で俺の悪口でも何でも書いてくれればいいんだ。沈黙っただけは止めてくれ。さもないと俺は心配で堪らなくなる。訳のわ

からない妄想に頭の中を支配されるんだ。もしかしてお前の身に何かあったんじゃないかって、思ってしまうじゃないか。

とにかく返事を頼む。いくらお前が怒っていても、俺は渋谷の忠犬ハチ公みたいに、従順にお前の手紙を待っているぜ。

○月×日 ミキオより

第七章 ミキオの手紙 7

まさかエビ夫、どこか怪我したってわけじゃないよな。

もしかして目か？ だったら手紙も読めないよな。効き腕を怪我しても手紙は書けなくなる。確かに今の俺たちの遣り取りを誰かに代筆してもらうわけにもいかないし。

また東京で大規模な空襲があったらしいな。こっちにそのニュースが届いたのはその一週間後だ。それだけ、この空襲のやばさがわかるんだけど、これまでかすり傷一つ負わなかったお前が、今更怪我したなんて言われても俺は信じない。

もし手を怪我して文字が書けないのなら、白紙でいい。住所だけ誰かに書いてもらって、葉書でもいいからすぐに送ってくれ。

それともまだ怒っているのなら、何百回でも謝るからとにかく手紙をくれよ。俺は変わらずにここにいるから。

まあ、何らかの行き違いで連絡がつかなくなったただけだと思う。これだけ離れてて、しかも戦争で何かと混乱しているのだから、こういうことがあってもそれほどおかしくないよな。むしろこれまで何の遅滞もなく、手紙が届いていたことのほうが不思議だったんじゃないかな。

だけどせっかくこっちのほうで何もかも上手くいきかけたと思ったら、次はこんなことになるなんて。物事は何もかも同時に上手くいかないものだ。

ミウは日ごとに回復しつつあるよ。悪夢もうほとんど見ないよ。うだ。でも何だか別々に寝るのは寂しくて、今でも三人で同じ部屋で寝ているんだけど。そもそもミウを一人で眠れるようにするため

に、ミウの悩みのもとを探っていたはずなのに。

でもしばらくこのままでもいいかなと思う。せつかく三人でも眠るのに慣れ始めたことだし。

二人はお前のことを俺に聞きたがるんだ。俺がやけに熱心に手紙を遣り取りしている相手が気になるみたいだ。

あいつらはマジで俺とお前との仲を羨ましがっているよ。私はこれまで、ここまで信頼し合える親友はいなかったって。

お前もすぐここに疎開してこいよ。あいつらもお前だったら歓迎だって言ってるし。

実はもしかしたら、お前は密かにこっちに向かっているんじゃないかって俺は思っているんだけど。これまで何度もこっちに来いと俺は書いて送ってたし、機会があれば行くってお前も書いてたよな。

もしかしたらお前は俺を驚かすつもりで、こっそりとそんなことをしているんなら、当ててしまっただけで申し訳ないけど。

まあ、とにかく待っている。手紙でも、直接お前が来てくれてもどっちでもいい。俺は待っているから。

○月×日 ミキオより

第七章 ミキオの手紙 8

俺が送った手紙が宛先不明でこっちに返ってきた。お前の家に電話もしたけど、つながらないようだ。

でも俺は不思議なくらいお前の無事を確信しているんだ。

だってお前の夢も見ないし、いわゆる虫の知らせっていうのかな、そんなものないんだから。

俺とお前のこんなに特別な仲で、そういう合図も何もなく、勝手に違う世界に行くなんてことがあるとは思えない。いや、あつてはいけないだろう。だから俺はお前の身を少しも心配していないよ。

とにかくお前の無事を確信している。

しかし宛先不明で手紙が返ってきたってことは、お前の家は焼けてなくなってしまったってことだよな。

だったら俺はいったいどこにこの手紙を送ればいいんだよ？

○月×日 ミキオより

第八章 アスカの日記 1

○月×日

解決した。これで何もかも上手くいったのだと思う。お姉ちゃんはまだ完全にこの現実を受け止め切れていないようで、ただただ戸惑うばかりって感じなんだけど、きつとすぐに新しい事実慣れ、昔の明るかったお姉ちゃんに戻ってくれると思う。

「私、何もしてなかったんだって・・・」

夜遅く警察から帰ってきて私たちにそう告げたお姉ちゃんは、見ようによれば少し残念そうにも見えただけど、それもこれもかなり覚悟を決めていたのに、それが肩透かしをくらった格好になったからだろう。

お姉ちゃんは当分、家に帰ってこれれないと思っていたに違いない。それがあっさりと日帰りで帰ってこれたのだ。それどころかそんな事件なんてそもそもなかったと言われて。

一度、医者から死の宣告をされた患者が、別の病院で診てもらったらそれは全くの誤診で、実はどこも悪くないと知ったときのような心境だろうか。そんなことを書くと、病気で亡くなったお父さんのことを思い出されて、胸がチクリと痛くなったけど、でもまあ、そういうことなんだろう。

私はお姉ちゃんのその報告を聞いて、どうやって演技をすればいいのか迷ったけど、とにかく素直に大喜びをした。

お姉ちゃんにとって本当に思いもかけない結果だから、私にとってもそれは思いもかけない事実のはずで、本当はもっと呆然とした表情をしなければいけなかったのかもしれないけど、私はお姉ちゃ

んの一言を聞いただけで、予め結果を知っていた人のように喜んでしまった。

でもお姉ちゃんはそんな私を怪しんでいるふうもない。そんな余裕すらまるでないようだから。

一方、彼は頑張って複雑な演技をしていたようだ。

「えっ、いったいどういうことなんだよ」って、私からすればかなり白々しいリアクションをして、でもそれでお姉ちゃんに詳しい話をさせ、「おお、それは良かったじゃないか。世の中、こういうこともありえるんじゃないかな」ってことを棒読みで言いながら、この結果にリアリティを持たせるよう努力していた。

あまりに下手な演技で、思わず頭を抱えそうになったけど、でもお姉ちゃんは騙されてくれたと思う。

しかしお母さんはお姉ちゃんから事の一部始終を聞いて、寝込んでしまっている。

やっぱりかなりショックだったようだ。多分、ずっとお姉ちゃんが密かに悩んでいたのに、親として力になってあげられなかったことが。

「でも何事もなかったんだから良かったじゃない」と私はつとめて明るく言っておいたけど、お母さんにとってはそういう問題でもないらしい。

それに彼と私がこの二カ月ほどで少しずつ知ったことを、お母さんは一気に教えられた訳だし、そうすぐに受け入れることは出来ないだろう。

だけどとにかくハッピーエンドだ。

このハッピーエンドを祝うために、三人でどこか遊園地かショッピングでも出掛けたい気分だ。 あっ、そうだ、もうすぐお祭りもある。浴衣を着てそこに行くのも悪くない。

前は途中でケンカして最悪のデートになってしまったけど、もう
今回はそういうこともないだろう。早速、彼に提案してみようかな。
何だかこれから楽しい毎日になりそう。

第八章 アスカの日記 2

○月×日

さっきお姉ちゃんにポツリと打ち明けられた。お姉ちゃんは私の部屋にいきなりやって来たかと思うと、少しの前置きもなく、かなり重要なことを話し出したのだ。

別にこの一年近くの間、ずっと悪夢や罪悪感に悩まされていたわけじゃない。

確かに事件があつてすぐは、もちろん苦しんでいたようだけど、でもその苦しみのせいで周りから距離を取り始め、その結果、友達を失い、クラスメートたちからも孤立するようになって、人生に楽しいことが何もなくなくなってからは、全てがどうでもよくなって、罪の意識も薄れ、悪夢も全く見なくなった時期があつたって。

むしろ嫌なことがたくさんあつたほうが、お姉ちゃんは罰せられているようで気が楽だったらしい。

でもそれが突然、変わった。彼がこの家に疎開してきて、そしてある日、学校でからかわれているところを彼に庇われてから。

それからまたお姉ちゃんは、罪の意識と悪夢に苛まれるようになったらしいのだ。

「それまでは別にいつ死んでもいいって思ってたのに、それからはずっとかく生まれてきたんだから、人並みに恋したり、楽しいお喋りしたいって思うようになって、じゃあ、また悪夢を見るようになったの……。何て説明すればいいのかな、私はあんなことをしたんだから、やっぱりそういう資格はないって、改めて思い出された感じなのかな」

お姉ちゃんは私にそう打ち明けてきたのだ。

まあ、それが確かだとしたら、私やお母さんが長い間、お姉ちゃんの悩みに気づけなかったのも仕方なかったわけだ。お姉ちゃんはずっとその悩みに苛まれていたわけではなかったようだから。

お姉ちゃんが深刻に受け止め始めたのは。最近のことだったのだ。彼が現れて、お姉ちゃんが彼に恋をしてしまって、それでお姉ちゃんはまた改めて罪の意識にとらわれてしまった。

生きることそのものが罰だったお姉ちゃんの人生に、明るい光が差したから。その光がお姉ちゃんの良心を再度、苛み始めた。

だけどそれも彼のお陰で癒されもしたのだ。彼の存在は本当に本当にお姉ちゃんの中で大きいと思う。

でも私はちよつと複雑だ。

はつきり言って私は、お姉ちゃんのその恋を全面的に応援する気にはもうなれない。

いや、だからって邪魔する気はもちろんないけど、でもこれからもう勝手にやってとしか言いようがない。

何だか自分でもよくわからないけど・・・。

彼はそんなお姉ちゃんのことをどう思っているんだろうか。

彼もやっぱりお姉ちゃんのことをそういう目で見ているんだろうか。これだけ熱心に力になっていたんだから、当たり前かもしれないけれど。

でも最近、彼の顔が晴れやかじゃない。お姉ちゃんが元気になるにつれて、逆に彼は徐々に沈んでいつているようなのだ。

もしかしてお姉ちゃんが元気になるにつれて、寂しさでも感じているのだろうか。どんどんと親離れしていく子供を持つ親のような心境。

いや、でもそんな感じでもないと思う。彼はもう何か別のことに
気を取られているよう。夕食のときも、テレビを見ているときも、
明らかに心あらずって感じで、常にソワソワしている。いったいど
ういうことなんだろうか。

どこか三人で遊びに行こうって話しもまだしてないから、そのつ
いで彼に何かあったのか尋ねてみよう。何だか本当に心配なのだ。

第八章 アスカの日記 3

○月×日

彼が落ち込んでいる理由がわかった。文通している東京の友達から手紙が届かなくなったかららしい。

「ついに愛想、つかされたんだ」って、彼をからかおうと思い冗談でそう言ったら、「そうなのかもな」って、涙を浮かべながら言われたので、心臓が止まるくらい驚いてしまった。

私は馬鹿だ。すっかり忘れていた。今、この国がどんなに大変なことになっているのかを。東京にまた大規模な空襲があったってニュースを見たばかりだったのに。

日本全国各地の都市のどこかで、ほぼ毎日、敵の爆撃機が爆撃を行っている。それによって被害者がたくさん出ている。彼もその爆弾を避けるためにここにやってきたんだ。

なのに私はそんなことも忘れ、馬鹿みたいな冗談を言ってしまった。

それから私は何も言えなくなってしまった。これまで散々お姉ちゃんを助けてもらったのに、彼には気休めの言葉すら投げ掛けてあげられなかった。

しかも自分の不甲斐なさに耐え切れなくなって、彼の前から逃げるように去ってしまった。そんな私の挙動が、彼の感じている予感を更に不吉さにさせてしまったかもしれない。本当に最悪なことをしてしまった。

これからまたすぐ、夕食のときに顔を会わすけど、どうやって慰

めの言葉をかけたらいいのかわからない。

いや、それ以上にわからないのが、どうしてこんなことが起きてしまうのかってことだ。

だって彼はお姉ちゃんをあゝの苦しみから解放するっていうすごいことを成し遂げたはずで、むしろ何か幸運なことが起きてもいいはずなのに、それなのに全く逆のことが起きているんだから。

世界がそんな仕組みで出来ているんなら、誰もいいことしなくなるんじゃないの。神様はいったい何を考えているのかって本気で怒りたくなる。

まあ、もちろん、まだ彼の友人が空襲の被害にあったって確定したわけじゃない。もしかしたら神様は脅かすだけ脅かして、実は無事でしたっていうオチを用意しているのかもしれない。

だったらいいのに。

とにかく今はそれを祈ろう。それくらいしか私に出来ることはないのだから。

○月×日

彼が電話口で泣いていた。見ていられなかったから、私はすぐに自分の部屋に上がったんだけど、あとから彼もドタドタと階段を上がり、自分の部屋に駆けこんでいく音が聞こえた。私は彼と入れ違うように部屋を出て、下に降りてお母さんに何があったのか尋ねた。東京にいる彼のお母さんから、彼の親友が亡くなった報せを聞いたらしい。

「ミキオ君宛ての手紙が何通も東京から来てたでしょ。その友達が空襲の被害にあったらしいの」

お母さんも彼にとってその友人がどれだけ大切か知っていたように、本当に痛々しそうにそう言った。

「あんたも慰めてあげなさい。最初はどうなるかと思ったけど、最近じゃ三人で一緒に学校に行くくらい仲良くなったでしょ」

お母さんは呆然としている私に向かって、お尻を叩くようなハキハキとした声でそう言ってきた。

お母さんにそう言われたからってわけじゃないけど、私は努力している。少しでも彼のその悲しみを癒してあげたいって思っている。だけど今の彼はとりつく島もないといった感じだ。食事も摂らず部屋に籠ったままだから、おかずをお盆に載せて持っていったあげたんだけど、そのとき私が何か言おうとしたら、その気配を彼は機敏に察知したのか、まだ私が声を出す前にピシヤリと言われた。

「俺のことは放っておいてくれよ」

あまりにそのとき、彼の声がするどく突き刺さってくるようだったので、思わず「ごめん」って謝ってしまった。

ただ慰めようと思っただけに、別に悪いことをしたわけじゃないのに、どうして大きな声を上げられただけで謝ってしまうんだろうか。

まあ、だけど、今の彼は、下手に慰められるのも鬱陶しいんだろうな。

彼の気持ち理解出来ないわけじゃ全然ないから、しばらく彼の言う通り、そっとしておきたいと思う。

お姉ちゃんのとくみみたいに、この出来事もなかったことに出来ないだろうかって、ふと思った。例えば私が彼の友人の代わりに彼に返事を書いたりして、実はどこかで生きているってことに。

でもこんなことをしてもすぐにばれるに決まっている。彼とその親友は本当に仲が良かったんだから・・・。

お姉ちゃんの場合と訳が違うんだ。彼とその親友の絆の間に、
なんてものが介在する余地はないだろう。

第八章 アスカの日記 4

○月×日

彼は学校を休みこそしないけど、食事もほとんど摂らず、一言も喋らず、でも周りをはばからないで、ただただ悲しみに明け暮れている。

と言っても私たちの前で泣くわけじゃないんだけど。しかし落胆と絶望と、そして無慈悲な運命に対する怒りを少しも隠そうとしない。

私が同情の眼差しで見つめているだけで、彼は私をにらんできて、「何なんだよ、ケンカ売ってんのかよ」って本気で怒ったように言ってきたりするのだ。

そんなわけじゃない。

そう言っただけで、彼は彼と話しようとしたんだけど、「俺のことは放っておいてくれ、お前に関係ないことだ」と言っただけで、彼は私の鼻先でシャッターをガシャッと下ろしてしまう。

でもそんなこと言われても放っておけるわけがない。だって今度是我们たちの番なんだから。

「人は助け合って、弱いところを見せ合って、それでつながっていくんじゃないの！ そうじゃないとどんなことも乗り越えられない……。だいたいあんたがそれを教えてくれたんじゃない！」

私は彼が閉じようとしたシャッターをこじ開けながら、そう怒鳴ってしまった。

彼は下を向いたまま、何も答えてくれなかった。そして今に至っても、その答えはまだない。

もしかしたら言い過ぎてしまったのかもしれない。彼は本当に悲しくて、まだ何かを考えられるような状態でもないのに、ただ私は彼のつれない態度にムカツとしてしまって、偉そうに説教めいたことを言ってしまったんだ。

もちろん間違ったことを言ったとは思っていないけど。でもそれを言うタイミングとか、言い方とか、そういうのは間違ってしまったかもしれないって反省している。

とにかくさっさと謝ったほうがいいだろう。さもないと二度と、彼は口を聞いてくれないかもしれないから。

っていうか、私はいい加減、自分のこのすぐにカツとなって思ったことを口にしてしまう性格を直さないで。

自分でもよくわからないんだけど、なぜか彼の前だと口調とか態度はきつくなってしまう気がするんだ。そんなんじや、今回のようなことがなかったとしても、いつか本当に彼に愛想を尽かされそうだった。

彼はまだ眠るときお姉ちゃんの部屋に来てくれる。そのときにもさつきはごめんって謝っておこう。そしてそれを最後にもう余計なことを言うのは止めよう。

こういう細かい気遣いを必要とするのは、お姉ちゃんかお母さんに任せるかして（って言っても、お姉ちゃんは相変わらず彼の前ではモジモジしているだけだけど、）、私はもうお釈迦様か聖母マリア様みたいに、彼を静かに見守ってあげたい。

まあ、お釈迦さまも、聖母マリア様も、実際どういう人なのかよく知らないけれど、でもきつとたくさんの人に慕われているのだから、凄い人なんだと思う。私もそういう優しい人間になればって思うんだ。

第八章 アスカの日記 5

○月×日

昼休み、彼が私の教室に突然やってきた。

なんかムツとした顔をしていたし、「ちょっと屋上に来いよ」って声も荒々しかったから、てっきり昨日のことで文句でも言われるのかと思いきや、でもそうじゃなかった。屋上に着くや否や、彼は何だか自分自身を嘲笑うような口調で言ってきた。

「それもこれも、とんでもない嘘をついた罰かもしれない」って。

「えっ？」

私は彼の言っていることが少しもわからなかったから何も言葉を返すことが出来ず、いぶかしげに彼を見つめ返すことしか出来なかった。

すると彼は面倒臭そうに説明し始めた。

「だからエビ夫が言ってたんだよ、えーと、エビ夫って俺の文通していた親友だけど・・・、あいつがさ、ミウを助けるためとはいえ、真実を誤魔化していいものかって。結果的にミウは俺たちに騙されているわけだろ？ 本当は井戸の中に死体があったのに、そんなのなかったって嘘をついた。俺たちは一生、それに関しては嘘をつかないといけないわけだ。エビ夫は本当にそれが良いことなのかって手紙で書いてきたんだ。たとえどんな事情であろうと、俺たちに真実を覆い隠す権利なんてないんじゃないかって。それはまるでミウを一人前の人間として扱ってないみたいだって・・・。もちろん俺はその意見に賛成出来なかった。その何が悪いんだよって、手紙でケンカしそうになったくらいさ。今でも悪いこととは思っていない」

そこまで言って彼は少し沈黙した。そしてまた話し始めた。

「しかしやっぱり神か何だかも知らないけれど、そんなのも怒ったみたいだね。だから俺は嘘をついた罰として、親友を奪われたのかもしれない……。ってね、そんなことありえないだろうけど。でもマジで最初はそう思ってた」

なんて言葉を返せばいいのかわからなかった。そんな馬鹿みたいな思い込みだっと思ってたけど、彼の口調は真剣で深刻で、本気でそう思っているようだったのだ。

それに何だかショックだった。だって彼があのことを誇りに思っているんじゃないかって、まるでその反対、罪の意識を感じているなんて思いも寄らぬことだったから。

あんなことをしたから、自分の身に不幸が降りかかってきたって、彼は解釈しているんだ。

確かに私たちは嘘をついたけど。警察もお姉ちゃんも騙したけど。でもそれでお姉ちゃんは救われたじゃない。

だったらお姉ちゃんに本当のこと言うつもりなのって、私は彼に尋ねた。

私はそれに絶対反対だ。確かに彼の言う通り、嘘が悪いことだっていうのは一面では真実だと思う。でもお姉ちゃんが、また前のような暗いお姉ちゃんに戻ってしまうのは、妹として絶対に嫌だ。賛成出来ない。

彼は私の言葉にすぐに首を振ってくれた。

「もう俺は神に親友を奪われたんだから、今更悔い改めるわけないじゃないか……。このまま永遠に嘘をつき続けるよ」

彼は挑戦的な口調でそう言った。私に言ったというよりも、多分、彼の親友を奪った神か運命に。

「俺は別に嘘が全て悪いなんて思っていない。だいたい俺の人生なんてほとんど嘘ばかりなんだから・・・」

「そうだよ、テスト全部百点とか言ってたもんね」

彼が苦笑いを浮かべてそう言ったから、私もそれに合わせてそんな軽口を聞いた。

「そうそう、百点どころか前のテストは平均七十点ぐらいだったよ、本当に嘘なんて平気でついてきた・・・でもエビ夫はけっこう生真面目なタイプでさ、何事も極限まで突き詰めて考えるタイプなんだよ。道徳とか、倫理とか、真実とか、本当に大切なことは何なのかとか・・・」

彼は一瞬、言葉に詰まったかと思うと、突然、シクシクと泣き始めたので、私は驚きのあまり、全身が凍りついたようになって彼を見つめた。

「しかし嘘をついた俺を神が怒っているんだったら、俺を殺してくれたらいいのに。どうしてあいつなんだよ。そんなの無茶苦茶じゃないか・・・いや、だから、それとこれとはやっぱり関係ないんだろうな。あいつは別に、神とか因果とかそんなの関係なく、ただ死んだんだ。その他大勢の被害者と一緒で、逃げ遅れて死んだだけ」

そう言って彼は泣き始めたのだ。ポタポタと涙を流し、今にもその場に崩れ落ちてしまいそうなくらいに。

私はどうしていいのかわからずオロオロしていたら、彼はにらむように私をじっと見つめて言ってきた。

「この前、人は助け合って、協力して、悲しみを乗り越えていくもんだって言ってたよな。じゃあ、例えばお前はどやって、この俺を助けてくれるんだよ」

「えっ・・・」

彼の突然の申し出に驚いたけど、私は驚きから必死に立ち直り、

頭をフル回転させて、必死に答えた。

「も、もうすぐさ、近所の神社で夏祭りがあるから、三人で遊びに行こうよ」

そこはどんな場所よりも楽しいところだという気持ちを込めて、私は満面の笑みを浮かべて言った。

「それくらいで、俺のこの悲しみが癒せるかよ」

だけど彼は吐き捨てるようにそう言ってきた。

「で、でも夜店があつて金魚すくいとかできるし、リング飴とか綿菓子とか美味しいし、きっと楽しいよ」

「・・・ふーん」

彼は私の言葉を怪しむように首を傾げていたけど、仕方ないって感じで頷いた。「じゃあ、まあ行ってもいいけど。他には？」

「えっ？ 他？ ・・・えーと、じゃあ遊園地なんてどう？ ち

よつと遠いけど、子供の頃から何度も行ってる遊園地があるんだ」

「わかった、それも行こう。他は？」

「えっ？ まだ。えーと・・・」

そんなにせっつかれても、すぐには思いつかなくて言葉に詰まったら、やっぱりお前じゃ頼りにならないって言われた。

まあ、確かにそうかもしれない。だけど絶対に約束は守るつもりだ。

私は絶対に、何が何でも彼の悲しみを忘れさせてみせる。

いや、忘れさせるっていうのは何だかおこがましい感じがするし、それは到底無理なことかもしれないんだけど、でも私は努力に努力を重ねて、その亡くなった親友さんに近づけるくらい、彼にとって重要な存在になりたい。

そうしたら彼の悲しみも和らぐと思うから。

だから今はちょっと辛いかもしれないけど、ちょっとだけ待っててよ。

第八章 アスカの日記 6

○月×日

もう言っちゃいたい。

私の胸に渦巻いているこの感情を思い切って告白したい。
でも彼はまだそれどころじゃなく、そんなことを言われても検討するの面倒な気分だろう。だから私は代わりにお姉ちゃんの部屋の扉を叩いた。それで私はお姉ちゃんにこんなことを宣言してしまったのだ。

「お姉ちゃん、私も彼のこと好きになったみたいだから」って。

こういうの、仁義を切るっていうんだろ。何か彼に向かって言うよりも、恥ずかしかったっていうか、緊張したっていうか、でもとりあえずお姉ちゃんには言っておかなければいけないような気がしてきたら、居ても立ってもいられなくなったのだ。

でもお姉ちゃんは何も言い返してこないで、ただ私をじっと見てくるだけだった。

私は彼の部屋に聞こえないよう適度にボリュームを抑えて言ったので、もしかしたらお姉ちゃんに聞こえなかったのかって思った。だからもう一度、さっきの世にも恥ずかしいセリフを言おうとしたら、お姉ちゃんが突然口を開いて言ってきた。

「アスカちゃんはもてるじゃない」

「えっ？ も、もてる？」

本当に私はお姉ちゃんの言葉が聞き取れなくて、聞き返した。

「そ、そう。クラスでも人気あるでしょ。だから誰とでも、素敵な人と付き合えるわ」

「そ、そんなことないよ！」

そこまで言われてようやくお姉ちゃんの言いたいことがわかった。正直、もてるって言われて満更でもない気になったけど、しかしお姉ちゃんは私のことを買いかぶり過ぎている。別に私なんてモテモテなわけじゃない。

それにお姉ちゃんは涙ぐみながら、まるで哀願するようにこうも言ってきたのだ。

「でも私には彼しかいないの。邪魔しないでよ、お願いだから・・・」

まさかこんなセリフを言い返されると思わなかったから本当に驚いた。いくつか予想していた回答になかった答えが返ってきたのだ。私はしばし呆然としてしまった。だけど当然、こんな泣き落し作戦を取られたって、私も「はい、そうですか」と退くわけにいかない。

「そ、そんな無茶苦茶よ。じゃあもてる人は自分の好きな人と永遠に付き合えないじゃない。それに私、お姉ちゃんと思うほどもてるわけじゃないし」

「でも！」

「でもないよ。お姉ちゃん、そんなの勝手過ぎるよ」

「でも最初に好きになったのは私なんだから」

「・・・た、確かにそうだけど」

それは私も悪いと思ってる。私がお姉ちゃんの立場だったらムツとするのは間違いない。

「でも私も好きになっちゃったんだから・・・」

「そんなのずるいわ」

「仕方ないじゃない、お姉ちゃん」

それで私たちはしばらくにらみ合った。

いや、お姉ちゃんはすぐに私から目を逸らしたから、にらみ合った時間は短かったけど、でもずっとムツとした表情でどこかを見ていた。

そんなお姉ちゃんの横顔を私はずっとにらんでいたら、「いつまで私の部屋にいるのよ」って表情で私をチラッて見てきたので、私は「まあ、だからそういうこと」って言ってさっさと部屋を出た。

まあ、それで終わっていたら、ただただお姉ちゃんは憎たらしい、自分勝手な女ってことで突き放すことが出来ただけ。

だったら私はお姉ちゃん存在を何も気に止むことなんてなかったのに、でもそれから少し経って今度はお姉ちゃんが私の部屋にやってきた。それでこんなことを言ってきたのだ。

「やっぱり諦める。アスカちゃん、頑張つてよ。私は贅沢過ぎたわ。多くのことを望み過ぎた。彼にあれだけ親身になってくれたんだけど、感謝しないといけなかったのに・・・」

「ちょっと待ってよ、お姉ちゃん、本気で言ってるの、それ？」
これが私のお姉ちゃんなのだ。

気が弱いつていうか、心が優しいつていうか、争い事が嫌いで、平和主義者で、この荒々しい世界でいつも悲しそうに、窮屈そうにしている美しい生き物。

「・・・ほ、本気だけど」

お姉ちゃんは不思議そうに私を見てそう言った。

「どうしてそんなに極端になるのよ。別にお姉ちゃんが諦める必要ないじゃない」

「そうだけど、でも・・・」

「だいたいそんなの彼が決めることでしょ。もしかしたら、私たちどっちも選ばれないかもしれないんだし・・・」

「アスカちゃん、可愛いじゃない。大丈夫よ」

「大丈夫じゃないよ。お姉ちゃんも可愛いじゃない」

私はそう言いながら、寂しそうに俯いているお姉ちゃんの横顔をそっと見つめた。

雪みたい白い肌、綺麗な黒い髪、優しくて小さいつぶらな瞳、全部、私の憧れなんだから。

「だから、とにかく頑張ろうよ」

あれ？

なぜだか私はライバルを応援していたんだけど、でもまあ、これでいいと思う。こんなんでお姉ちゃんに諦められたほうがすっきりしないんだから。

お姉ちゃんも多分、納得したようだ。

いや、相変わらずお姉ちゃん表情や反応からだけじゃ、何を考えているのかよく理解出来ないけど、でもそうは言ってもお姉ちゃんだって好きな人を簡単に諦められるわけがないんだ。さっきの言葉が本心だったとは思えない。

第八章 アスカの日記 7

○月×日

夏祭りは雨が降って中止だ。せっかく彼をそこに連れて行って楽しませてあげようと思ったのに本当に残念で、私は恨めしげに空をにらんでいた。だけど夜には雨もやんだから、中庭で花火をすることにした

そのおかげで、せっかく買った浴衣は着ることが出来た。まあ、夏はこれからだからまだまだ着る機会はあると思うけど、だけど今日を楽しみにしていたんだから、次のチャンスなんて持てるわけもない。

髪をポニーテールにして、うなじを見せたりなんかして、ちょっと薄く化粧もしてみた。

変なところはないか鏡で何度もチェックして、息を整え、先に彼が一人で花火をしている庭に出ていった。

でも彼はそんな私を見て、「せっかくこんな綺麗に着飾ったのに、雨が降って残念だったな」ってあくび混じりに言うだけだった。

別に。

それに街のみんなに見てもらう必要なんてないから。

その後すぐ、お姉ちゃんもお母さんに綺麗に髪を整えてもらい、庭に来た。

彼はお姉ちゃんの浴衣姿を見て、何を言うか耳をそばだてていたんだけど、でも別に何も言わず、次の花火に火をつけ出した。

いや、ちょっとつとりとお姉ちゃんを見たかもしれない。

でもお姉ちゃんには何も言葉を掛けなかったことも確かだ。とり

あえずまだ引き分けてことでいいか。

線香花火はオレンジ色に輝いてパチパチと輝いて綺麗だった。花火は打ち上げ花火くらい壮大なものか、小さくて優しい感じがする線香花火が一番だと思う。

でも私がそう言っても、彼から気の抜けた返事しか返ってこなかった。彼はひたすら、線香花火の炎を見つめるだけ。

線香花火の瞬く炎の中に、亡くなった親友の思い出でも見ているのだろうか。そんな切ない横顔だった。

これじゃあ、彼を慰めるはずが逆効果だ。

しかしそのときお母さんが庭に出てきた。そしてしばらく無言で私たちを見ていたかと思うと、彼にポツリとこう言った。

「こんな美人な女の子と一緒に花火が出来て贅沢ね。しかも二人も」

彼は自分の娘に対するちょっと手前味噌なお母さんの冗談を鼻で笑いながら、どこに美人な女の子がいるんですかって感じて辺りを見回していた。「この辺りにはいないみたいですよ」って言って。

まあ、そんな彼の表情を見ていたら、多分ちよつとは元氣が出てきているんだなって思えた。

昨日よりは今日、そして多分、今日よりは明日って感じで。だって二、三日前にはこんな微笑みは見られなかったんだから。

だったらそんなに焦らなくても大丈夫だろう。きっとこの悲しみもいつか時間が解決してくれるんだと思う。

私だってお父さんを亡くしたときは、世界が終わったくらいの悲しみを感じたけど、それも時間が和らげてくれたんだ。

まあ、もちろんそのときはお母さんやお姉ちゃんがいてくれたから、一緒にその悲しみを乗り越えられたんだだけ。

でもそれと同じように彼にも、私が傍にいて、お姉ちゃんやお母さんもいるんだから。大丈夫。

そうだ、久しぶりにお父さんのお墓参りに行こう。

色々とお父さんに報告しないといけないこともある。お姉ちゃんのこととも内緒にしとけないし、彼の天国の親友のこともお父さんに話して、よろしくって言うておこう。

彼も誘ったら来るかな。

彼は亡くなった親友に花を手向ける場所も、お線香をあげる場所もないんだ。だからせめてお父さんのお墓でその代わりをするのはどうだろうか。多分、同じ天国に通じているはずだから。

よし、是非誘ってみよう。まあ、もしかしたら鬱陶しいから、これ以上俺にかまうなって言われそうだけど。

最近、彼によく言われるんだ。お前は意外にお節介で、世話焼きな女だって。

でも心配なんだから仕方がない。

ちよつと前に私はお釈迦様か聖母マリア様みたいに静かに彼を見守りたいって宣言したけど、もうあれは撤回する。

彼の落ち込んでいるのを遠くで見守っているのは、やっぱり私の性に合わないんだ。

これからは少々撥ねつけられようと、おかまいなしに世話を焼いてやろう。

第八章 アスカの日記 7 (後書き)

終わりました。

最後まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0290v/>

シトシトと降り続く雨のブルー

2011年8月31日12時08分発行